14. 5-184
1200501215131
14.5
184

始

5E-9

14.S
184

史蹟調査報告 第三

奈良縣に於ける指定史蹟

第一册

内務省

帝國圖書館藏

史蹟調査報告　第三

奈良縣に於ける指定史蹟

第一册

有寄贈本

145-184

凡例

一、奈良縣に於ける指定史蹟は、現今二十八箇所に達して居るが本報告は其内比較的古代に屬する十四箇所に就て調査せる結果を報告したものである。

記述は圖版との關係を密接ならしめ、考說に亙ることは可成簡潔にし、事實の正確を期したが、指定史蹟の地位を示す爲めには附近の史蹟名勝に言及した場合が多い。

一、奈良縣の指定史蹟は從來各方面に於て、調査研究されて居るが本報告は更に新なる調査を加へ、史蹟の形態及び構造に關する測定は、全形測量竝に發掘法に據る局部的測量を實施せる結果新に發見せられた部分も尠くない。

一、奈良縣の史蹟は、我が建國史の舞臺となつた地方に所在するの故を以て其の形態構造の特色を如實に表現する必要上、尙多くの寫眞版を揭げたいのであるが、本報告の體裁上、已を得ず、基本的のものを選び、實測圖竝に本文と相照應せしむることを主眼とした

一、圖版に揭ぐる實測圖は一、二を除くの外、總て報告者の原作に係り、寫眞は古墳内部及石佛は奈良市松岡寫眞師の撮影を用ひ、石佛等數葉は、地理課の既成寫眞を使用し古墳出土遺物は宮内省諸陵寮竝に帝室博物館のものを借用した外す

べて報告者の撮影せるものである　又各史蹟の位置を示す爲めの地形圖は總て陸地測量部のものを分載したのである。

一、本報告の調査に際し、本省地理課の諸氏を始め、宮内省諸陵寮、東京帝室博物館、東京京都兩帝國大學及び奈良縣の諸氏に負ふ處が尠くない。今一々其芳名を列擧せずと雖此處に深く其好意に對して感謝する次第である。

昭和貳年十一月

於内務省　上田三平

奈良縣に於ける指定史蹟　第一册

目次

一　宮山古墳……一
二　巣山古墳……九
三　西山古墳……一七
四　花山塚古墳……二一
五　文殊院西古墳……二七
六　牽牛子塚古墳……三三
七　菖蒲池古墳……三九
八　中尾山古墳……四五
九　酒船石……四九

圖版目次

第一　宮山古墳實測圖
第二　宮山古墳北面
第三　宮山古墳南面
第四　宮山古墳後圓部八幡神社(上)前方部正面(下)
第五　宮山古墳後圓部頂上の石材(上)東長池堤防上の古墳石室天井石(下)
第六　巣山古墳實測圖
第七　巣山古墳西面
第八　巣山古墳後圓部石室甲(上)乙(下)
第九　巣山古墳出土勾玉及車輪石
第一〇　巣山古墳出土車輪石
第一一　巣山古墳出土鍬形石
第一二　巣山古墳出土鍬形石
第一三　巣山古墳出土鍬形石
第一四　巣山古墳出土石製刀子(上)管玉、白玉(下)
第一五　巣山古墳出土(勾玉、管玉及巣玉)
第一六　西山古墳實測圖
第一七　西山古墳南面
第一八　西山古墳東北面(上)西山古墳附近の古墳(下)

一〇　頭塔……一五
一一　行基墓……一六
一二　宇智川磨崖碑……一九
一三　春日山石窟佛……一九
一四　地獄谷石窟佛……一九

圖版目次

第一九　花山塚古墳石室實測圖
第二〇　花山塚古墳奥室正面(左)羨道部正面(右)
第二一　花山塚古墳奥室石扉(左)玄室羨道の堺(右)
第二二　花山東塚石室ミ黄金塚石室
第二三　文殊院西古墳實測圖
第二四　文殊院西古墳石室實測圖平面及側壁面
第二五　文殊院西古墳西南面(上)羨道入口(下)
第二六　文殊院西古墳玄室奥壁部(上)對羨道部(下)
第二七　牽牛子塚古墳實測圖
第二八　牽牛子塚古墳石室實測圖
第二九　牽牛子塚全景
第三〇　牽牛子塚古墳石室前面及内蓋(上)前面及外蓋(下)
第三一　牽牛子塚古墳玄室東室(左)西室(右)
第三二　菖蒲池古墳石室實測圖
第三三　菖蒲池古墳石棺實測圖
第三四　菖蒲池古墳全景(上)石室前面(下)
第三五　菖蒲池古墳石室内の石棺
第三六　中尾山古墳實測圖
第三七　中尾山古墳石室實測圖
第三八　中尾山古墳頂上全景(上)石室天井石(下)

第三九　中尾山古墳石室天井石南面(上)西面(下)
第四〇　酒船石實測圖
第四一　酒船石側面(上)及全景(下)
第四二　酒船石表面
第四三　頭塔實測圖平面及斷面
第四四　頭塔全景
第四五　頭塔西北隅(上)及南面(下)
第四六　頭塔東面下段石佛(上)及西面下段石佛(下)
第四七　頭塔西面石佛拓本寫眞
第四八　頭塔東面石佛頭部
第四九　頭塔南面下段石佛(上)及北面下段石佛(下)
第五〇　頭塔南面中段東部石佛(上)及西部石佛(下)
第五一　塔南面中段西部石佛拓本(上)及實寫(下)
第五二　頭塔北面上段石佛(上)及中段石佛(下)
第五三　頭塔南面下段西部石佛(右)及西面下段南部石佛(左)
第五四　頭塔南面中段上の石佛(右)及西面下段北部石像(左)
第五五　頭塔頂上五輪石塔及西面上段の石佛
第五六　生駒山と東麓丘陵元竹林寺境内
第五七　行基墓指定地域(上)及文殊堂土壇(下)
第五八　舍利瓶破片(上)及行基菩薩木像(下)

圖版目次

第五九　竹林寺境内圖(右)　文殊堂扉(中)十三重石塔(左)
第六〇　興山往生院　美努連岡萬墓誌出土地
第六一　宇智川磨崖碑指定地域實測圖
第六二　宇智川磨崖碑全景(右)　同　碑面(左)
第六三　宇智川磨崖碑拓本寫眞
第六四　宇智川磨崖碑佛像及文字(實大)
第六五　春日山及地獄谷石窟佛配置圖
第六六　春日山東石窟全景
第六七　春日山東石窟西壁の彫像
第六八　春日山東石窟西壁地藏尊像(半身)
第六九　春日山東石窟東壁石佛
第七〇　春日山西石窟石佛全景
第七一　春日山西石窟石佛全身(右)及其頭部(左)
第七二　春日山西石窟銘文
第七三　春日山石窟上屋
第七四　春日山及地獄谷石窟實測圖
第七五　地獄谷石窟佛奥壁面
第七六　地獄谷石窟奥屋中尊拓本
第七七　地獄谷石窟奥壁兩挾侍
第七八　地獄谷石窟左右壁石佛

奈良縣に於ける指定史蹟

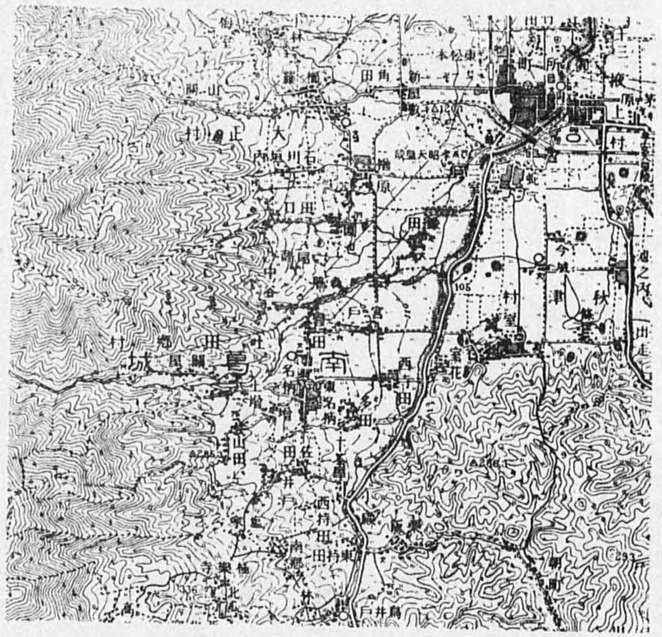
一　宮山古墳

圖版第一——第五

南葛城郡秋津村大字室の地籍に在つて大部分山林となつて居る。五所町から五條街道を南に向ひ約二十數町を行くと雜木林の長く連つてゐる、丘陵群を背景にして、頂上に老松の繁つた森を見るであらう。森の續きに一叢の藪があり、雜木の繁茂した獨立の低い丘が眼前に浮んで來る之れ卽ち宮山古墳である。

後方の丘陵群は南から東北に延びて、葛城川と曾我川の分水界を爲し、大和平野の西南の極を形成するのである。丘陵の麓には諸所に古墳の分布があつて、隣大字の條には大形の石室あり棺蓋に八個の繩掛凸起を有する石棺がある。附近には石室の半ば崩壞せる圓塚もある。皇陵として東に日本武尊陵、東北に孝安天皇陵がある。東方曾我川の沿岸地域では葛村の地籍に多數の古墳がある。

宮山古墳の西に近く、葛城川北流し西三十度南に金剛山高く聳え、廣き東の斜面には葛城村の聚落が發達してゐる。大正七年五月銅鐸と共に雙鈕細線文鏡を出土して著名となつた吐

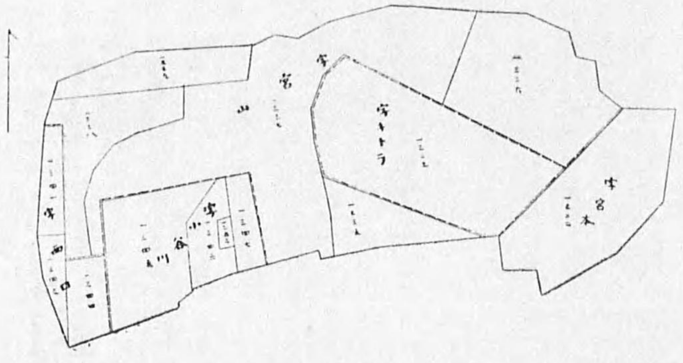


宮山古墳位置

田郷村大字名柄も接壤地である。北は一面大和平野に屬して居るので眺望頗る廣闊である。

所在地附近は上代の葛城國造の統治に屬して居つたと認めらるる地域で、其祖神を祀つた高鴨、鴨都波等の神社がある。

古來牟呂波加又は室の大墓と稱へられ、天皇山とも呼び、宮山として聞えて居る。地方の傳說に依ると古墳後圓部の麓の平坦地は孝安天皇の都し給ふた室秋津島の宮趾であると唱へ古墳を以て天皇御



宮山古墳指定地域圖

殯葬の處だと傳へて居る。巨勢系圖其他に依ると此古墳を以て武內宿禰の墳墓と認むる說が有力である。

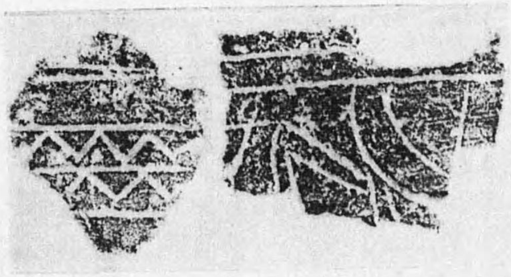
大和南部に於ては殆ど見ることの出來ない大形の前方後圓墳で、土地臺帳に依つて其反別を調べて見ると神社地が五反四畝十一歩で國有であり、山林七反七畝二十三歩と畑地五畝二十九歩は民有地となつて居る。

墳墓(墳丘)は南方に連亙せる丘陵群から分岐した低い獨立の小丘を基盤として營造された前方後圓型(瓢形墳)で、其主軸は東十五度北から西十五度南に亙り、後圓部を略東に前方部を略西に据ゑて居る。南の側方には環濠の名殘と認むべき貯水池があつて碧水を湛え、後世灌漑の爲めに擴張したと思はるる南邊は殊に廣大で漫々たる水を瀦溜してゐる。之を對岸の村道から見ると墳丘を背後にし貯水池を前にせる七八戸の民家は恰も水上生活を爲せる

が如き感を與へてゐる(圖版第三參照)後圓部の東北にも湟を利用したと思はるる貯水池がある。之を隔ててネコ塚と稱する圓墳がある。ネコ塚の殆ど全部は現今畑地となつてゐるが開墾當時には割石積の石室を發見し鐵片を出土した事實があり、附近の畑地に於ては今猶埴輪圓筒の破片を採集することが出來る。宮山の西北部には營造の際に殘したと思はるる自然の丘陵の殘部があり湟は完全に墳丘の裾を廻つてゐなかつたらしい。卽ち此古墳は環湟を施す古墳形式の初期に屬するものだらうと推察せらるるのである。

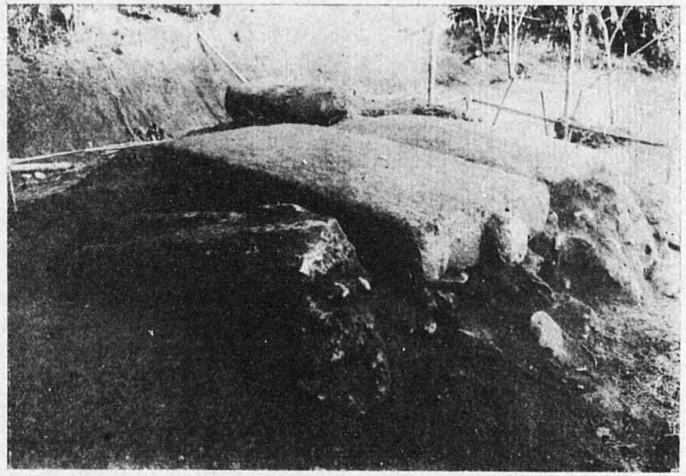
墳丘(封土)は二段に築かれ下の一段は割合に低く、比較的急傾斜を示してゐるが上の一段は高く傾度も稍緩で頗る落付きがよい。後圓部は種々後世の變化を受けて居るが前方部の正面の上段は極めて規則正しい形を保持してゐる。實測圖に依れば主軸の長さ六百八十四尺後圓部の南北の直徑三百四十八尺前方部先端の幅三百六十九尺クビレ部(接續部)は南部を侵蝕されて居る爲め原形は知り難いが現在百六十尺の幅を有して居る。後圓部頂上の直徑約百十尺高さ約八十八尺前方部頂上先端の幅約百二十尺高さ約七十五尺後圓部と前方部の接續部の頂上の幅約六十尺高さ六十八尺である。(前方後圓墳は瓢形墳と稱することに依て知らるる如く一個の完全な形であることは勿論だが便宜上前方部、後圓部及び接續部と分解して記述するのが普通であるから以下之に倣つて記す)

墳丘の南側の麓は民家の宅地となつた爲めに下段は殆ど削り採られ斷崖となつて居る處がある。古墳の基盤は之の切斷部に於て確實に觀察することが出來る。葺石の存在も觀察し得らるるが此等の構造をよく見得るのは後圓部の東南斜面である。葺石の石材は直徑七八寸の多角形の花崗石で、之れは恐らく稍大なる石材を割つて略同形の礫狀となし葺石に用ひたものと思はれる。之れと同樣の石材は丹波市町の西ノ山古墳にも葺いてある。皇陵にも此種の割石を用ひた傳說がある。埴輪は各段に樹立して居つたらしく開墾の際に多數發掘されたが地方民は古き土管と稱し或物は植木鉢に代用せられたといふことである。埴輪は圓筒の外家型の破片らしいものもあり衣笠形の破片もあつたらしく且其破片には鋸齒紋や直弧紋を陰刻したものがあつて他と比較して此古墳築造年代を知る一資料となるものである。卽ち直弧紋を有する埴輪の破片は河內國古市丸山なる應神天皇陵の陪塚から出土して居る。古墳槨壁や古墳から出土する鹿角裝具に直弧紋を有するものは九州、中國、四國、北陸に廣く分布して居る。



宮山古墳の埴輪破片(直弧紋と鋸齒紋)

後圓部の頂上は松樹の間に雜木雜草が繁つてゐるが中央より稍西に偏して深さ二尺位の窪地があり附近には石片もある。窪地の一部に兩端各二箇の繩掛凸起を有する長さ八尺六寸幅廣き處五尺一寸狹き處四尺五寸厚さ約八寸の加工せる

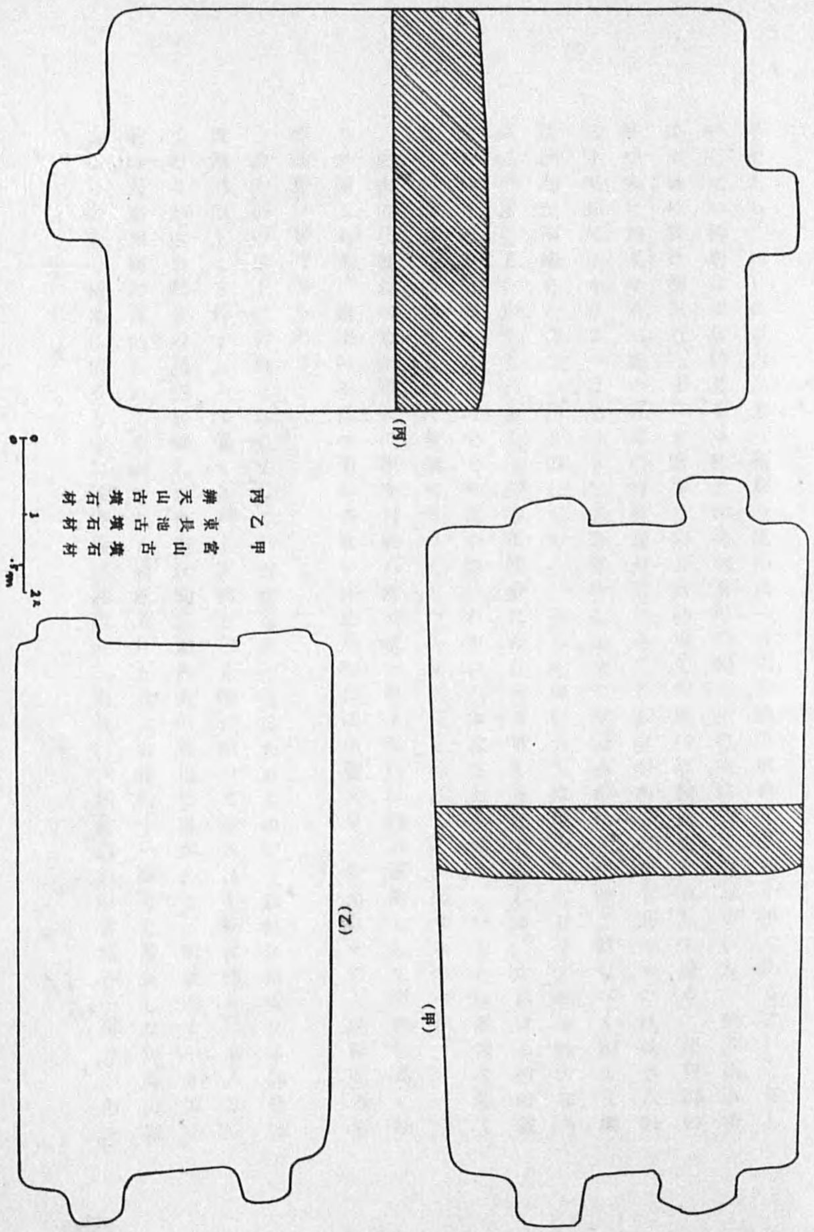


弁天山古墳石室

花崗岩の石材が廣き部分を西北に狹き部分を東南にし稍西に傾いて存在し内部は多少の空虛を認められる。

古來之を石棺の蓋石と見て居つたが其形式が石棺の棺蓋としては餘りに平面的であるのと、他に石室の天井石として此種のものが使用されて居る實例があるので石室の天井石と見た方が妥當であらう。大和に於て見得る例は添上郡大安寺村東長池の東南隅にある。俗に京終の野神サンと稱する小祠の傍にあるもので略同形の石材三枚を以て石室の天井を構成して居つたのであるが明治九年に發掘され内部には更に石棺があつて玉類金銀纓絡靴直刀等を發掘したといふことである。(圖版第五參照)

此古墳の三枚の天井石中の中央のものは兩端に各二個の繩掛凸起を有し表面も殆ど



弁天山古墳石材

(甲)

弁天山古墳石材

(乙)

平である。(但し長さ六尺九寸幅廣き處四尺一寸六分狹き處四尺で稍小形である)之れと等しい石室の構造は本年四月千葉縣君津郡大貫町の辨天山古墳に於て發見された。辨天山古墳は主軸の長さ約三百三十尺を有する前方後圓墳で周圍に埴輪圓筒を有して居る。後圓部の略中央に加工せる三枚の天井石(砂質凝灰岩)を有する石室があつて其中央のものは長さ八尺三寸幅五尺三寸厚さ一尺二寸五分表面は少し昂まつて居るが殆ど平面と認むべく頑丈な繩掛凸起が兩端各一個づつ作り出してある。卽ち此種の石室は畿内のみならず關東地方にも及んで居ることが知られ多くは前方後圓墳に存在せる事をも認められる。之れは石棺の觀念を以て石室を築いたもので元來此の種の石室は竪穴式壙を本體としたことは想像に難くないが辨天山の如きも既に破壞せられて居つて其原型を知ることが出來なかつた。

宮山の後圓部の東南麓には現今村社八幡神社があり境内は樹木蓊鬱として繁茂し高い松の老樹もある。鎭座の年代は明かでないが德川時代には相當榮えたらしいことは社頭の石燈籠等に依て知られる。

前方部の頂上は竹藪となつてゐるが形狀極めて整然たるもので後圓部に接續せる部分は後圓部頂上より約十五六尺低くそれより前方部先端に向つて漸次高く幅は徐々に廣くなつてゐるが、廣き部分の稍南に偏した位置に約三間四方の發掘の跡がある。明治四十一年頃土地の人が開墾の目的を以て此處を掘り、偶然木片と共に古鏡約十一面分を發見したが、藤田亮策氏の調査の結果に依ると中に繪模樣式神獸鏡二面分、三角緣神獸鏡、獸首鏡各一面分があり

其他は破片として採集せられたるものである。古鏡と共に勾玉管玉、棗玉、玻璃小玉等總數百七拾餘個を檢出したが勾玉は滑石製のもの二十九個長さは八分七厘乃至四分位の小形のもので頭部の孔も小さい。管玉は完形品七個、略形を備ふるもの四個、破片三拾餘個長さは一寸乃至七分徑何れも一分五厘内外の細長い精巧な製作で碧玉岩製である。棗玉は一個であるが破損し玻璃小玉は三種あつて百個に近い。石製刀子一個は長さ一寸五分位のものである。(歴史地理第三十九卷第四號「大和御所附近の遺蹟研究」參照)此等の遺物は如何なる狀態に埋められてあつたか詳でなく、隨て此古墳に對して如何なる意義を有するかを知ることは不可能と思はれるが木片は木棺の破片と認むべく、銅鏡の豐富なこと獸首鏡の如き古き形式のものもあるから恐らく古墳築造當時若くはそれに近い年代に於ける前方部埋葬の例として特筆すべきものだらうと思はれる。

宮山古墳の位置は頗る高燥にして眺望に富み西に金剛葛城の秀峯を仰ぎ、葛城の清流は脚下を洗ひ墳龍の雄大なることは此種古墳に富める大和に於ても稀に見る處で加ふるに古來高貴の陵墓ならんとの傳説もあり、之を放任する時は徐々に開墾して原型を破壞するの虞れがあるので史蹟保存要目第三に依り大正十年三月三日指定せられたものである。

(備考) 本報告に於ける實測はすべて平板器を用ひ史蹟の形態的基礎となるべき部分を精確ならしめんことを期した。猶本文中に「史蹟保存要目」とあるは史蹟名勝天然紀念物保存要目史蹟之部の略である。

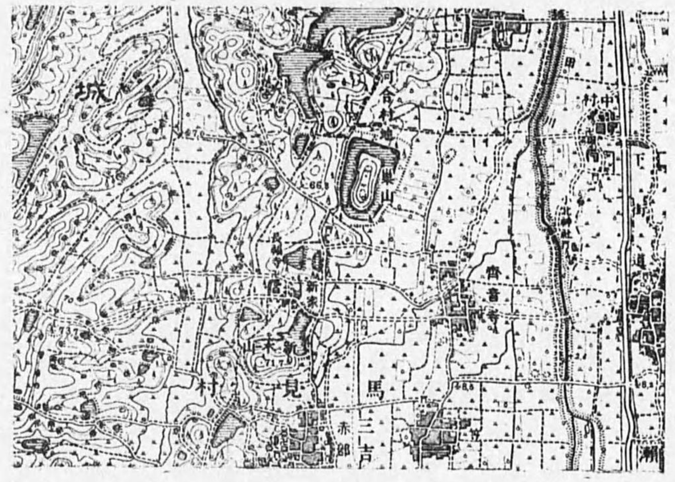
二　巣山古墳

圖版第六——第一五

北葛城郡馬見村大字三吉の地籍に在る前方後圓墳で、墳龍の表面は全部竹林である爲めに容易に其の形狀を見ることが出來る。北葛城郡の地勢は西に葛城山脈を負ひ東は平野に面してゐるが、其中間に南北に長い低い丘陵があつて東に高田川、曾我川、西に葛下川が南から北に流れ、丘陵の北端に近い處で、大和川に合し、大和川は西南流して河内の國境に注ぐのである。

此の丘陵を通俗に馬見山と稱し海拔百米突以内のもので南北約三里東西約一里(俚俗に「まめ山三里石がない」と云ふ)中間には耕地もあるが至る處に古墳があつて南端の築山古墳(前方後圓墳)を始め東西の斜面に分布し、特に東南部には大型の前方後圓墳がある。多數の漢式鏡を檢出した新山古墳(陵墓傳説地)、封土に埴輪の樹立せる新木山古墳(陵墓傳説地)、等は著しいものである。丘陵の中央部にも黄金山(佐味田寶塚)古墳の如き豐富な漢式鏡を出土したものがあり附近には廣大な横口式石室を有する圓墳もある。西斜面の下田附近にも組合せ石棺の殘部を埋藏せる合葬式古墳の遺跡もあり、其他諸所に家型石棺の殘片を有する場所がある

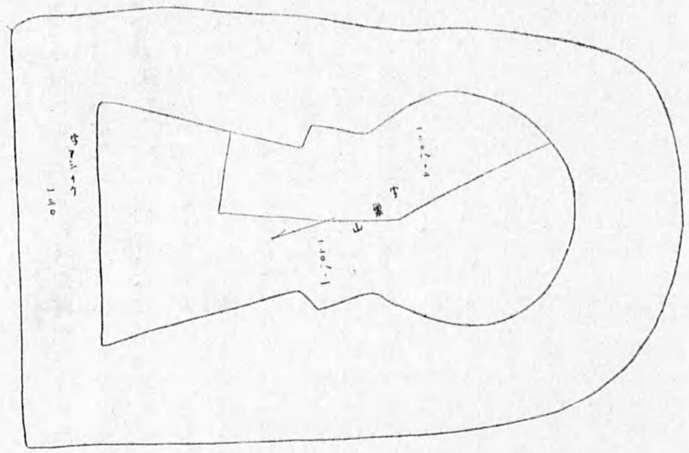
馬見山の東北穴闇(なぐら)方面にも多數の古墳がある。即ち前方後圓型の大塚山の如き、廣瀬神社附近の古墳の如きは顯著なものである。馬見山の西に相對する葛下川沿岸の丘陵には孝靈天皇陵、武烈天皇陵、顯宗天皇陵がある。此附近は古代に於ては傍丘(かたをか)と稱へられた土地である



集山古墳位置

集山古墳は馬見山古墳群の東に位する顯著な前方後圓墳で、東は大和平野の中央部に面して眺望に富み西は馬見山の裾に接して居るので小型の圓塚は累々として之に從屬せるかの觀がある。

墳丘(封土)は馬見山の東斜面が平野部に低下した部分を利用して營造したもので封土の主軸は南二十五度西から北二十五度東に延び長さ六百七十二尺前方部を北々東に後圓部を南々西に据ゑ、周圍に湟を環らし、同一水平面に於て漫々たる水を湛えて居る。湟の外圍は特に堤壘として築造したのは後圓部の南方の部分のみで、東及び北の畑地は恐らく丘陵の一部であつたと思はれる。西方は馬見山丘陵の一部に接し湟の縁に殆ど平行に圓塚が竝んで居る。即ち環



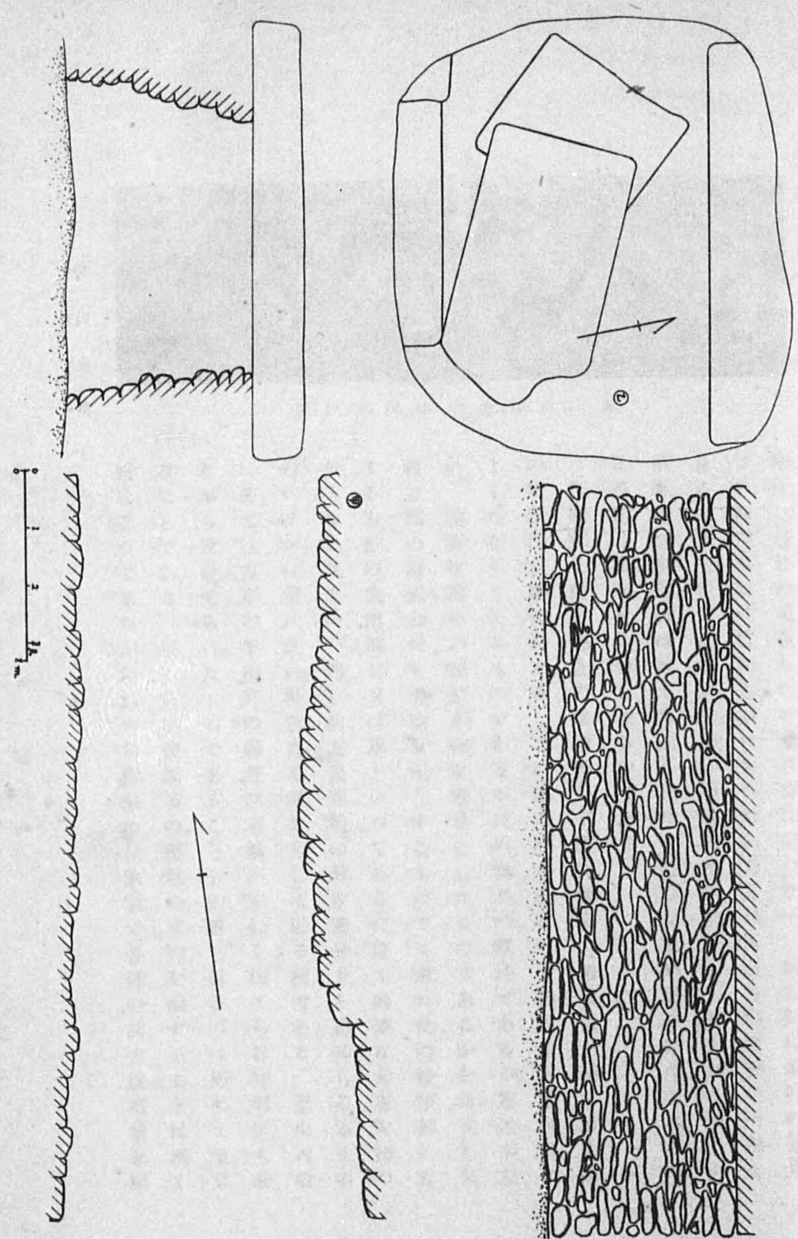
集山古墳指定地域圖

湟の大部分は丘陵の斜面を刳り拔いて凹地を作り其土砂を以て墳丘を築き上げたと認むべき例として好適のものである。墳丘の土木的技術は多く此の方法に依つたものと認められる。

封土は三段に築かれ下の一段は最も低く、二段之に次ぎ三段目は高く稍緩い斜面をなして居る。後圓部に於て主軸に直角の徑を圖上にて測定せる結果によると三百六十尺、頂上の直徑は約百二十尺高さ湟の水面から約八十一尺あるが各段共に表面を安山岩質の礫又は割石で葺き、形狀極めて整齊で頗る壯麗な形貌を保持して居る。頂上の平面には中央より稍西に偏して二個の石室の破壞せられたものがある。西にあるものは長軸を略南北にし側壁は石英粗面岩

の厚さ三四寸長さ一尺内外の割石を以て積み幅約四尺五寸位のものであつたらしい。天井石は現今四枚を殘してゐるが凝灰岩様の加工した切り石を横架したもので南方の一石に就て見るに長さ七尺六寸幅三尺二寸五分厚さ七寸次のものは二尺七寸八分其次の石幅三尺一寸五分最奥のものは幅三尺六寸で二個に折れて居る。四枚の天井石の幅を通計すると約十三尺となるから恐らく石室部の天井は殆んど殘つて居るのであらう。然して石室の高さは側壁の崩壞に依て確實に知り難いが現在は約三尺八寸の高さを有し、天井石の上には五尺餘の盛土がある。側壁に割石を用ひ天井に切り石を使用した例は近畿に少くないのであるが、他の地方では少い様である。他の一個は東約六尺を隔てて竝び深さ三尺五寸の處に幅七尺位の加工の天井石を三枚だけ見得るが移動せる形跡がある。其の技巧は略西方のものと等しく思はるるが土砂侵入のため側壁の構造を實驗することが困難である。此等の石室の破壞は明治年間に屢々行はれたが貴重な遺物の多くは早く宮内省諸陵寮に收められて居るので本古墳の性質を研究する上に於て極めて好都合である。（遺物に就ては別項に記す）

前方部先端の幅を實測圖に依て檢すると基底に於て三百十一尺あり頂上では六十六尺となつてゐる。高さ湟の水面から約七十尺、下の一段の上には、湟の泥土を浚つて積み上げる慣習がある爲め多少の凸凹はあるが二段及び三段は葺石を有して立派な形態を保つて居る。頂上の先端に近い部分に幅三十二尺長さ約四十五尺高さ約六尺位の盛土があつて内部に小型の割石を以て造つた石室を有して居つた形跡は明瞭で今猶多數の割石を殘して居るが此



巢山古墳石室實測圖

新木山古墳埴輪配列狀態

附近は後に變更著しいので原型は明でない。前方部に遺物の發見された例は既に宮山古墳にあつたから之れも前方部埋葬の一例と見るべきものであるが此部分の遺物は詳でない。前方部の頂上の平面及び東斜面は曾て茶園となつて居つた爲め現今にても藪の中に茶樹の殘存せるのを見るのである。

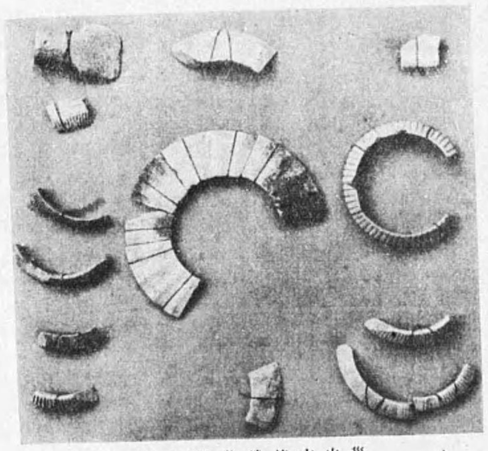
後圓部と前方部との接續部の下段に通俗に船著場と稱する方形の突出部が兩側にある。之れは大和のみならず畿内の古墳に特によく殘存して居るものであるが何の爲めの築造であるか定說がない。前方後圓墳の原型が何を標準としたものであるかを考究し又前方部の意義如何を考察せんとするものでも未だ此の接續部に存する方形の突出部(耳又は車といつてゐる)に就て的確な考慮を拂つたものを見ない。然し前方後圓墳の最整備せりと認めらるるもののプランは常に此の特色ある耳を有して居る樣である。巣山古墳に於ては方形の突出部の緣邊に埴輪が正しく樹てられ如何にも最初から設計せられたものであることを確認し得るのは極めて重要なことである。近時前方後圓墳の形狀の起源を論ずることは漸く盛になつて來たが、何れも想像的の抽象論で、各種の前方後圓墳を精

査した結果でない憾みがある。後圓部に於ける横口式石室の主軸の方向等も問題であらうが此の前方部及び後圓部の接續點の下段の突出部の意義の解決が更に重要なものであらうと思はれる。

下段の周縁には殆ど全部に瓦つて一重或は二重に埴輪を廻らし殘存せる部分は高七八寸に過ぎないが埴輪圓筒の直徑は六七寸のもの多く新木山古墳のものと略等しく大和平野の北に於ける如く大形のものは少い。然して其配列の間隔は一尺二三寸から五六寸位の距離を有して居るから全周に於ては非常な數に上るわけである。(備中の作山古墳にも此例がある)頂上には家型らしい平面的の厚い破片を發見したが完全な形體を見得るものはない。傾斜面は多數の礫を以て完全に葺き込んであるから恐らく埴輪は樹てなかつたであらうと思はれる。

環濠は頗る完全で前方部に對する部分の幅約百二尺後圓部の周圍では幅百二十尺クビレ部に於ては幅百八十尺を有する。土地臺帳に依つて調べて見ると環濠の字はアシイケと稱し面積三町一反八畝七歩大字三吉共有の貯水池である。大和河内に於て古墳の環濠が多く貯水池として灌漑用に供せられた爲め之れに接する古墳封土もその儘に保存せられたものが多い。若し灌漑用水として環濠の水を利用する必要がなかつたならば開墾の劇しい近畿の平野の古墳は殆ど跡を絶つて居つたかも知れない。

明治年間に發掘された大部分の遺物は今宮内省諸陵寮に保存されて居る。前記の如く後圓部に二個の石室があり、前方部に一個の小石室あり、何れの石室から何れの遺物を檢出したか又其埋藏の狀態如何等は今知る由もないが小勾玉の類は今猶後圓部石室の附近で採集さるる例もあるから遺物は恐らく後圓部石室内にて發見したものであらうと推察し、地方民も是認して居るから特色あるものに就て略記する。



集山古墳遺物(殘缺類)

發見遺物は多少の出入はある樣であるが大勾玉一個、小形勾玉三十五個車輪石三個鍬形石四個外に殘缺若干、管玉六十三個、棗玉三個石製刀子十一個外に石釧破片、高坏破片、素燒土器三個銅製釧一個ある。大勾玉は頭部から尾部までの差し渡し三寸一分五厘、太さは直徑一寸二分、重量六十一匁、臙石製で形狀は頗る優美で特に頭部には鋸齒文櫛齒文を配合して陰刻した裝飾があつて本邦の出土品に類例のないものである。近時朝鮮南部の古墳から勾玉の頭部に金屬の裝飾を被覆したものを發見して居るが其意匠は共通の觀念から導かれたものと認むべきで文化系統を考察する有力な遺品である。小勾玉は長さ約一寸多くは滑石製の偏平なものである。中に碧

玉岩製と認めらるる勾玉の破片が一個ある。管玉は大小長短種々あつて極めて精巧な細い長いものもある。車輪石の一個は略圓形に近く他の二個は下膨れの不正楕圓形のものである。鍬形石(古く神代石といふ)は車輪石と等しく貝輪から發達したと認めらるるものであるが何れも表面の方に反りを有し中央の孔は卵形で頭部及び腰部に裝飾的の線刻又は凸起がある、何れも長さ七寸位のものである。棗玉は三個共に深藍色の小形のもの、石製刀子は長さ一寸七分位のもので滑石製である。銅製釧は直徑二寸三分のもの土器は高坏の坏部破片薄い碗形土器赭色の坏等である。地方民の傳ふる處に據ると發掘當時に於ては王冠及び古鏡三面を檢出したといふが實物は未だ實見するに至らぬ。

古墳の所在地は、舊廣瀨郡の地域であるから里人之を成相墓に擬し敏達天皇の皇子彦人大兄皇子の御墓ならんと唱へて居るが明證が發見されない。墳丘の總面積は一町三反十一歩地目山林で個人有であるから後圓部の下段に二階建建坪二十坪の家屋一棟、約十間を隔てて十二坪の平家一棟を建設し二階建の家屋の前面に通ずる爲め小橋を環湟の上に架し往來の出來る設備をして居るが現在に於ては閉鎖してある。古來此の古墳の濠中には大蛇が住むとの傳說があるらしく又後圓部の一樹木の如き之を切らば碧血流れ出づるといふ說がある。古墳は高くないが大和平野を眼下に眺め得る地位にあつて三輪山耳成山及畝傍山を望み東北遙かに若草山を指呼することが出來る。標式的古墳として史蹟保存要目第三及び第九に依つて昭和二年四月八日に指定せられたものである。

三　西山古墳

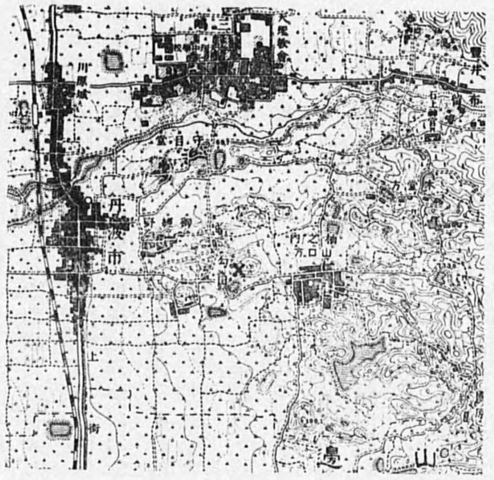
圖版第一六――第一八

山邊郡丹波市町大字柚之內の地籍に屬し、丹波市町の街區から大字勾田を經て、柚之內の聚落に達する道路の北側に在る。丹波市町の東部を限る山脈は、北は春日山から南方三輪山に連續せるもので、西斜面には低い丘陵が起伏し此等の丘陵を利用して營造せられた古墳は、數個の古墳群集地を形成し、封土石室及び石棺等の殘存せるものが少くない。皇陵としては衾田陵、崇神、景行兩天皇陵が在る。又同じ斜面の山麓には石上神宮、大和神社、大神神社の如き官幣大社も在る。

西山古墳は、丹波市町東部に於ける古墳群に屬するもので、附近には前方後圓墳、圓墳或はその遺跡が少くない。灌子山、コハンボウ等は最近く、稍東に白墓と稱する圓墳があつて巨石を以て築造した石室がある。南に比較的高い丘陵を利用して造つた東乘鞍山古墳がある。前方後圓型のもので後圓部に横口式石室を有し元來二個の石棺を藏して居つたが現今は一個のみ殘つて居る。高市郡白橿村大字五條野地籍にあつて見瀨の民家に近い丸山塚の如きも之れと同樣で、前方後圓墳の後圓部に横口式石室を有し、內部に二個の石棺を藏して居る。即ち前方後圓墳を築造する時代に既に合葬が行はれて居つた事實を示し、又前方後圓墳に於ける石室は決して竪穴式のものばかりでなく長き羨道を有する横口式石室の存在することを

示す例として掲ぐべきものである。丹波市地籍に接する石上領のうわなり塚(完全な前方後圓墳)の石室も横口式で口を後方に開いて居る。之の例は大和に於ては他にも存在して居る。

東乘鞍山古墳の南方に萱生の千塚と俗稱する著名の古墳群がある。此の如き附近一帶は大小古墳累々として居るが西山古墳は稍山麓を離れた廣き平野に面して居る爲め眺望頗る廣闊である。



西山古墳位置

墳墓の主軸は西十二度南から東十二度北に亙り長さ六百三尺、後方は下方上圓型で略東に位し、前方部は略西にある。後方の基盤の南北の長さ三百十五尺、頂上の直徑七十八尺、高さ約四十六尺三段に築かれて居たらしいが封土の全面は曾て蜜柑畑として利用されてあつた爲めに現今に於ては階段は極めて不鮮明である。前方部先端に於ける基底の幅二百四十尺頂上の幅廣き處六十尺高さ約二十八尺、前方及び後方の接續部の基底幅百八十尺頂上に於て二十五尺を有する。

葺石は全面にあるが宮山古墳と略等しき花崗岩の立方形の割石を用ひ、埴輪は極めて豐富に各段に樹立したらしく圓筒の破片に依て見るに直徑一尺内外のものが多數である。特に注意すべきは全面に朱を塗れるもののあることである。柳本附近の古墳にも此種の埴輪がある。明かに裝飾の意味を高調したものと思はれる。圓筒以外には家型埴輪の破片らしいものもある。前方部の頂上には現今苗圃の設けがあり、封土の北側には櫻樹を植ゑたりして居るが階段は既に多少變更せられて整形を保つてゐない。

後方部の上は普通の前方後圓墳と異る處はないが、特に基底を方形に築造した理由を考究して見ると或は前方後圓型の起源の問題にも觸れやうし、又かの前方後圓墳のクビレ部の基底に附著せる耳(方形の造出し)の意義を解說し得るかも知れない。普通の前方後圓墳は後圓を圓墳の觀念に依て造つたものとすれば之れは下方上圓の形式に依つたものと認むべきものである。後方部の頂上圓形の平面の略中央に直徑約十七八尺の窪地があつて内部に多數の割石を殘してゐる。卽ち石英粗面岩の厚さ約三寸長さ一尺位の不正形の板狀の石材であるが磚槨式石室を有する黃金塚の石材、崇神天皇陵の東にある築山古墳の石室の石材更に離れて巢山古墳の石室側壁の石材等は類似のもので他にも數例ある。此等は石室築造の共通技術の結果として選定されたものであらう。

環濠の一部は墳丘の西南に殘存して貯水池となり漫々たる水を湛えて居る。其他の部分は全部水田となつて居るが其築造法は丹波市町の東の高地を利用し濠の部分は北側と南側

の凹處を利用し幾分づゝ刳り取り西方に堤壘を築いて水を潴溜して居つたもので東の平面は稍高いから環湟は恐らく傾斜地に現存せる皇陵の例の如く階段を爲して居つたであらう。然して此の東北の湟跡は近時天理教會設立の外國語學校の運動場の一部として埋立てられたものである。指定地域は民有地五筆面積一町六反二十歩である。

該古墳發掘の年代は徵すべき文獻もなく古老の所傳もない。隨て遺物として傳へらるる何物をも發見しない。村民の言に依れば降雨の翌日等には墳丘上に於て勾玉管玉の類を拾得する例があると傳へてゐるに過ぎない。

所在地附近は大字勾田の地籍に接して居るが說を爲すもの曰く、古代の山邊道は勾田附近の御經野から南方朝和村三昧田に通じて居つたもので、勾田は勾岡を誤り傳へたものなるべく隨て山邊道勾岡陵卽ち崇神天皇陵は之れであらうと、然し現今は旣に柳本に近く御陵があるので此の說の當らざることは勿論であるが、其形狀の特異なる點及び位置の卓越せる點から見て附近の人々は高貴の御陵墓ならんと想像したのは無理のないことである。

古墳地は近來財團法人天理教會本部の所有に屬し其東北に外國語學校を設立したが後方部の湟の大部分を埋め、北側の湟を埋めて運動場たらしめんとするの計畫があるが古墳の保存法には封土のみを保存する例もあるし南側は立派に湟の一部として見得る貯水池もあり其東の湟跡も現狀を變更せず保存せらるる見込はあるから昭和二年四月八日史蹟保存要目第三及び第九に依て指定せられたのである。

四　花山塚古墳

圖版第一九——第二二

磯城郡多武峰村大字粟原の地籍に屬し、櫻井町から粟原の聚落を經て、宇陀郡松山町に至る女寄峠の頂點に近い山地に在る古墳群中の一で、附近には旣に破壞された小圓墳が散在して居る。

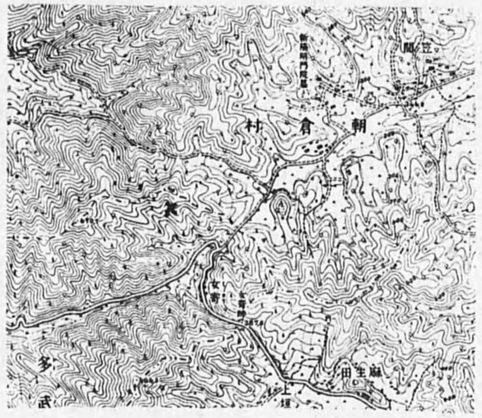
墳丘は海拔約四百米突の山頂に近い傾斜面を利用して營造されたもので、南面は自然の傾斜に隨ひ、背後は、山體と區劃する爲めに削り落して封土との間に淺き空湟を造つたもので、墳丘の背後と兩側とは恰も壘壁を以て圍まれた如き形狀を呈して居る。

大和に於ては、丘陵の頂點を利用したものも少くないが丘陵の尾上に近く頂點より稍降つた傾斜面に築造した古墳が多く然も優秀なる石室、石棺を有するものが多い。之れは封土の周圍を繞る護壁の觀念を顧慮したものとも思はれるし又土工に要する勞力經濟を考へた結果であらうとも思はれる。かかる例は花山塚の如き高い地點に築いたもののみならず、高市郡の南に於ても此の古地法は屢々見る處である。

花山塚の封土は旣に發掘の厄に遭ひ、殆ど平面的になつてゐるが周圍の狀況竝に東方に殘存せる所謂東塚の封土に比較して圓墳であらうと推察するのである。

該古墳の特色は其石室の構造に存する。卽ち口を南方に開き普通の古墳石室に比較して、

羨道及び玄室に相當する部分の外之に接して石扉を有する奥室の存在する點は大和に於て其例を見ない。河内に於ては之に類する構造を有するものがあるが全然同一の形式ではない。又槨壁に於ける石材の用法が磚槨の構造に類似して居る等稀に見る手法で學術上極めて有益な資料である。所在地は小字を小谷と稱し地目は山林で三畝十歩を限り古墳地と認めて居る。

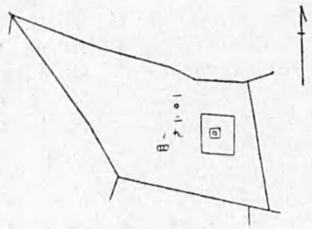


花山塚古墳位置

石室を構成せる石材は玄室部の天井石を除き殆ど全部板狀の石英粗面岩の加工材を用ひ側壁は總て小口に於て厚さ二寸三四分長さ約一尺位の大さから厚さ四寸長さ二尺四五寸の煉瓦樣の石材を伍ノ目に積み上げ其間に三和土の漆喰を施したもので形狀頗る整然甚しい歪を見ない。玄室に相當する部分は、三室の中央に位し、長さ(南北)七尺二寸、幅(東西)四尺五寸、兩側壁は底部から三尺八寸五分の高さまでは直立しそれより上は稍内部に傾き左右から拜むが如き形を以て天井部の幅を狹め其高さ約一尺七寸上には奥室に接して二個の花崗岩の天

井石を横架してある。

羨道部に相當する部分は玄室部の南に接續し長さ(南北)十尺幅(東西)三尺六寸三分南端に稍大なる自然石を据ゑて側壁の南極として居るが、山の傾斜面を利用し比較的小石材を用ひた構造であるから根固めとして之の必要を見たものであらう。側壁の上部は兩側とも既に破壞せられて天井部を缺き隨て高さも一定してゐない。羨道玄室共に底部に特種の施設なく土壤のみである。



花山塚古墳指定地域圖

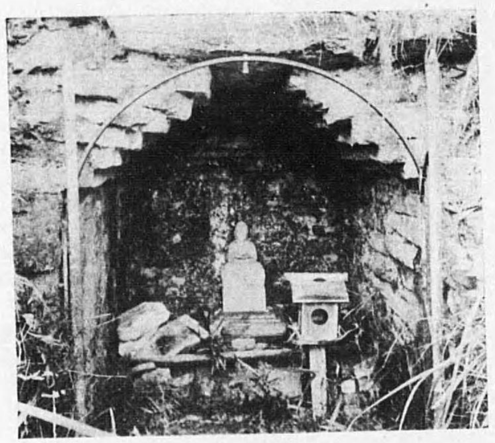
奥室は玄室部の北に接し、底部には板石を敷いて一段高くし長さ(南北)六尺、幅(東西)二尺三寸七分、高さ三尺二寸、その奥壁は特に一枚石を用ひ、天井部には、不正形の板石を重ねて居る。側壁は玄室等に等しく磚狀の加工石を以て積み表面に漆喰土を塗つた形跡はあるが何等裝飾の認むべきものがない。

奥室の入口は底部の板石の西隅に石扉の軸穴を有し、上方の楣石の西隅にも之れと上下相對應する位置に軸穴がある。兩側壁の前面には石扉の嵌り得る切り込みの構造があり特に扉の軸付のある側は隅を圓形に彫り込んであるが石扉の嵌り得る部分は幅二尺八寸五分、高さ三尺二寸である。石扉は左方へ片開きとなつて居つたことは構造に依て知らるる。石扉の實物は大正十四年に本報告者が隣村笠間小學校の靴脱石に使用してあつたのを實測竝に所傳に依て證明し得たもので石英粗

面岩を削つて厚さ三寸五分の板狀のものとなし一方に軸の凸起を有し幅二尺八寸高さは一部分缺失して現在は最高の部で二尺五寸ある。古墳石室に石扉を有するもののあつたらしいことは從來も想像され又記錄に依つても推察されて居つたが石扉の實物の現存せるものは九州に於て稍異例のものを見得るのみで他には未だ發見されて居ないと思ふ。

花山塚の發掘は明治初年に行はれたが、遺物の殘存せるものがない。之の東に位する花山塚東塚の石室も磚槨式のもので、此地の古墳に共通の形式である。隣村笠間區には圓墳は少からずあるが樣式は之れと異つてゐる。

磚槨の形式の最整備せるものは添上郡帶解村大字田中の黃金塚である。其技巧は花山塚と等しく石英粗面岩の煉瓦樣の石材を以て積み上げたものであるが、玄室の奥壁底部幅十一尺(東西)南北軸九尺七寸五分口を南に開き東西北の三方の側壁は高さ五尺四寸の處迄は直立し天井部は其上に同じ煉瓦樣石材で四方から持ち出し式に狹め內部から之を望めば恰も寶形造の屋根を裏から望む如き感がある。玄室の南壁から現在の羨道の口までの長さ三十一尺幅六尺二寸口に至るに隨ひ稍狹く四尺九寸に及んでゐる。羨道部兩側壁の構造は特に顯著なもので中間に各二個の柱形の造り出しがある。天井部は既に缺失し現在のものは後補のものに屬する。花山塚に近い距離にある磚槨式古墳は磯城郡櫻井町大字淺古にあつて舞谷古墳と稱へられて居る石室は東西四尺三寸南北約八尺の長方形の玄室で天井部は四注造の如く羨道は殆ど缺失して居るが殘存部に依て見ると柱形の積み出しがあつて黃金塚に類似點が多い然して此古墳にも石扉があつたらしいことは曾て此古墳を破壞して淺古の民家に持ち歸つた石材を見ると軸穴及び溝の彫り付けてあるものがあつて。構造は詳でないが石扉の存在を立證する可能性がある。之の點は花山塚と連絡があるかの如く見える。卽ち花山塚の石室は單に此地に突飛に此種の磚槨を造つたのではなく或る時代に於て一種の流行として黃金塚及び舞谷の分布線上に連續して築造されたものの一つであることを注意すべきである。然しその築造の年代は何時頃であつたか徵すべき資料がない。黃金塚は所傳に舍人親王の墓といつて居るから之れを標準として見れば奈良朝に接した時代の營造となるがさうなると此頃行れて居つた骨藏器や墓誌を有する火葬の墳墓と平行して居つたことになる。手法形式から見て朝鮮樂浪遺跡に殘存する磚槨の形式に基いた營造であることを想像し得るから或は今少し溯るべきものではないかと思はれる。帶解地方にては黃金塚から勾玉管玉を出土した由を傳へて居る點も顧



舞谷古墳石室

慮すべきである。

花山塚は傳說としては花山法皇の御陵ならんと傳へて居るが形式上そんな時代と認めることは出來ない。磚槨式石室を有する古墳を考定することは、樂浪文化との接觸を攻究する上に頗る興味あることであるが、何れも的確な資料を發見しない、而し此種槨壁の現存せることは古代日本の研究に向つて一道の光明を與へるものと云へるだらう。花山塚の如きは、石材は極めて小形で運搬し易く位置は山林中にあつて發掘し易い傾向があるから學術資料として保存の必要を認められ史蹟保存要目第三及第九に依り昭和二年四月八日指定せらるるに至つたのである。

（參考）奈良縣史蹟勝地調査會第三回報告「ハナヤマ西塚」

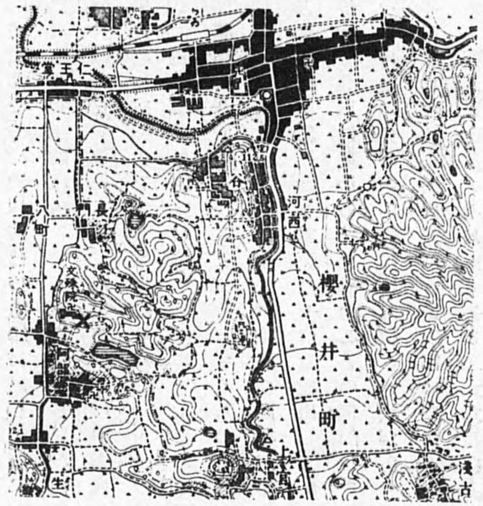
五　文殊院西古墳

圖版第二三——第二六

磯城郡安倍村大字阿部の地籍に屬し、日本三文殊の一と稱する文殊師利菩薩を本尊とせる眞言宗の文殊院境内本堂の東南に在る。境内地は櫻井町の西南部に蟠屈せる低い丘陵の西部に選定せられたもので、南に多武峰の山嶺高く聳え西十五度南に香久山、西十七度北に耳成山、東北に三輪山を擁する樞要の地點で、上代の皇居たりし磐余の地も之の附近なりしなるべく、泊瀬及び飛鳥地方に對して極めて重要な地區である。古墳の分布に就ても此の丘陵中には草墓の如き石室内に石棺を藏するものもあり他にも石室は少くないが之れと相對する鳥見山一帶の山麓には前方後圓墳及び圓墳が多く石室の露出せるものあり遺物としても銅鏡、刀劍祝部土器の如き重要なものを檢出して居る。卽ち此附近は古代聚落の發達して居つた場所で、各所に皇居の營まれたことの偶然でないことが知らるる。

境内地の堂宇の附近には、二個の古墳があつて早く開窟されたらしく、元祿十一年性亮玄心の記した和州安倍山崇敬寺由來記の中に本寺は大化元年阿倍倉梯麿の創立で（中略）東に石窟あり高八尺餘、廣さ七尺五寸、長さ三丈九尺あり、窟中に弘法大師手刻の石造不動尊を安置すとあり、小なる石窟は高さ七尺餘、廣さ六尺五寸、長さ二丈六尺阿遮羅尊を安置し窟中穿鬪伽井加持水清冷泉常に湧出する由を記して居る。又寛永十年三月廿五日の裏書を帖付せる（其後修

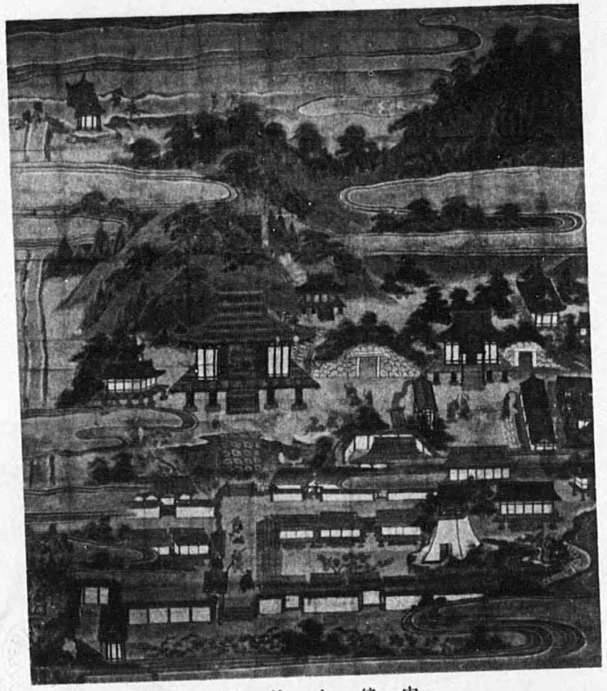
補の爲め)安倍山繪圖によれば、重層の本堂の東に二個の石窟を描いて居る。本堂に近い窟は卽ち指定地で圖上に於ては塚の底部の幅九寸四分、石室入口の幅一寸五分に寫されてゐる。



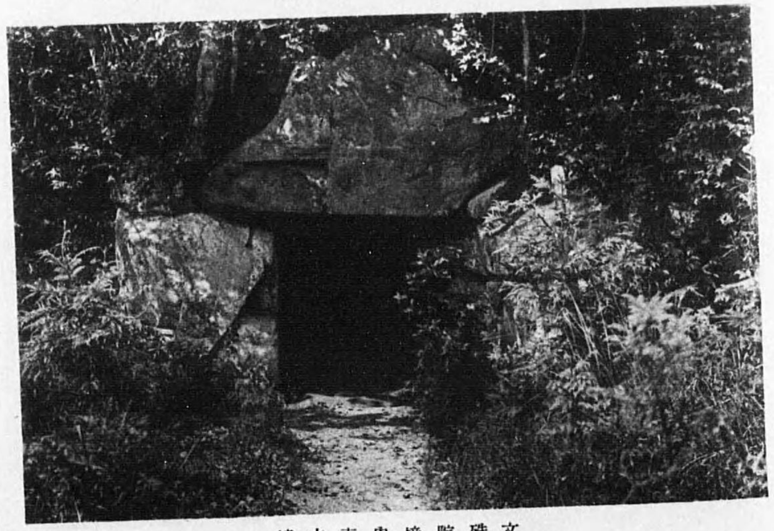
文殊院西古墳位置

現今封土の後方に存在せる鐘樓は繪圖に於ては樣式の異つた建築で、本堂前面の下方に記してある。然して梵鐘の銘には和州十市郡滿願寺とあり寛永廿年の鑄造である。卽ち繪圖の裏書よりも十年後の製作である。此の十年間に於て多少境內の模樣替をしたものと思はれるが塚の開窟はそれよりも古いと見なくてはならぬ。然し緣起(由來記)の如く弘仁の頃まで溯ることも出來まい何となれば弘法大師手刻と稱する不動尊の石彫は手法に依て見ても到底それ程の古いものとは思はれないからである。

開窟の年代は寛永以前であることは否定すべからざることと思ふが、開窟以後は各地に於て行はる如く岩屋寺として崇敬され賽客の絕ゆることなかりしは勿論更に其周圍に種々の



安倍山繪圖

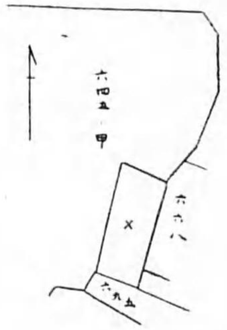


文殊院境內東古墳

施設を加へ石佛を立て、鐵鎖を架設して參拜せしむることもあつた。然して塚の頂上には稻荷の小祠があり塚上の老松の内一本は周圍十三尺もあつて丈高く頗る風致を添へて居る。

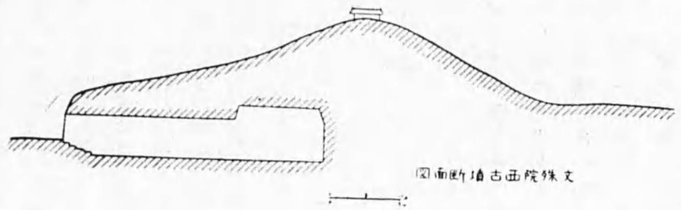
此の塚の所在地は小字を金藏と稱し國有地で面積四畝十八歩を指定地として居る。

古墳の封土は北方の丘陵から突出した高い部分を利用し之を稍掘り込んで石室を築造したもので恐らく寺院の創立以前の作業であらうと思はれる。猶想像を加ふれば此境内から天智期と推定される疏瓦の出土があるから寺院の創立も頗る古い。(古く安倍寺と稱したことは延久年間の興福寺記錄にある)然らば此の古墳は恰も河内の磯長の聖德太子廟(古墳)と叡福寺との關係の如きもので古墳は寺の開基に關係ある墳墓であるかも知れない。猶之に類する東の古墳は全然自然石を以て築き明かに丘陵の尖端を利用した趣が會得せられる。兩者共に比較的強く南面の地形を選んだ心理が窺はれて興味がある。墳丘の西面は本堂の前庭に接し南は通路となり東は畑地となつて北面のみ山地に接續する有樣であるから不正形であるのは免れないが圓墳であることは疑はれない。塚の底部は東西五十五尺南北六十六尺高さ約二十尺表面には礫石あり前記の如く老松もあり雜木もある。



文殊院西古墳指定地域圖

石室は文殊詣での人々に依て早くから知られ頗る人口に喧炙して居るが古墳石室として



文殊院西古墳斷面圖

適當な解釋を與へたものは却て少なかつた。石室の構造は普通のものと異る處なく口を南に開き玄室と羨道の二部に分れて居るが其技巧の甚だ精良である爲めに諸國に存在せる自然石の石室と比較にならない立派なものである。然して此石室から出土せる遺物の如き傳つてゐないが爲に全く別物であるかの感を抱くものが多く考古學的材料としても餘りに引用されて居らない。然し本報告者が大和の各地に存在せる古墳石室を丹念に精査した結果に依ると此の文殊院西古墳の石室の技巧の過渡期のものは決して少くないのである。然して其整齊な石材を用ひた手法に於ても稍之に類似する實例もあつて決して文殊院西古墳の石室の如き精巧なものが突飛に出現したものとは認めない。玄室の奥壁底部の幅九尺四寸五分、羨門に對する部分の幅も之に等しいが中間は稍膨れて居る。西壁底部の長さ十六尺七寸、東壁の底にて十六尺五寸五分天井部は自然に狹まり奥壁幅七尺九寸、西壁十五尺三寸東壁十五尺一寸、高さ八尺六寸、奥壁に近く高さ三尺六寸の石彫の不動尊の立像を安置して居る。玄室を築造せる石材は良好なる花崗岩で、底部に埋まつてゐる一列を除き一段の高さ二尺位の石を四段に積み一石の幅が一尺八寸位から三尺位までの長方形の加工石を伍ノ目に積み然も東壁に於て二箇所、西壁に於て二箇所大石の中間に特に一線を縦に刻して二個の石材の如くに見せ形狀を整へて居る技術は實に天下一品の稱がある。然して此等の技術の心底にはどうしても礎梆の觀念を否むことは出來ない。然して之に依て略其築造の時代が推定されるわけである。天井は花崗岩の一枚石で内面の周圍に幅五六寸の縁を附し中央部は薄く削り上げて穹隆狀の形體の觀念を持たして居る。此邊の周到なる技巧も他に見ることの出來ないものである。單に一枚石を平面に磨き上げたものなら高市郡に其例はある。

羨道の兩側壁の技巧は玄室と稍異り稍精巧と思はるる古墳石室に常に見得る構造で左右共に四個の巨大な花崗岩の加工石材(板石)を以て構成し全長二十四尺五寸幅は羨道の口にて七尺六寸羨門の部にて六尺三寸天井は内面を平に削つた三枚の花崗岩で蔽れて居るが羨門の上から二枚目までは同一平面を保ち入口の一枚は之れより約六寸上昇し其界に細き溝を彫刻して居る。此の手法は羨道の構造の略等しい高市郡阪合村大字越の岩屋山古墳の羨道の天井石にも見えるが岩屋山のものは界に細溝の彫り込みはない。之れは古墳石室の閉鎖法を暗示するものではなからうかと思はれる。即ち牽牛子塚古墳の二重封鎖法に照して見ると羨道の前面で閉鎖する前に一度其内部で何等かの施設をしたものであるかも知れない。

羨道の口は現今甚だ低く底部には石段があつて降る樣になつてゐるが此の構造は其材料から見て後世の作爲であることは疑はれないが元來遺存して居つたものを作り替へたもの

であるかどうか確でない。又入口の兩側竝に天井石の正面にも多少の加工を見るが此等は大體最初からの技巧と見て差支なからう。本古墳は學術資料として保存の必要を認められ史蹟保存要目第三及第九に依り大正十二年三月七日指定せられたのである。

（備　考）一般に本文と相照應せしめた圖版中の實測圖は墳丘にありては平面圖及立面圖。石室にありては平面圖、側壁面圖を掲げて居るが平面圖には常に方位記號を加へてある。

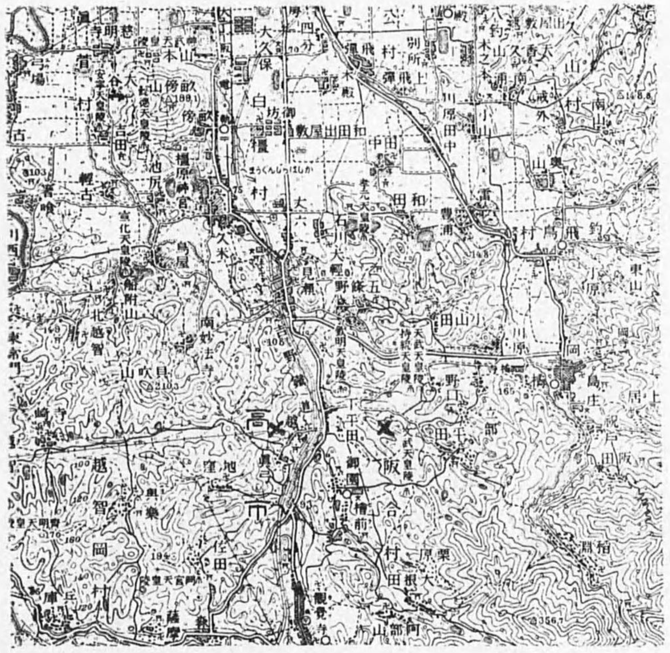
六　牽牛子塚古墳

圖版第二七——第三一

高市郡阪合村大字越の地籍に属し、越の聚落の西部丘陵の突出部に在る。海拔約百十米突の地點で、前面に狹い溪谷を利用した水田があり東稍北に欽明天皇陵、更に東方遙に天武持統兩天皇陵があり、鬼俎鬼厠の所在地及び中尾山古墳地域を望見することが出來る。南三十度東に高取山（海拔五百八十四米突）にして城址を望み、北に續ける丘陵には諸所に古墳が在る。

墳壟は丘陵の一部に築かれたもので基盤は階段を爲して居るが塚として形成されたのは、二段らしく其底部は直徑約八十八尺上段までの高さ約十一尺上段の基底の徑東西四十六尺南北四十尺高さ約十二尺塚の上は櫟林となり雜草が繁つてゐるが頂上の廣き處は約二十三尺南北は幅狹くなつてゐるのは、石室の口を開いた結果である。封土の北部には方形の石材數個散亂して居るのは何の爲めの構造であるか明でない。指定地域は字御前塚百八十九番地地目は山林で民有に属し面積四畝四歩である。

石室は一個の巨大な凝灰岩を刳り拔いて造つたもので口を南方に開き羨門（入口）の幅四尺八寸五分高さ三尺六寸厚さ二尺兩側の内面は幅廣き面取り（面幅三寸八分）を施して居る。其内部は中壁を以て區劃した略同形の二室を形成して居るが、東室は總幅（東西）三尺九寸三分長さ（南北）六尺九寸五分天井は四方の縁を下方に曲げた淺い穹窿狀を爲し（奥壁の直立部の高さ



率牛子塚(左)及中尾山(右)古墳位置

三尺六寸五分(底部からの最高所は高さ四尺三寸(溝の深さを加へて)底部には東壁に偏して幅二尺六寸長さ六尺三寸五分の床を彫り出し周圍に深さ一寸八分乃至二寸二分位の溝があり稍南方に傾斜せしめて居る。壁面には龜裂があつて漆喰を塡充した形跡がある。

西室は東室と殆ど異る處なく幅三尺九寸長さ六尺九寸二分最高四尺三寸五分(溝

の底から)天井の形狀東室に等しく床の大さ幅二尺六寸長六尺三寸八分周圍の溝の構造も略東室に等しく、側壁には龜裂がある。

中壁は奥壁から五尺一寸の處まで延び厚さ一尺四寸八分前面に於ては高さ三尺九寸東西の床からの距離は各一尺五分あり正面の兩側の角には幅二寸の面取りがあり白色粘土又は漆喰を塗抹せる跡がある。中壁前方の天井は稍南方に傾いて居る。內部のすべてが他の横穴等に見る如き粗造なものでなく全面石鉋を用ひたらしく非常に精巧に削つてある。又石室は前面を殆ど直立的に削つて居る。

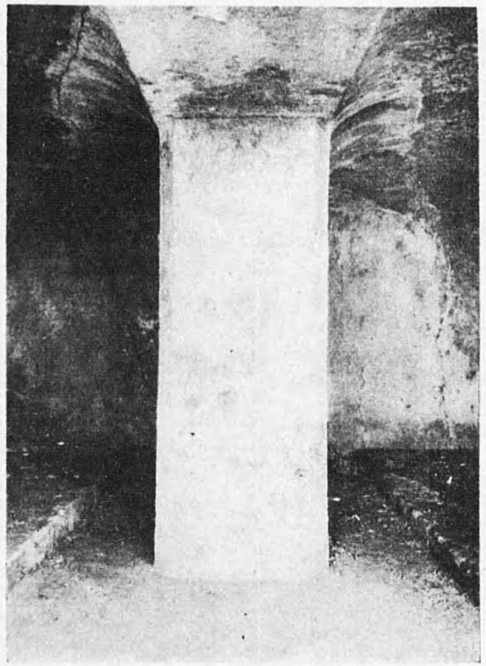
率牛子塚古墳指定地域圖

羨道の構造は詳でないが刳り拔いた巨石の前面の兩側に安山岩質の切り石を積んであるが之れは巨大な蓋石の兩側を圍んで居つたもので羨道の手法の名殘であらう。此の石室は內部に於て如上の特色を有するのみならず、其封鎖法が二重の石蓋を用ひて居るのは特記に價する。卽ち第一は羨門(入口)に對し嵌め込みの石蓋を有せしこと。更に其外方を蔽ふ爲めに石室に密接する面を平面に削つた巨石を用ひて居ることである。

第一の石蓋は石室と同質の凝灰岩で現今は四個に分割され石室の前面にあるが其四隅に近い部分に各方形の孔あり一方に座金の跡らしい方形の淺い彫り込みがある。金屬環を有して居つたかとも思はれる。石蓋の總長四尺七寸四分、幅三尺五寸厚さ一尺二寸である。卽ち此の石蓋の長さの部分は羨門の幅に相當し石蓋の幅と見る部分は羨門の高さに該當し明

に嵌め込み得るのであるが厚さは稍薄い感がある。

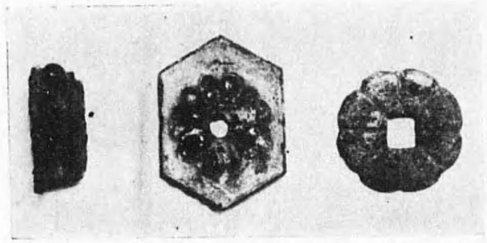
更に此の前面を蔽ふて居つた外蓋は安山岩質の巨石で其大さ九尺高さ地上五尺四寸發掘の際には之の外蓋を外方に傾け、内蓋を割つて内部に侵入したもので今はその儘に殘つて居る。



中壁前面

從來石室の口と石蓋の間には土砂充滿し一個の小孔があつて狐狸の住所となつて居たが大正元年以來奈良縣に於て調査し同三年五月羨門部の土砂を浚ひ出した際に内蓋の石材、乾濕製棺の破片、七寶飾具勾玉人骨等を發見し大に本古墳の價値を高めたが此等は過去に於て盜掘に遇つた殘餘であることはいふまでもない。

遺物の中で、最注意すべきは乾濕製の棺の破片である。破片の厚さは約七分位のもので、布を幾枚も重ねて漆を以て固めたもので、表面は黑漆を以て滑かに塗り裏面は割合に粗造であつて諸所に朱が附著して居る。棺の大さは石室入口と中壁の間隔及び面取りの構造及び床の大さ等に依て略想像されるし、人骨の存在から見て埋葬であつたことも推測されるから幅二尺二三寸長さ六尺位のものであつたと想像しても差支なからう。破片には底部と思はれる彎曲の傾向を見得るもの、緣邊と認むべき外方に反りを有するもの等があるが早く四方へ散亂して總合して見るべきものがない。棺蓋の樣式の如きも知る由もないが恐らく石室の天井に對應する樣な形であつたらう乾漆製棺は記錄上では阿不幾乃山陵記の中に於て想像せらるるが實物として見得るものは此の牽牛子塚のもののみである然して之れが過渡期と認むべき石棺に乾漆を帖り付けたものは菖蒲池古墳に於て檢出せられて居る。さうすると飛鳥の郊外の古墳には或る時代に棺若しくは棺の一部に乾漆を用ひた墳墓の盛行した事實を認め得るのである。然して其時代は後に述ぶる如く形式的に猶勾玉を副葬して居つた時であつたことも本古墳に依て證明さるるわけである。七寶裝飾金具は



牽牛子塚出土七寶金具(中)座金等

長さ一寸五分幅一寸厚さ一分の略六角形の板金の上に鍍金せる細線を以て六瓣の緣をかたどり琥珀色の彩色を施し花瓣外は白色エナメル狀である。然して中央に孔がある、同形のものは完全形一個、殘缺一個ある。座金と認めらるる金具は徑一寸一分中央に徑二分弱の方孔があり厚さ八厘表面に鍍金を施し全體が八瓣の花形に造られて居る。勾玉は徑六分のもので暗褐色を帶びた青灰色である。孔に對して横二分三厘、縱一分七厘大の玉と南京玉大の小玉を針線(鐵?)で連ねられたるもの二連を發見したが、其色に琉璃色あり白色綠色のものがあつて美麗である。(奈良縣史跡勝地調査報告第七冊牽牛子塚の部に挿入せる原色版參照)以上の七寶金具、玉を用ひた裝飾品等は正倉院御物にも此の系統の連續と認めらるるものがあつて奈良若くは飛鳥時代の文化系の一の淵源を此處に求むることが出來る樣に思はれる。

從來其名稱に依て淺香王の御墓ならんと云ひ、川島皇子の奥城ならんとの傳說もあるが詳でない。他の古墳にも附隨して居る共通傳說の一であるが此古墳の石材を他に持ち運べば不祥事を招くと云つて恐れてゐる。合葬式の石室として的確な此の構造は現在に於ては其類を見ないものである。隨て附近に存する一石室內に二個の石棺を藏する古墳は本古墳の先驅と見るべく古墳の時代序列を研究する上に於て極めて重要な資料である。かかる類例稀なる石室を有する古墳は永遠に保存の必要があるので史蹟保存要目第三及第九に依り大正十二年三月七日に指定せられたのである。

(參考)　奈良縣史蹟勝地調査會第七回報告牽牛子塚

七　菖蒲池古墳

圖版第三二——第三五

高市郡白橿村大字五條野の地籍に屬し、大和平野の南飛鳥地方の西に起伏せる低い丘陵の尾に近い傾斜面に營造されたもので、見瀨から岡に通ずる溪谷に面して居る。現今此の溪谷に完全な道路が開かれ吉野電氣鐵道の岡寺驛から橘寺、川原寺、岡寺等へ通じて居る。

位置は決して高くはないが附近の丘陵の高度は略等しいので、眺望に富み、南十度西に天武持統兩天皇陵があり、東南に佛頭山を望む景勝の地に在る。

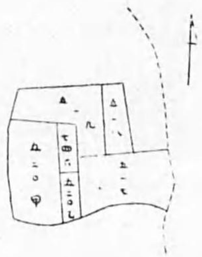
封土は殆ど除去せられ天井石の上部を露出し周圍雜林となつて居る爲めに墳丘の形狀は詳でないが、後方に稍離れて自然の丘陵の高い部分が恰も此の古墳を抱くが如き形にあるから恐らく丘陵の傾斜面を利用した圓墳であらうと思ふ。指定地域は字菖蒲池一千七百四十六番地雜種地で面積一畝歩民有地である。

石室は南面して居るが玄室の前方及び羨道部を缺如して居つて玄室內部には二個の石棺が南北に縱に竝んで居る。石室の石材は自然の花崗岩を用ひ、巨石を二段に積みその間隙には粘土を混じた漆喰土を塡充して居る。此の手法は他に明確な類例を見ないものである。天井は三枚の巨石を横架し奥壁に近いものは比較的小形で西端は折れて居るが他の二枚は幅七尺以上の大石である。石室の前面は墳丘其他の土砂を掻き均した爲め高く堆積し石室

内面にも土砂侵入し石棺の棺身部は殆ど埋沒して居る爲め從來棺身の全形を測定し得なかつたのであるが本報告者は大正十四年に測定に必要なる部分の土砂を排除しその全形を初めて見たのである。隨て石室の高さの如きも此時に知られたが奥壁の高さ八尺四寸幅約八尺東の側壁の現存せる長さ二十尺西壁は十九尺石材の用法は下一段は殆ど直立し、上の一段は多少内面に傾いて居る。

菖蒲池古墳位置

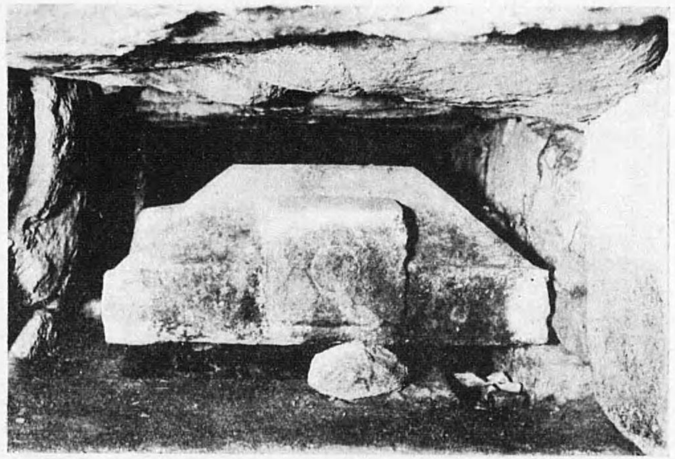
石室内部には長軸を中心として二個の石棺を南北に安置せられ二個共に略同形式の流紋岩の刳り抜き式石棺で棺蓋棺身の二部に分れ、棺蓋の表面は四注造の屋根型で小棟には多少の反りを有して居るが其特色と認むべきは石棺内面全部に乾漆を帖付て居る點である。乾漆製の棺は既に牽牛子塚に於て發見せられ附近の帝陵にも存在せし傳說があり今此の菖蒲池の石棺に過渡期の樣式を見るのである。二個の石棺は其製作技術だけ見ても精巧で、形狀の雄麗なるに驚かされるのであるが更に内面に乾漆を帖り其表面全部を朱塗にしてあつた當時を回想すると頗る華麗莊嚴の感に打たれたであらう。今奥壁に接近せるものを甲棺とし其南にあるものを乙棺として形狀を記して置く。


菖蒲池古墳指定地域圖

甲棺の棺身は長さ八尺四寸二分幅四尺七寸九分高さ三尺三寸五分の立體で四隅には各面に對し縱に幅六寸五分の柱狀の薄き彫り出しを附し長き兩側面の中間には更に幅八寸の直立せる柱狀の彫り出しあり上緣及び底部に沿ひて周圍に幅六寸餘の彫り出しを廻らして棺身を裝飾して居る。棺身の内面は長さ六尺四寸九分幅二尺七寸深さ一尺六寸三分で底部に向ふに隨ひ多少狹窄して居る。然して此の内面には悉く厚さ一分五厘の乾漆を帖り全面が朱塗である。普通の棺身は底部に至るに隨ひ構造も粗雜で多少狹少になる傾があるが此の石棺は上下共に等しい尺度を有し立派な家形である。屋根の形狀から見て棺身の縱の柱形も之に對應せしめん爲めの意匠と見ることが出來やう。

棺蓋は精巧で全長八尺七寸幅五尺高さ二尺一寸大棟の頂上長さ五尺八寸六分幅二尺五分は平面であるが小棟に反りを有し棺身との合口に近い處に特色ある裝飾的彫り込みがある。内面は長さ七尺幅三尺深さ約四寸の彫り込みがあり全面乾漆を帖り朱塗を施して居ることは棺身と同樣である。然し現今に於ては棺身部は一面に雨水の侵入に依て乾漆は黑色の儘保持されて居るが棺蓋の裏面は乾燥の爲め剝落甚しい。

乙棺の棺身は、長さ八尺一寸三分幅四尺七寸四分高さ三尺二寸四分の立方體で、棺の形式及



永泥古墳羨道内の石棺

び技巧は略甲棺に等しく只上縁及び底部に沿へる幅約六寸五分の周圍を廻る帶狀の彫り出しの兩側面に各四個前後に各二個の短冊形の淺い彫り込みの裝飾があり内面は長さ六尺九寸幅二尺八寸四分(一方は稍狹し)深さ約一尺八寸内面には悉く厚さ一分五厘乃至一分七厘の乾漆を帖つて居るが水を湛えて居る爲めに注意するものが少なかつた。

棺蓋は既に破壞されて全長を知ることが出來ないが、殘存部の長さが六尺四寸あるから、約二尺を割り取られたものである。高さは二尺三寸で稍甲棺よりも高く、大棟の頂上の中央に凹い彫り込みがある。小棟の反りは稍少ないが棺蓋の合口に近い部分には甲棺と略同樣の裝飾がある。要するに乙棺は小部分に於て技巧上の變化を附したものである。

石室内に兩棺を据ゑるに際し、底部に板石を敷き、その上に石棺を置いたもので、兩棺別々に底部に板石を敷き其平面は略同一で極めて僅少に前面(南)に傾いて居る。然して板石の端は棺の周圍より約八寸五分程外方に出て居る。兩棺の間隔は二尺五寸五分で略同時に底部に板石を敷きて据ゑたと認めらるるから設計が同一時であつたことを推斷し得るのである。即ち合葬式古墳として埋葬法の比較的確實なものと認められる。彼の南葛城郡葛村大字水泥の古墳石室内には一は玄室内に一は羨道内にある爲めに羨道のものは時期を異にして葬つたもので初めから合葬する爲めの石室とは認め難い樣であり且玄室内のものには繩掛凸起の外何等の裝飾はないが羨道部の石棺の前後の繩掛凸起には六花形の陰刻模樣がある。此の如く兩石棺の裝飾に特別な區別がある點からも後入のものたることを首肯せらるる。又同じ葛村大字稻宿の古墳石室には奥壁に近く綠泥片岩の箱式棺があり其前方に家形の刳り抜き石棺が安置されてある。之れは一玄室内に二個の石棺を容れ得る程の大さに造られてあるから初めから合葬の目的であつたことは明かであるが一玄室内に於て各石棺の樣式を異にして居るのは注意すべきである又攝津國三島郡の一古墳にも一玄室内に二個の石棺があつて奥の分は組み合せ式となり入口の分は刳り抜式である。之れは石棺の樣式の進化竝に樣式に依て年代の新舊を論ずる際に考慮すべき資料である。此の菖蒲池古墳内の兩石棺の如きは之れと狀態を異にするものと見なくてはならぬ。一般に石棺の裝飾は棺蓋に施さるるもの多く棺身を完全に裝飾せるものが少く此の古墳の石棺の如き技巧は極めて寥々た

るもので大和に於ては生駒郡平群村の越木塚の石棺に棺身の上縁及び底部に接して帶狀の彫り出しのあるのを見るのみである。乾漆の利用の盛行したのは奈良朝の佛像製作に於て見得るのであるが之れに先んじて石造物に之を應用したのは桼漆技術上からも異數と云へるだらう。

遺物として何等傳ふるものがないが古來此の古墳内に入ると惡病に罹るといふ傳說があり曾て前方の石棺を破壞した石屋は一家沒落の悲運に遭遇したといつて居る爾來石室の周圍に木柵を設けて保存法を講じて居つたが史蹟保存要目第三及第九に依り昭和二年四月八日に指定せられたのである。

（參考）高市郡古墳誌　菖蒲池古墳

八　中尾山古墳

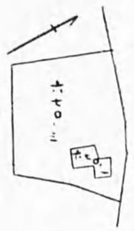
圖版第三六——第三九

高市郡阪合村大字平田の地籍に在つて平田の民家の西方に起伏せる一丘陵の上にある。丘陵の間には水田があり丘陵上は畑地となつて居るが古墳敷地は櫟木林を爲し南四十度西に文武天皇陵があり、東北に天武持統兩天皇陵があり南二十三度西に檜隈寺の阯がある西北は水田を隔てて欽明天皇陵に相對して居る。前記菖蒲池古墳は丘陵を隔てて北稍東に位する。

墳墓は東南から西方に向つて緩く傾斜せる丘陵の頂點を利用して築かれたもので、丘陵の上に石室を組み封土は盛り上げて造つた形式の圓墳で、此封土を保持する爲めに周圍には直徑一尺五寸以上の比較的大きな石を二段に卷き其上部は礫石を以て葺いたもので古來石塚の稱ある所以は此に存する。卽ちローム層の地盤の上に築造する方法としては當然の技術であつたらうが、然し傳統的に葺石の觀念を踏襲したものと見ることが出來る。封土の底徑は七十三尺高さ約十五尺頂上は石室を發掘した爲めに崩壞して居るから原型を確認し難いが直徑略三十尺を算することが出來る。然して封土の裾部は諸所崩壞面を見せて居るが之れは周圍を卷いて居つた石材を他に持ち運んだ結果である。墳輪は元來用ひなかつたらしく破片をも見ない。封土の一部は現に耕されて畑地となつて居る部分もあるが大部分は雜

林である指定地域は字中尾山六百七十番地に屬し其二は畑地で一畝五歩を有し其三は山林で八畝二十四歩ある。

石室の外形は殆ど他に異る處はない樣であるが形狀構造共に特異なもので、先づ底面に板石を敷き其上に側壁を形成する爲めに三枚の殆ど同形の板石(厚さ一尺位)を以て圍み南の一側石は後から嵌め込みの裝置を施し其上に上部は殆ど自然石のままで側方四周及び內面に相當する部分を平面に削つた巨石を以て天井石として室を造り外部に於て自然に四方の隅に出來る空隙を充たす爲めに四個の方形石材を組み合せた構造實測圖參照)で、之の關係は大正十四年西側を發掘して、河原石を混じた細砂を以て側壁及び基盤を圍みたる土木的技術と共に確認したものでそれ以前は知らなかつたものである。



中尾山古墳指定地域圖

側壁の內面は何れも幅三尺高さ二尺九寸三分滑かに磨き朱塗を施したる如く、發掘測定の際西側石の外部に現はれたる部分を測定すると內面三尺のものが四尺二寸六分となつて居る。卽ち一尺二寸六分が組合せの切り込みの部分である。切込の實例を見る爲めに東側石の東南に於て實測すると長さ六寸幅四寸七分を有して居る。然して北西隅に西側の幅一尺九寸九分の石材と西南隅に西側の幅一尺五寸三分の石材を欽めてあるから西側は外部から見ると三石で出來て居る樣に見える。東側石の內面に於て三尺に形成せるものが外側では、四尺一寸三分其東北隅に東側で一尺八寸五分の石材を塡充し東南隅の一石は盗堀の際除去したものであらう。此の間隙と南の側壁を移動せしめて約八寸餘の幅を開きて此の部分から內部に侵入し得るのである。石室內面は東西の幅三尺高さ二尺九寸南北は南側石の移動に依て廣くなつて居るが底部の構造東西兩壁の切り喰しから見て矢張り約三尺であるから內面は略三尺立方のものであつたらう。然して底部の石材は水平面を保ち東西北の側壁に沿ふて幅約五寸の薄い高さ約一寸の緣を彫り出し其內底は更に二段(高さ約一寸の差がある)になつて居る。底面には今猶炭灰の粉末が附著し側壁には朱痕がある。天井石は南北の長さ一丈幅七尺四寸最高き部分三尺四寸五分西側(E)は垂直に削つてあつて垂直面の幅廣き處二尺八寸狹き處一尺四寸東側(W)は垂直面を幅二尺に削り南の垂直面(S)は幅不同である。內面は平滑に磨き鏡の如き光を呈して居る。現今は石室の上の土を除き東部及び南部を發掘して側壁の一部を露出して居るが天井石の上には元來約四尺位の土盛りを施してあつたものであることは北部に殘存せる封土の一部で知られる。

遺物は何等傳ふる處がないが土俗に之の塚を以て檜前安古岡上陵であると唱へ大和志にも陵は「在平田村西呼中尾石墓」とあるが文武天皇陵は今阪合村大字栗原に存するから俚俗の言若くは後世の成書を以て之を信ずる事は出來ないが學術上から見て、外形は傳統的の圓墳の形式に則り石室內部が特に小形で、構造上の意匠が石箱の性質を多分に示現して居る點は他に類例のないもので、埋葬の爲めに築いた古墳石室の內部構造を多少變更して火葬の藏骨石室とした過渡期のものと認むべく、石室內には更に金屬製等の骨函を安置したかも知れぬ。

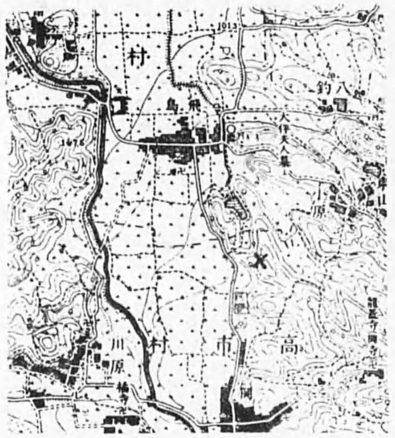
此の如き古墳は本邦に於て未だ類例を發見しない貴重なものであるから史蹟保存要目第三及第九に依り昭和二年四月八日に指定せられたのである。

（參考）奈良縣史蹟勝地調査會第二回報告　中尾山古墳

九酒船石

圖版第四〇——第四二

高市郡高市村大字岡の地籍に屬し、岡寺の北二十度西に連亙せる低き丘陵の高點に在つて飛鳥村の堺に近い。北西に飛鳥大佛、南四十度西に橘寺、川原寺址があり、古代に於ける飛鳥地方の中心地點に接して名勝舊蹟は少くない。



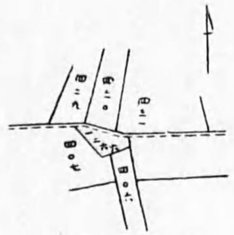
酒船位置

附近の丘陵は殆ど畑地となつて居るが僅少の雑林若くは藪の間に雑草地として取殘された高地に酒船石があつて西方は平野に面し眺望のよい場所である。丘陵の麓には縣道があり小溝を渡つて丘陵に登れば小徑の傍に稍低く安置されて居つて、附近には何等の附屬的遺物も、施設も發見されて居ない。

土地は極めて凸凹の多い雑林草地及び畑地の間で、雑木雑草の繁るに任せてある。指定地域は字酒船一千二百六十六番地で地目は雑種地面積十七坪二五を有する。

酒船石は長さ十七尺五寸、幅廣き處七尺五寸厚さ約三尺二寸の偏平な花崗岩から成り其長軸を略東西に置き、石の西端に近い底部には徑二尺六寸長さ約五尺の丸みを帶びた花崗岩の臺石がある。然して其臺石附近には赤土を以て塡充した形跡がある。

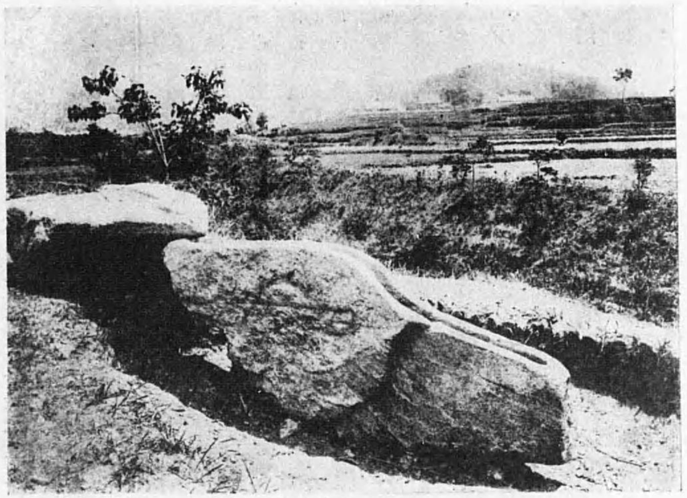
酒船の表面は略平で稍々西方に傾き、主軸に沿ふて東(幅廣き部分)に南北の直徑二尺四寸東西の直徑一尺五寸深さ約二寸の圓扇形の沈澱所を刻し、それより中央と左右とに各幅三寸深さ二寸五分の直線の小溝を穿ち、中央のものは主軸に沿ふて石の略中央に刻せる楕圓形の沈澱所に通じ、左右の溝は各反對の方向に斜に外方に走り、各支溝を石の左右側に近く刻せる直徑一尺八寸深さ約二寸五分の略圓形の沈澱所に通じて居る(實測圖參照)中央の沈澱所は長軸四尺六寸、幅二尺二寸深さ三寸四分あり更に中央から西に幅三寸長さ四尺四寸の直線の小溝を主軸に沿ひて開き其末端が稍膨れて終り又別に中央沈澱所から北に向つて斜に小溝を派出し其末端に略圓形の小沈澱所がある。中央溝の末端から約一尺程低い緣があつて此の上に彎曲せる沈澱溝が刻してある。



酒船指定地域圖

古來長者の酒船と稱し古代の釀造器の一部ならんとの說はあるが詳でない。長者傳說に就ては本居宣長の菅笠日記(下卷)に十一日(明和九年三月)朝まだきやどりを立ちて岡寺に詣づ云々。又岡ノ里に歸り三四町ばかりも北へ離れゆきて、右の方の高き處へ一町ばかり登りたる野中にあやしき大石あり長さ一丈二三尺横は廣き處七尺ばかりにて硯を置きたらんやうしていと平なる。中の程にまろに長くえりたる所あり又五六寸ばかりの深さにて底も平なり又そのかしらと云ふべきかたに同じさまにちひさくまろにえりたる所三つある。(中略)そもそも此石いづれの世いかなる由にてかくつくれるにかいと心得がたき物のさま也里人はむかしの長者の酒ぶねといひ傳へてこのわたりの畠の名もやがてさかぶねといふとか此石昔は猶大きかりしを高取の城築きしをりに傍をば多くかきとりもていにしとぞ」と記してある。酒船石の兩側は現今石矢を用ひて割り取りたる形跡があるから既に明和の頃に此のまま存在して居つたことは確實であるが高取城の石垣に使用したかどうかは保證し難い。高市郡に於ける近世の大土木工事は高取の築城であつたらう。海拔五百八十四米突の山頂を築城の各形式に隨つて削平し近世式な殆ど平野に築けるものと同樣の石壘を築いた高取城には石の運搬に關する種々の傳說がある。中にも猿石(石人)の傳說の如き、又白橿村に屬する著名な益田池の碑石を割つて積み込んだ傳說の如き顯著なものであるが此の酒船の如きこの傳說に洩れない處から見ると飛鳥地方に於ける古代の巨石遺物として屈指のものであつたことを證し得らるるのである。

酒船石の西々南約四町を隔てた飛鳥川の沿岸字出水通稱ケチンダと稱する耕地に於て大正五年五月に偶然之れと類似の石造物を發見したのである。水田の溝に現はれた石材の一端を辿つて發掘せる結果二個の花崗岩を組合せ主軸は北々西に向つてゐるのを實見したが



出水發見石造遺物

幅廣い沈澱所を有するものは長さ七尺四寸幅五尺七寸の偏平な薄い石材で沈澱所は略軍扇狀を呈し長さ四尺二寸幅三尺三寸深さ約二寸一方に小溝を有し之より他の石の溝に連絡する裝置である。然して第二石は幅狹く丈高く長さ約十尺幅一尺上端に幅平均三寸の多少彎曲した溝を造り、溝は傾斜し中に二個の沈澱所を造り末端は小孔を以て外方に放出する樣になつてゐる。附近には竹片土器片、木實、籾殼等も出土したといふが此所でも用途を明にする他の裝置は發見されなかつた。

酒船石は稍高所に位し之れは地下に埋沒して居つたのであるが略同樣のものらしい。酒船石の如きは學術上顯著なものであるから史蹟保存要目第八に依り昭和二年四月八日指定せられたのである。

一〇 頭塔

圖版第四三——第五五

奈良の春日、興福寺の地域は、東方の山脈から派生した御蓋山の麓の西に延びた高い部分に選ばれたものであるが之と平行して南に淺い低い溪谷を隔てて東から西に連亙する臺地がある。卽ち高畑の稱ある處で、之れが西に延びて瑜珈山、鬼園山となつて盡き、興福寺の伽藍地域と相對して居る。然して臺地の北に沿へる溪間の水を堰き留めてさぎ池、荒池等の水を湛え附近に特種の風光を現出して居るのである。

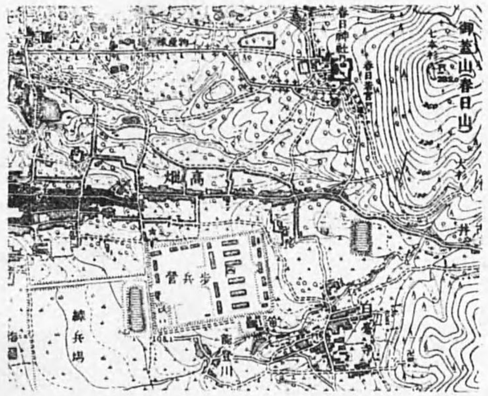
さぎ池の南方臺地に鬱蒼たる森がある。之を稍低い京終附近から見ると常綠のコンモリとした森の姿が興福寺五重塔と共に奈良市の南面に特異の風貌を與へて居る。之れ卽ち俗に頭塔の森と呼ばれるものである。

頭塔は奈良市高畑町字頭塔町九百二十一番地に屬し古墳墓として一段八畝十一歩の地籍を有し國有地となつて居るが塚の形式竝に四方に存在せる石佛の彫技は正に奈良朝樣式の作品と見られて居るもので本邦の石彫史上に特殊の地位を要求すべきものである。

塚は臺地の高い部分に築かれ下段には高さ約五尺の土壇と見らるべき部分があり、更に其上に缺尖方錐狀の低い塚を築いたもので、原形を保持せしむる爲めに徑七八寸乃至一尺位の自然石を以て表面を葺きたる如く、現今塚の各稜に於て其著しき狀態を目擊することが出來

る。西南部の切斷面に於ては堆土の表面に近い部分に石塊竝に細繩文及び布目を印せる古瓦片を包含し、奈良朝の樣式を有する巴瓦の破片をも發見したが、塚の土工竝に其時代を推定するに見逃すべからざる材料である。

塚の基底は方形で外觀上方墳とも見得るものである。東西北の三面は略同一の土壇上に築かれ南方は三四尺程低く土壇の形狀はなくて墓石及び低い石緣があり、隨分形式が崩れて居るが其前面に多少の廣場もあり古井戸もあつたらしく恐らく頭塔寺などの創設の際に餘程舊形を變化せしめたものであらう。塚上に於ても南面からは登り口を作り不完全ながら石段と認むべき名殘が二箇所に在る。東南の崩れた部分は後世土取場として土砂を採集した結果であらうし、西南の堆土を切り取つた場所には小建築があつたが現今取り除いて其屋根瓦が散亂して居るのを見るのである。土壇上で測定すると塚の一邊は約八十尺高さ約二十三尺頂上では南北十二尺東西十六尺あり塚の全面には樫其他の樹木が密



頭塔位置

生し鬱蒼として居る。塚の周圍には木柵を廻らし漫りに出入の出來ない樣になつて居る。

頭塔の形狀が果して古墳として認むべきものであるかどうかは問題であるが、更に四方に配置せる石佛を合せて考ふる時は、實に類例稀なる塚と云はねばならぬ。現今發見されて居る方墳に果して此の如き石佛を構造の要素としたものがあるか若し方墳でないとしたならば如何に解釋すべきものであらうか。但し之の問題の解決法の一として發掘的調査が殘つて居るのであるが一般に古墳の外形に有り得べからざる石佛の配置が全體として何を意味するかを攻究することに依て解釋を求むることが安全であらう。

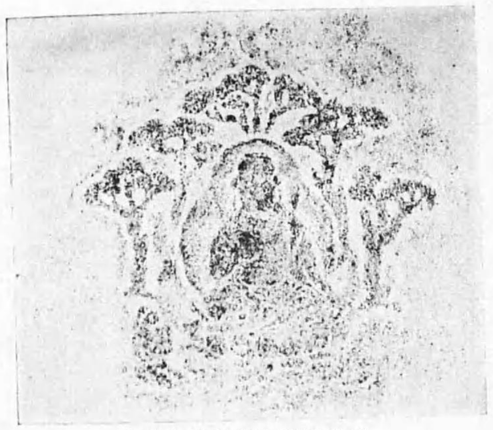
石佛の配置は、方形の堆土の一邊の略中央を選んで階段的に配列されたもので、石彫の手法は薄肉彫線彫りの二種あり、大體に於て三尊佛の形像を主題とせるもので、形狀が小さく磨滅せる部分もあつて、容委の鮮明を缺くものもあり且現今見得る石佛を以て頭塔創始當時の石佛の全體であると斷言し得ない以上全體として如何なる意義を表現したものであるかを知ることは困難で隨て個々の石佛に就ても其見解必ずしも一定せず定說として認むべきものも現はれてゐないのであるが、形態を主として東方のものから漸次記述して見やう。

東方には堆土の底部(土壇上)の中央に東面せる一個の石佛がある。石質は花崗岩で幅廣き處三尺六寸五分高さ地上三尺四寸五分中央の稍彎曲せる薄い石材の表面に三尊佛を浮彫にしたもので、中尊は藥師如來と見られ、二重圓光を背にした座像で高さ一尺二寸七分兩挾侍高さ一尺一寸水上に派生せる蓮座の上に座し、下には二童子が合掌して讃嘆せる狀を示し、頭上

には寶相華の天蓋其兩側には飛雲の浮出模様を刻してある。頭塔の石佛に通有の様式であるが、全體の形が小さい爲めと群像を取扱つた爲め、浮彫は極めて淺く極めて平面的で恰も押繪か繪畫を見る如き感を與へる。然しその技巧は極めて圓熟せるもので調和的な雄麗な線を示現し奈良朝盛時に於ける木彫や鑄像に劣らない域に達し單に佛像其もののみならず附屬莊嚴の配合に於ても他に見るべからざる巧緻の作品であると認められる。

北面下段の中央に北面せる石佛は、石質は稍粗であるが石の幅廣き處五尺地上の高さ三尺三寸石の兩側には石佛の表面から約一尺八寸佛像面に直角に突出せしめた低い石材を以て圍んでゐる。之の構造は他の石佛にもあるが何のための構築であるか恐らく或時機には佛龕の如き構造の存して居つた遺構の一部ではあるまいか。若しそうでないとすれば石佛面に流れ込む土砂除となつて居つたものであらう。中尊は寶生佛と認むる人があり座像で高さ一尺二寸挾侍は立像で高さ一尺八寸、頭上には豐麗な寶相華の天蓋があり蓮座の手法も極めて優美なものである。此の石佛の直上で塚の北斜面の中間より稍下方に當つて北面せる一個の石佛がある。近年發掘に依て發見されたもので石材の幅三尺四寸地上の高さ二尺二寸中尊の高さ一尺二寸單層の寶樓閣を背後にし諸々の羅漢を配してゐるが樓閣の大棟の長さは六寸八分ある。此斜面の最上段のものは頂上の土砂と略其頂點を等しくし石の大さ幅二尺六寸地上の高さ二尺四寸五分兩側は細長き石にて圍まれ中尊の高さ一尺七分脇に諸佛を配し寶閣を背後にして居るが其大棟の長さは四寸二分である。

西面下段の略中央に西面せる石佛は花崗岩で、幅廣き處三尺七寸地上の高さ三尺三寸兩側には長さ約二尺の細長き石で圍んである。中尊は二重圓光を背後にして彌陀の定印を結び蓮華に座し高さ一尺四寸五分、脇侍は池上から伸びた蓮華の上に半跏の姿勢をとり高さ一尺五寸蓮座の下には二童子が合掌讃嘆し頭上には寶相華の天蓋及飛雲を彫つて居るが刀法稍深く圖樣鮮明である。此の石佛の南に近く略同一の面に極めて薄肉彫の石佛がある。高さ二尺八寸五分幅廣き處二尺の石材の中間より稍上に樹下像を刻して居る。



頭塔西面下段南石佛拓本

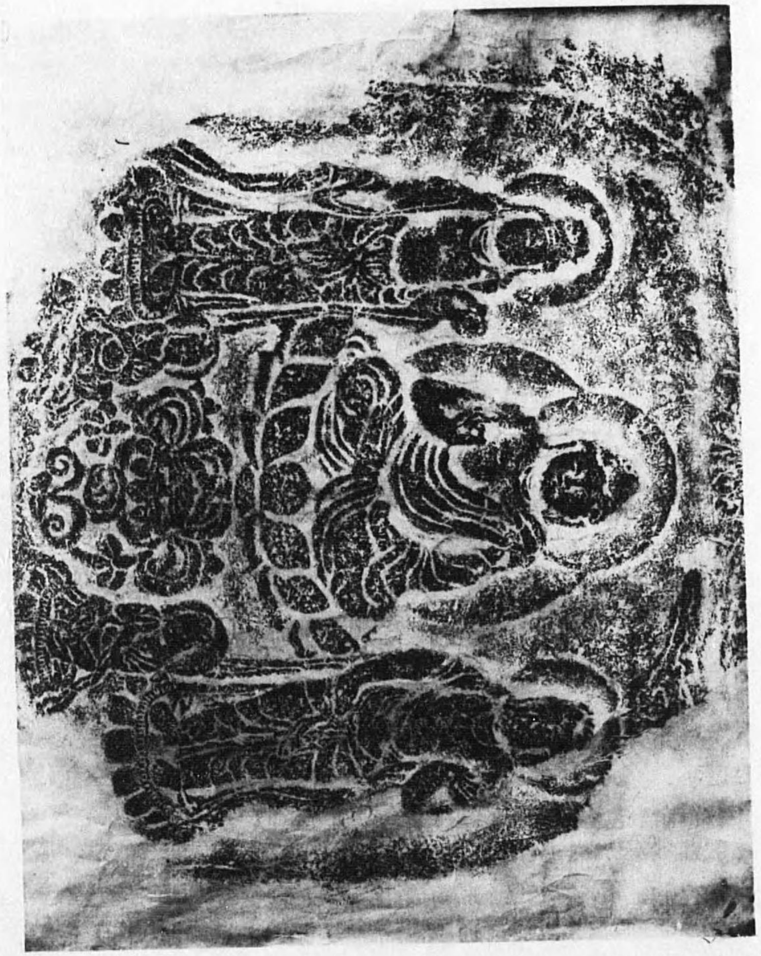
阿彌陀尊像の石佛の北十數尺に線彫の一石がある。石幅一尺七寸地上の高さ二尺二寸。金棺出現の圖樣又は涅槃像と認むべく背景たる寶樹の技巧は南方の石佛のそれと同じ手法である。

西面に於ては中段に於けるものは發見しないが最上段は北面のものと頂上を略等しくし、石の幅廣き處三尺高さ二尺五寸兩側に細き石を加へて居るが、中尊の高さ一尺五分背面の寶閣の大棟の長さは五寸二分ある。

南面に於ては下段のものは他の三面よりは低くして鹿園男爵家墓地の背後に位し、石は幅廣き處三尺七寸高さ三尺五寸中尊は二重圓光を背にした座像で釋迦佛と認むべく高さ一尺三寸兩挾侍は立像で高さ一尺八寸弱である。尊像の上には寶相華の天蓋を有し蓮座の技巧は他の三面と略等しい。

西に移動して樹てられた卵形の石材は高さ三尺七寸幅二尺一寸其中央から上に火焔の中に尊像を刻し童子のものを捧ぐる姿を刻してあるが尊像の高さ一尺二寸牛乳供養の像であらうとのことである。南斜面の中段と認めらるる處は後世多少の變遷があつた樣であるが、東に粘板岩の幅二尺四寸地上の高さ二尺一寸五分尊像は高さ九寸二分二重圓光の外背面に十個の化佛を附してある。其西方に存在せるものは石の幅廣き處三尺一寸地上の高さ二尺五寸背後に鴟尾をあげ風鐸を吊した重層の寶樓閣を後にして佛菩薩の出現を刻したもので寶閣の上層の大棟の長さは五寸二分ある東部のものの稍上に幅一尺五寸五分高さ一尺八寸の小石佛がある。背面には重圓光の外化佛六個を有し小形であるが鮮明な鑿を用ひて居る南面の最上段には石佛を缺いてゐるが頂上の平坦面には近世に建立した五輪石塔があり、史蹟標識も樹てられて居る。

現今知られて居る石佛は十三個であるが創設の際はどれ程の數を配置したものであらうか、元來此等の石佛は多く土砂に埋められ三分一位を見せて居つたものであるが頭塔の研究が起てから、新に發見せられたもの數個あり猶今後發見さるるものがないとも限らぬ。隨て



石面南塔頭佛

此の石佛の示す意義に變化を及ぼし今日以上の解釋を爲し得る時機があるかも知れない。

現在の石佛配置に依て見るに元來四方三段に置かれたものらしく、下の一段の尊像が此の塚の主要なる部分を占めたもので佛像の樣式、莊嚴は何れも華麗の趣がある。卽ち四佛淨土相の主體と見る說のあるのは當然と思はれる。其上方の各段の群像型式のものは殆ど背後に寶樓閣を有するもので他は多く尊像一體を彫つたものである。然して此等は如何なる敎理に基いて創始されたものであるか文獻の徵すべきものなく的確な比較材料を缺いて居るが石佛の樣式を他の佛敎的遺品と比較して見ると下段南北兩面の如きは法隆寺所藏打出三尊佛の形式に類し各面の莊嚴座の樣式は橘夫人念持佛のそれを思はしめ中段以上の鵄尾をあげた寶樓閣は中宮寺の天壽國曼陀羅の中のものに類したものがあり玉蟲厨子の臺座の密陀僧繪にも見え、大佛蓮瓣の毛彫の中にも現はれて居るもので如何にも製作當時の藝術の反影を偲ばしめる。

彫像法は石が小形で石質が良好でない爲めにのんびりとした氣風に乏しく石彫としては餘りに精細に過ぎはしないかと思はるるが恰も木彫にも等しい圓熟した刀法を用ひ、平面的ではあるが雄麗な趣がある。勿論此の彫刻には有力な紛本が控へて居つたと思はれるが、良好の石材に乏しい我國に於て試みた石彫として構圖と云ひ彫法と云ひ他に類例のないもので正に本邦石彫史の劈頭を飾るべき遺物と稱しても過言でなからう。

頭塔に關する文獻として最も早いものは七大寺巡禮記であらう。卽ち「彼僧正在十三重大

墓以僧正之頭埋此墓故號頭塔又此墓之四方仁石多之皆以佛菩薩之像也云々在興福寺巽方去五町餘天平十年十二月爲大宰少貳廣繼之靈入滅云々」とあるが以後は殆ど之を踏襲したらしく德川時代に入つた貞享四年印行の「奈良曝」には清水町といふ所に在り聖武天皇に仕へ奉りし大宰大貳兼少將藤原廣嗣は海龍王寺の開山玄昉僧正の事に依て遙かに筑紫に流されて恨みを含み亂を起しけるが京より討手下りて討れぬ。その恨み猶やまざりけるにや玄昉筑紫の觀音堂供養の導師に下り給ひしに廣嗣が怨靈玄昉をつかみとり虛空にうせて後玄昉の骸を此南都方々へ捨てける時かしらを此所に落す、名僧のかばねなればとて光明皇后此所に埋ませ給ひしとかやこの故づとう山ともづとうの町とも云ふ」とあり玄昉變死の所傳は續日本紀天平十八年六月己亥の條に在る。即ち

僧玄昉死。玄昉俗姓阿刀氏(中略)天平七年隨大使多治比眞人廣成還歸賫經論五千餘卷及諸佛像來皇朝亦施紫袈裟著之。尊爲僧正安置內道場自是之後榮寵日盛稍乖沙門之行時人惡之。至是死於徒所。世相傳云爲藤原廣嗣靈所害

元享釋書に據ると

(天平)十八年六月　筑紫觀世音寺戍　昉爲慶道師　乘輿入殿　忽空中提昉　昉騰不見後日昉頭落興福寺唐院　蓋藤廣繼之靈爲之也。

とある然し玄昉の髑髏の落下せる處に就ては異說があつて、平家物語には西金堂とし、源平盛衰記には興福寺南大門となし師錬の元享釋書には唐院となつて居る。傳說である爲めに區々となつてゐるのは止を得ないが、南都七大寺巡禮記の興福寺巽方はよいとしても天平十年十二月入滅と書く位だから必ずしも確實なものとは認め難い。かかる說が出て來ると追々實際問題として供養其他施設が出來てくるのは當然で寬保三年には新に頭塔寺が創立され日蓮宗常德寺末となり　頂上の五輪石塔の榜には

(表)　南無妙法蓮華經　賜紫僧正玄昉之御頭塔

(裏)　皇帝天長武將地久經主廣布萬民快樂　感得開基日實聖誌

又其左右に

(右)　自天平十八丙戌至寬保三癸亥一千歲建吊之也

(左)　從賢聖院主法眼秀英學士永代于常德寺讓賜也

と刻してあつたが今は現地には存在しない。

然し之を奈良朝の墳墓として見る時は極めて異例であつて他に類を見ない筑紫に於て變死した玄昉に對し、何故に斯る高燥な地を選び類稀なる莊嚴な塚を築いたか此等の消息を傳へる文獻は徵するに由がない。遙か後世に現はれた七大寺巡禮記以下の諸書の說明が果して此の頭塔の眞相であるかどうか、被葬者を玄昉とする說はにはかに信じ難いが此の特色ある優秀な石佛を有する頭塔は卒塔婆(スツーパー)の意味を包藏するものとして種々研究されて居るらしい。其堆土の形狀四方四佛の配置から見て土塔と認むべきであらうと唱ふる說が有力である。又佛敎藝術の研究者の內には頭塔の全體が一種の曼陀羅の表現であらうと考へて居るらし

い。然して其源流を支那大陸に求むべく玄昉と結び付いた理由は玄昉が支那に留學し佛教界に新傾向を注入した人である爲めではなからうかと論ずる人もある。

明治維新後上地の結果國有となりその儘維持せられたが近年奈良縣史蹟勝地調査會の活動に依て、研究され漸次其眞相が世に知らるるに至り、之れと同時に石佛の手拓を希望するもの增加し漸次石佛の磨滅を招く虞れがあるので史蹟保存要目第二に依り大正十一年三月八日に指定せられたのである。

（參考）奈良縣史蹟勝地調査會第三回報告、頭塔山ノ石佛

二　行基墓

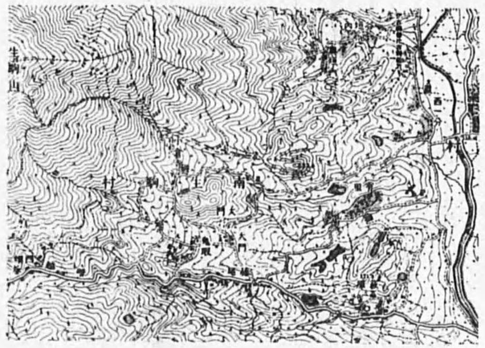
圖版第五六――第六〇

生駒郡南生駒村大字有里の地籍に屬し、西に生駒の山嶺を負ひ、その東麓の丘陵は東に延びて生駒川の溪谷に迫り、川の對岸には低い松尾山脈があつて大和平野と隔離して居る。生駒川右岸の丘陵は起伏して式內往馬坐神社の森を北に興山を南に控へた低い丘陵に元竹林寺の境內あり行基墓は此地に在る。興山の南に美努連岡萬の墓所があり天平二年十月廿日の墓誌が發見されて居る。

竹林寺は明治初年に廢寺となつたが今猶寺址として大界石標も殘り、建築の跡もあり、階段に使用した石材の一部も殘存して居る。又附近には忍性和尙の墓、傳賴朝墓、近世のものでは賢照和尙の墓等があり村落の墓地もある。東に面して天理教會の建物もある。指定地域は小字文珠山と稱し臺帳面積五十坪で國有地である。附近一帶は松林となつて荒廢の狀を呈して居るが近時土地の管理者唐招提寺は種々苦心經營して墓地復興の計畫を立てて居る。然し未だ實行には至らない。

墓地は文珠堂土壇址を中心としたもので、文曆二年八月行基大僧正舍利瓶出現の地である。其由來は凝然國師の竹林寺略錄に「文曆二年乙未八月廿五日菩薩靈廟御瓶出現（自其前年有諸奇瑞）自乙未歲　今上御宇嘉元三年乙巳經七十二年　其間道俗起信　貴賤致誠　十方來詣　歷年彌昌

然則勝寶嘉暦唯建塔廟　安置舍利莊嚴而已　非別寺宇堂房等構　文暦代出現以後　土臺博
作　嶮岸曳平　塔廟高廣　峙入天漢　廊宇長横　懸作岸端　中門聳上　通往還人　詣者高
仰　如向白嶽　還者直下　似墮黒澗　飛梯重々　切
石横壁　塔前開庭　坦如鏡面　石爐容燈　廟前峙立
塔内安菩薩　馱都龕器　重々構造　銀瓶懸瓔　奉納
馱都銅筒　二重莊嚴綺麗　内筒有銘　外筒堅構　石
筒在最外　八角雜方樗　大塔中心安文殊像　五髮委
容光耀赫々　賚梵文智劒　乘金色師子　内扉四面圖
菩薩十大弟子　外壁四方畫　顯密諸宗祖影　外護神
天　四戸翔々　龍珠衆綵　四維珍々」

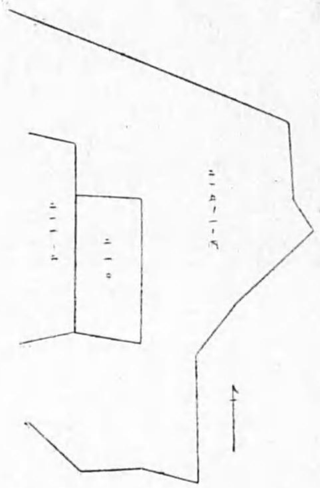


行基墓位置

とあつて詳に知ることが出來るが舍利瓶發見當時の狀況は別に當時の註進狀に依て傳へられて居る。最初の墓地の構造を知るには是の記事に依る外資料はないが幸に舍利瓶の破片が殘存し註進狀附屬の銘文寫と符號して居る爲めに略墳墓の形式を詳にする

ことが出來る。卽ち天平時代に於ける僧侶の火葬の一形式として時代相を示す重要な遺跡遺物であるのみならず他面に天平期の佛敎を大成した國史上の高僧の奥城が保存されて來た點に於て、極めて重要なる史蹟である。

然して墳墓の概要は文暦二年九月佛子寂滅の註進狀の末尾に記されて居る。卽ち道俗同心奉堀御廟之刻　八角石筒果次出現于時瑞雲忽聳　細雨稍降遂開彼石筒之處又有銅筒二面有鏁其一方副鑰諸衆重加祈請卽奉開之後有銅筒之面有銘文別紙注進之其中有銀瓶形如水瓶之無小口其蓋瓔珞其頸付銀札其銘云行基菩薩遺身舍利之瓶云々」とあるに依て其樣式を知ることが出來る。舍利瓶の銘文は其寫に依て見ると左の



行基墓指定地域圖

如くである。

大僧上舍利瓶記（△印は高瀨氏所藏舍利瓶破片に見ゆる文字）

和上法諱法行一號行基藥師寺沙門也俗姓高志氏厥考諱才智字智法君之長子也本出於百濟王子王爾之後馮厥妣蜂田氏諱古爾比賣河内國大鳥郡蜂田首虎身之長女也近江大津之朝戊辰之歲誕於大鳥郡至於飛鳥之朝壬午之歲出家歸道苦行精勤誘化不息人仰慈悲世稱菩薩是以天下蒼生上及人主莫不望塵頂禮奔集如市遂得聖朝崇敬法侶歸服天平十七年△△別授太僧上之任竝施

唐招提寺所藏舍利瓶記

百戸之封于時僧綱已備特居其上雖然不以在懷勤苦彌厲壽八十二廿一年二月二日丁酉之夜右脇而臥正念如常奄終於右京菅原寺二月八日火葬於大倭國平群郡生馬山之東陵是依遺命也弟子僧景靜等攀號不及膽仰無見唯碎殘舍利然盡輕灰故藏此器中以爲頂禮之主界彼山上以墓多寶塔

天平廿一年歲次巳丑三月廿三日沙門眞成

發掘後七十餘年の後、文暦代に出現せし場所の土壇を築き直し塔廟を建て塔内に菩薩の藏骨莊嚴具を埋め其中心に文殊像を安置したが戰國時代に兵火の災に罹り燒失したので慶安二年の頃から再興に著手したことは竹林寺智敎の文殊堂再興勸進帳に依て明である。明治維新の際無住となり明治六年頃廢寺處分を受けたのであるが文殊堂は暫く取り殘されて居つた。然して其下にあつた舍利瓶塔は唐招提寺に運ばれ今猶保存されて居るが(寫眞參照舍利瓶塔を收めてあつた花崗岩の壺形の石筒は發掘後他に持ち運ばれて紛失してしまつた。唐招提寺の舍利瓶塔は金屬製の水瓶形の塔身に蓋直徑四寸四分)を有し其上に受華があり上に九輪の形式

を有し瓔珞を蓋の四方に吊し又單冊形の記銘ある金屬板(長三寸二分幅八分五厘)が二個下がつて居る。其塔身内部には舍利を安置し木製の蓮臺(高さ三寸七分徑六寸九分)がある。金屬部の高さ一尺五寸塔身の腹徑四寸六分である。

興山の麓に居住せる高瀨氏所藏の舍利瓶の破片は不正三角形を呈し長き處三寸四分幅二寸二分厚さ一分七厘銅の鑄物で、表面は多少の彎曲を示し雄健な文字を刻し行間には罫線を加へて居るが其幅は七分である。此破片は如何にして傳つたか詳でないが高瀨氏は行基の門人の子孫であると唱へて居るから古くより行基墓所に關係ある家であらう。かかる破片が傳つてそれが文暦發見當時の實物の一片であることは疑ひないから天平時代の舍利瓶は既に破壞されたものと見なくてはならぬ。隨て其内部に在つた銀瓶の如きも今其實物を見ることが出來ない。

竹林寺の遺物として唐招提寺に保管されて居るものは正安四年正月八日の銘ある竹林寺僧堂の大鼓の胴、菩薩像を描いた幅一尺五寸、長さ三尺八寸、厚さ一寸の文殊堂の扉二枚及び行基菩薩の等身像(國寶)等は著しいものであるが德川時代に再興されたと思はるる獅子及び附屬佛像もある。獅子上の文殊菩薩の像は行基作と稱せられ共に唐招提寺講堂に安置せられて居る。又半製の竹林寺境内圖があつて略寺院境内竝に文殊堂の位置を知る事が出來る。文殊堂の附近にあつた十三重石塔は總高十六尺一寸破損の箇所もあり後補の部分もあるが鎌倉時代のものと認められるもので現今生駒山寶山寺の境内に樹てられて居る。

行基墓地の南方三四町の距離にある丘陵を輿山と稱し頂上に往生院の堂宇があり阿彌陀如來の木像を安置し堂宇の周圍には民家の墓が多數に配置されて居る。堂内本尊の床下には方一間計の小室を作り高さ六尺位の五輪石塔を安置し四壁は慶長以後の供養塔婆で圍まれて居る。凝然師の記す處によると此地は行基菩薩の靈柩を運び來つて火葬した場所で、其金棺を埋めた處だから輿山といふ由を記し竹林寺の奥院であることをいつて居る。即ち、行基菩薩に關係ある場所であることは勿論、更に之の地を眞の墓地であらうと唱へるものさへあつて竹林寺境内舍利瓶出土地の如きは精神的の廟所として傳へられたものであらうとの說もある。然しながら舍利瓶の樣式之を埋めた方法等から見て(註進狀及竹林寺略錄に據る)現今の行基墓地と認めらるる處は完全に火葬墳の内容を供へて居つたと思はれるから史蹟保存要目第三項に依り大正十年三月三日に指定せられたのである。

舍利瓶塔

（參考）奈良縣史蹟勝地調査會第二回報告。行基菩薩ノ墓

一二　宇智川磨崖碑

圖版第六一――第六四

宇智郡北部の水を集めて南に流るる宇智川は五條町から伊勢街道に沿ふて東北に行くこと十町程で、右に折れ數町の處に架せる不動橋の下に來ると地勢の關係で、河は急傾斜を爲し兩岸は絶壁となり河床には奇岩が亂立して居る。平水期に於ては幅十尺餘の狹い溪流であるが處々に深處を作り稍下流に行くと砂洲もある。

兩岸の絶壁の上は、樹木蓊鬱たる狀態であるが、之に續く平坦面は耕地となつて居る。

不動橋の下に近い稍下流の左岸の略西南に面する雲母片岩の岩壁に約六尺平方の直立した面がある。之の岩壁面に大般涅槃經の章句を陰刻し其左に半製の佛像一軀を彫り込んだもので、世に磨崖經碑として喧傳せられて居るのは之れである。指定地域は宇智村大字小島及び今井の地籍に及んで居る低い土地である爲めに景勝といふ程でもないが一個の勝區を形成して居る。

碑面は自然の岩壁のまゝを利用したものと認められ、一行の高さ約三尺三寸、一字の大さは約一寸二分角。之れを八行に刻し字體は雄勁な楷體を用ひて居るが、石質が堅硬な爲めに彫刻が淺く、岩壁面に龜裂もあり、加ふるに風雨の作用及び大雨の際に於ける增水の影響を受けて磨滅し讀み難い處は少くない。現今拓本及び肉眼に依て讀み得る文字を本文に記し磨滅

せる文字を符號の傍書として示して見ると左の如くである。（拓本寫眞參照）

大般涅槃經
諸□□□法　生滅々已　寂滅爲樂
如是偈句乃是去未來現在諸佛所開說□空法道
□行無常是生滅
□如是偈句乃是去未來現在諸佛所說□空法道
□如來證涅槃永斷於生死若有至心聽
常得无量樂
若有書寫讀誦□爲他能說一經其身於劫□後七劫不墮惡道
□寅□九年二月四日工少□□□□
知識　□□

宇智川磨崖碑位置

右の碑文は既に集古十種にも載せられ、谷文晁等も實見した著名なものであるが狩谷掖齋は之を解して、諸行无常と如是偈の二行一章は聖行品、如來證から若有までの三行一章は高貴德品に出で、之を崖に刻したのは、聖行品に我於原時深思此義　然後處々　若石若壁　若木若道書寫此偈」の本文に基いたものだらうと云つてゐる。

半製の佛像は、蓮座下から頭部までの高さ約二尺、顏面の幅二寸弱、蓮座の徑七寸二分、立像で觀音と認めらるるものである。彫法に依て之れも文字と同時代の製作と見得るものである。

磨崖碑は直接、何の目的で造られたものであるか文獻の徵すべきものがない。又かかる川岸に之を造つた宗教上の意義も詳でない。此の附近に祀つた不動尊は密教の行はれた時代のものと思はれるから經碑の起原の說明にはならない。寧ろ磨崖碑に對する信仰の傳統から、不動尊を勸請したものと見るのが至當であらう。

之の地を去る遠からざる距離に吉野川の曲流部に當る音無川を前にし後に丘陵を負ふた勝地を選び養老二年に藤原武智麻の創立と稱せらるる榮山寺があつて此邊一帶は寺領であつたらしく寺には現在奈良朝の建築として優秀な八角圓堂を有し又石造遺物及著名の梵鐘等もあつて此等は何れも奈良朝以後のものであるが大和西南部の顯著な寺院であるから其盛時に於ては種々の信仰が加はり此の磨崖碑の附近の如きも當時の榮山寺の住侶の行場であつたらうと想像せらるるのである。

宗教的信仰の對象として比較的明瞭に保存されて來た此の遺蹟は永遠に保存する必要があるが、天然の風化作用と河流の侵蝕作用は漸次壁面の文字を磨滅せしむる傾向にあるのは遺憾である。又此の碑文は古來著名である爲めに好事家が今猶拓本を希望して止まない。

指定以前には手拓の方法を知らない人々が碑面に墨を塗りて汚損したのであるが今や法律に依て保護せられ此等の惡傾向を取締ることになつた。然し何分見通しのきかない河岸の部分にある爲め十分な域に達してゐない樣である。水流の關係に於ても附近は深淵を爲し增水の時は上流より木片塵芥を流し來り平水に至らば之等の木片雜物を碑の前面に堆積

することもあつて保護の上には隨分手數を要する場所である。磨崖經碑として年代の確な點に於て宗教上學術上稀有の資料であるから史蹟保存要目第二に依り大正十年三月三日史蹟として指定せられたのである。

（參考）　木崎好尙氏著日本金石史

一三　春日山石窟佛

圖版第六五——第七三

奈良市の東方御蓋山の南溪谷に沿ひ、添上郡田原村方面に通ずる坂路がある。路は頭塔の所在地附近から高畑の街路に沿ふて東へ進み、溪谷の入口で小橋を渡り稍暫くは溪流を右に見て登ると老杉の繁つた山の腰には楓樹が多く、秋季に入ると樹々の梢は眞紅の波を漂はせ、綠濃き杉の喬木と相映じて低徊去るに忍びざる情景を描くのである。卽ち附近一帶は瀧坂と呼ばるる部分で春日奥山の內でも名だたる名勝である。數町登ると石佛群の最初である寢佛を見るのである。之れは路傍の石に佛像を彫つたものであるが背後の高き岩壁には多數の磨崖佛がある。寢佛は恐らく此の一佛の墜落したものであらう。

更に三、四町を登ると小橋を渡り溪流を左に見る場所に達すると東南に面せる高き岩壁に三尊佛の彫刻があつて中尊の高さ七尺七寸左脇に文永二年十二月日大施主の陰刻がある。世に朝日觀音と稱せられて居るが觀音像ではないらしい。更に登れば右に折れて地獄谷石窟佛の所在地に至る小徑がある其分岐點に頸部から折れた石地藏が直立してゐる。附近は傾斜稍緩で東北に折れて菅瀧方面への通路もある。暫くにして本道（田原道）は急傾斜となるが之を登り詰めると通路の左手の（北側）急な傾斜面の高さ約三十尺位の場所に春日山石窟佛がある。

附近の山林は現に國有林で農林省の所轄であるが明治維新前までは大乘院領であつた。

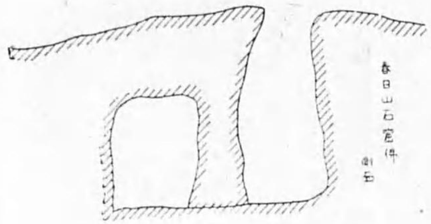
(石窟附近に地上二尺三寸五分、幅七寸六分の花崗石に「大乘院殿御領山」と刻した石標の存在で知らるる)石窟所在地の地質は所謂地獄谷層と稱せらるるもので厚き礫岩の上に黒雲母流紋岩の被覆せるもので、表面は風化作用を受けて霉爛甚しいが古來石材採取場として盛に發掘されたらしく石窟の附近遠からざる處に石切峠の名稱を保存して居るのである。

春日山石窟佛位置

石窟は南面の傾斜面に營造されたもので東西の二室に分れ諸所崩壞せる處があつて原形を完全に復原考察することは不可能で隨つて窟内の佛菩薩の委樣配置等も十分に判明し難いものが多い。

東窟の平面は入口の東西十五尺七寸。奥壁幅十二尺一寸東西兩壁の奥行約十尺、略中央に約四尺角の石柱を彫り出し東部の天井は墜落して居るが西部は荒く削つた穹隆狀の天井を有し床から約七尺の高さがある。東西兩壁共に奥壁に近い部分は剝落し奥壁も全面削落したらしく何等の彫刻もない。東壁の入口部から約八尺程の壁面には圓光を背にせる高さ三尺の立像三軀其南に天部立像一軀あるが何れも頭部を缺失して居る爲め判然しないが三軀は觀音像と思はれるものである。西壁は天井部の殘存せる爲め風化も少く、南端から幅約八尺四寸五分の壁面に地藏尊立像四

軀南に天部像一軀を彫刻して居る。尊像は高さ約三尺背後に圓光を有し頭部も略完全、衣紋には猶彩色の跡がある。此等の佛像は殆ど丸彫に近い立體的のものである。中央の角柱の裾部には四面に二尺五寸平方の輪廓を作り其内面に高さ二尺四寸位の座像一軀づつを刻したもので磨滅甚しく何佛たるかを定め難いが胎藏界の四佛を配置したものと認むべきであらう。



春日山石窟佛側面(東窟)

近時九州、東北其他の地方に於て石佛の研究が盛に行はれ著名なものも少くないが春日山の東窟の如き、小規模ながら窟寺の觀念を比較的完全に示現した構造を見ることは稀である。地藏尊像の如き隨分窮屈な岩壁に刻してある爲めに晦澁の趣があつて優秀な作品とは云ひ難いが流石に佛像の本源地だけあつてよく扱つたものである。

西窟も東窟と竝んで略南面して居るが天井部は缺け東壁は墜落して原型を見ることが出來ないが間口十尺奥行七尺高さ約五尺ある。西壁は比較的完全に殘つて居るが南に突出した部分は極めて短く外面に近く方形の枘孔があり其下に縦に細い淺い溝を刻して曾て何等かの設備のあつた狀態を示して居る。

奥壁の上部は稍前面に傾き、其壁面に二重圓光を背にし南面せる座像を高浮彫にしたもの

で、現今三軀だけ殘つて居る。座像の西隅には略完全な多聞天の立像がある。

多聞天の立像は、左手に寶塔を捧げ右手に彩色の痕跡ある三股戟を執り、火焔を背光とした雄秀な作で東窟西部の天部の造像技術とは多少の差がある樣である。座像の諸尊の内、西端の尊像の蓮座は著しく風化し、逆蓮は全く缺けて居るが鮮明な二重圓光の光背を後にした優秀な作で高さ三尺二寸五分膝張二尺二寸光背の上圓光の直徑二尺稍伏目の溫容は彌陀の大慈を示現せるものと思はれるが頭部比較的大なるは本邦の石佛に共通の造像法で怪むに足らない膝部の稍窮屈な點も他像との關係上已を得なかつたものと思はれる。其東に竝ぶ尊像背光との間文字の大さは約一寸五分角、行の高さ一尺七寸の間に書き終つてゐる。

西窟多聞天像

墨書銘の東に位する尊像は顏面及び左手を缺いて居るので推定は頗る困難であるが不空成就佛ではなからうかとの說がある。尊像の東側に「八月廿日始之作者今如房願意」と陰刻してある文字の大さは一定しないが小形のものは二寸角、大形のものは三寸四分角位で、行の高さ二尺四寸ある。興福寺雜錄に據ると此の銘文は弘化二年頃迄は八月の上に久壽二季とあつたらしいが今は其形跡がない。

西窟石佛陰刻銘

其東に竝ぶ座像は大さ他の二躰と等しく高浮彫の立派なものであつたらしいが現今は顏面も手首も缺けて委容に見るべきものがない。然しながら蓮華座は木彫に見る如き豐麗な趣を備へて居る。此尊像の東に崩れ落ちた東壁の土砂に埋もれて圓光だけ明に殘つた一軀がある。

此等の尊像は表面風化し、蘚苔の附著せる部分があつて明に彩色等を認め得ることが出來ないが東窟地藏尊、西窟の多聞天等には黑色の裝飾線は殘存して居るから一躰に彩色を有して居つたものと認められる。猶各地の石佛に共例はあるが此の春日山の石窟佛に於ても自然の石壁面に佛像を彫り出し其表面を粘土の細末又は漆喰で塗り固めた形跡は明である。それ故現今に於ても表面は緻密で多少の光澤があるが內部は霉爛して崩壞し易い。

西窟は東窟とは異り、構造は簡單であるが佛像は大形で製作は優秀である然も壁面に二種の銘文があつて其字體も確であるから造像完成の年代を示すものとして許さるべきもので

ある。東窟には銘文を缺いて居るが窟の位置の接近佛像樣式の近似等から推察して西窟に引き續いて作られたもので、兩窟相待つて金胎兩界を現はしたものであらう。

春日御流記に依ると解脱上人の弟子障圓僧都が本願となり地獄谷(此邊一體を地獄谷とも云ふ)を開發せる由を記し特に春日第三殿(天兒屋根命)の本地地藏菩薩の利益に依て女人罪障消滅の爲めに設けたる事を說いて居るが恐らく之れは興福寺僧徒の行場となつてからの說であらう。

又文治から建久にかけての大佛殿再興に際し四面廻廊諸堂垣等の造立に當り其石材は悉く地獄谷の山中から得た傳說があり、靈地たるの故を以て路傍大小の石に諸佛像を多く彫刻し衆人に結緣せしめた傳がある。大佛殿再興當時旣に其地が靈地として知られて居つた處から推察せばその以前にも石佛等の存在を想像しても差支なく附近の石佛を以て全然大佛殿再興の際に於ける石切場跡に彫刻したものといふわけにはゆくまい。特に路傍大小の石に諸佛像を刻しとあるは瀧坂附近のものに該當するのではあるまいかと思はれる。宗教信仰に關する遺蹟として顯著なるものであるから史蹟保存要目第二に依り大正十三年十二月九日史蹟として指定せられ、風化作用が甚しいので昭和二年三月上屋を作つて之を保存するに至つたのである。

(參考)　奈良縣史蹟勝地調査會第三回報告　穴佛石窟

一四　地獄谷石窟佛

圖版第七四——第七八

春日山石窟の所在地に至る田原道の右側に頸部の折れた石地藏がある。地獄谷石窟へは本道から右に折れ此の石地藏の前を通過し、貯水池の南岸に沿ひ松林中の小徑を辿り、山ノ脊に隨ひ或は傾斜面に沿ふて七八町を登ると、小溪谷あり之を隔てた對岸の斜面には處々に黑雲母流紋岩が露出し石切場の跡がある。

石切場の跡には、幅一尺七寸長さ三尺位の板石を切り出した跡があり附近に二個の洞窟狀の遺跡があるが、南東のものは特に大形で幅二十二尺奥行十八尺。入口の高さ七尺七寸、奥壁にて三尺三寸內壁はたき火の爲めに眞黑になつて居る。壁面には板石を切り出した形跡は明瞭である。その北方に接し約三十五尺を隔てた位置にある洞窟は、元來石切場の跡であつたことは明であるが、宗教的に利用せられた爲めに整理を經壁面には佛菩薩の像を刻して古來地獄谷石窟佛として頗る人口に膾炙した場所である。地は奈良市高畑町字地獄谷國有林十七林班北小班內に屬し、指定地域は實測八畝二十五步である。

石窟幅十二尺七寸向つて右壁は約九尺左壁は延長十一尺三寸。天井は左壁の附近は崩壞してゐるが、中央に於ては前面から奥壁まで九尺五寸、高さ入口前面にて七尺三寸、奥壁面は西南に面し平滑に削られ、幅約九尺三寸の壁面を作り之を三分し、中央に幅四尺高さ五尺五寸の

輪廓を作つて中尊を刻し其向つて左に幅二尺三寸高さ三尺四寸の壁面を區切り右に幅二尺高さ四尺の畫面を作つて尊像を刻して居る。

然して此の奥壁面の下方底部に近い處は、高低、廣狹のある不規則な臺狀の凹凸があつて明に石切場の跡をそのまま殘して居るものと認められる。左右兩壁も亦平滑に削られ佛像を鏤刻して居る。

奥壁面の佛像は三尊佛と認めらるるもので中尊は蓮華座の上に座し、高さ三尺三寸三分、蓮座の高さ九寸三分重圓光の光背の幅二尺六寸三分、光背頂上から蓮座の上に至る高さ四尺五寸七分、尊像の顏面の長さ九寸幅五寸三分、膝幅二尺八寸五分稍太い力强い線彫りで豐麗な尊容、端嚴な姿、衣文は赤く塗られ肌には金箔を置いたらしく薄い衣の褶の現し方は石彫として殆ど見ることの出來ない柔い感じを與へてゐる。從來阿彌陀佛と見られて居つたが近時釋迦佛だらうとの說が有力になつて來た。

中尊の左側は十一面觀音の像で、高さ三尺二寸七分、寶冠及び衣文に猶色彩が殘つて居る。右は藥師佛の像と見らるるもので高さ三尺七寸六分、中尊と等しく衣文及び光背は赤く頭部は黑く彩色を施されてゐる。中尊は座し挾侍の立てゐる三尊佛の形式は極めて古くから行はれて居るもので、佛像そのものも何處となく古い樣式を思はせる。然し重圓光の光背の形式や周圍の畫面の採り方等に依て見れば平安朝の中期以後のものと見るべきものであらう。

石窟の向つて右壁の座像は如意輪觀音と認めらるるもので高さ二尺七寸左壁の二軀は奥壁に近い方は阿彌陀佛で入口に近いものは千手觀音だらうと思はれる。側壁の尊像は奥壁のものに比して線が細く、色彩の見るべきものはないが極めて雄健な表現を認められる。

瀧坂方面の石佛竝に春日山石窟佛は悉く半肉彫であるのに地獄谷石窟の諸尊はすべて線彫りであるのは如何なる理由に基くものであらうか。若し之の兩者が著しく隔絶し地質が異つて居つたならば材料の差とも見らるるであらうが春日山石窟と此地は同樣の石質であるから殆ど問題にならない。そこで兩者の差異を時代の差と見るかといふに之れも明瞭な

十一面觀音（奥壁）

徵證がない。然るに之を製作者の方面から考へて春日山石窟は興福寺に關係あるものとするに對し之の地獄谷石窟を岩淵寺の奥院ではなからうかとの說がある。然してその製作も遙かに溯り得るだらうと考へる人もあるが之れも殆ど想像の範圍を出でないものである。

線彫りの石佛は決して此地のみの特有ではない。交通上密接の關係ある笠置山には南面

せる巨大な花崗岩の面に虚空藏菩薩座像の線彫りがある。更に興福寺傳法院所領であつた宇陀郡三本松村大野の屏風浦に高さ三十八尺の彌勒菩薩立像の線彫りがある。此等と比較して見ると如何にも時代の差が認められる。九州や東北の著名な石佛は春日山石窟と系統を等しくするものと認められるが線彫りの系統では未だ地獄谷石窟佛に比すべき優秀な尊像が發見されない樣である。かかる顯著な石窟佛は永遠に保存の必要があるから史蹟保存要目第二に依り大正十三年十二月九日に指定せられたのである。

（參考）奈良縣史蹟勝地調査會第三回報告。地獄谷石窟

圖版

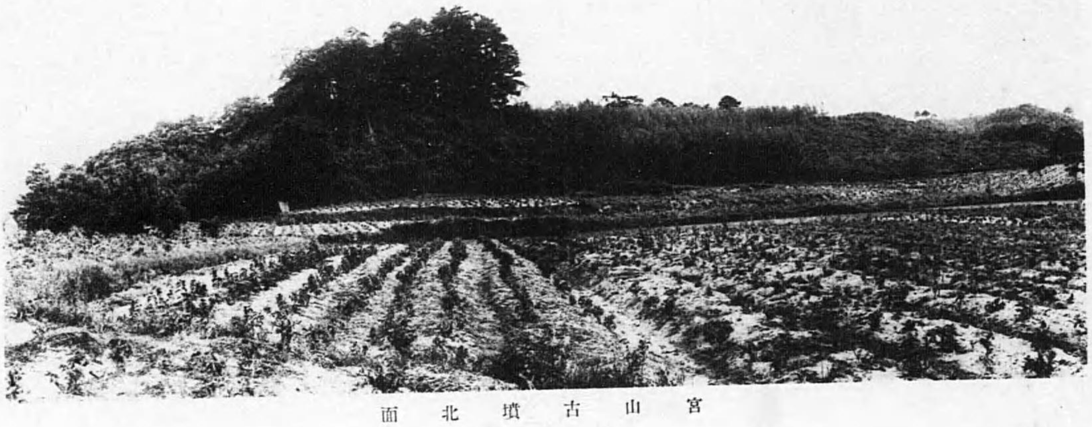
圖版第一

宮山古墳　大正十五年十二月一、六、七、日　上田實測

圖版第一

宮山古墳　大正十五年十二月一、六、七、日　上田實測

圖版第二

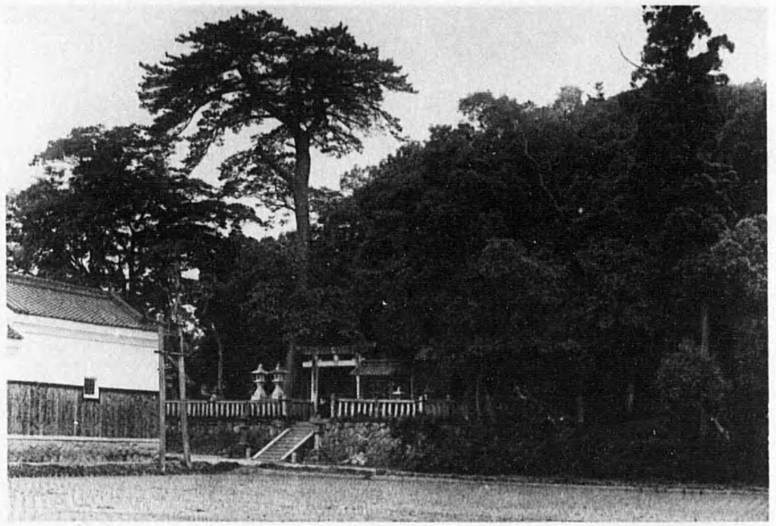


宮山古墳北面

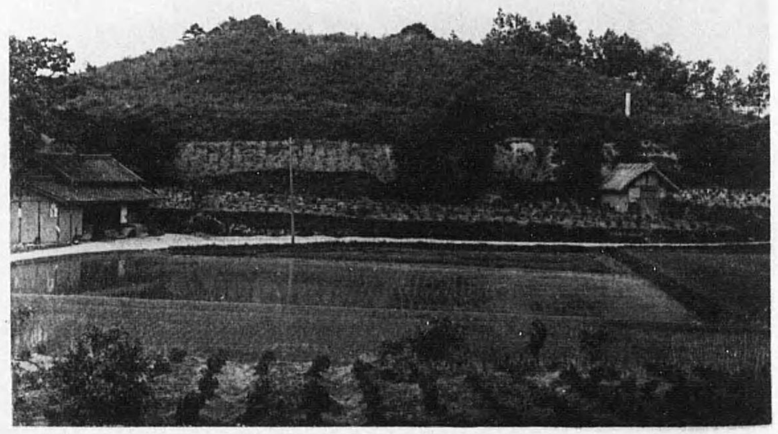
圖版第三

京畿道南陽郡

圖版第四

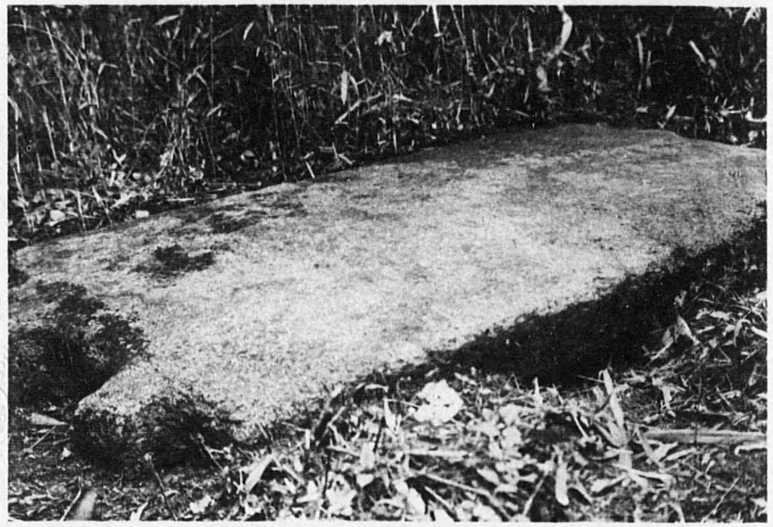


宮山古墳後圓部八幡神社

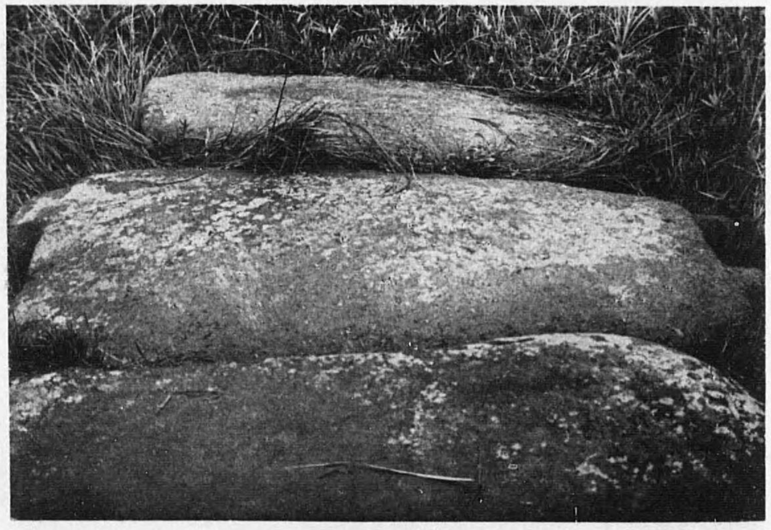


宮山古墳前方部正面

圖版第五



宮山古墳後圓部頂上の石材



東長池堤防上の古墳石室天井石

巢山古墳

大正十四年十月　上田實測

巣山古墳

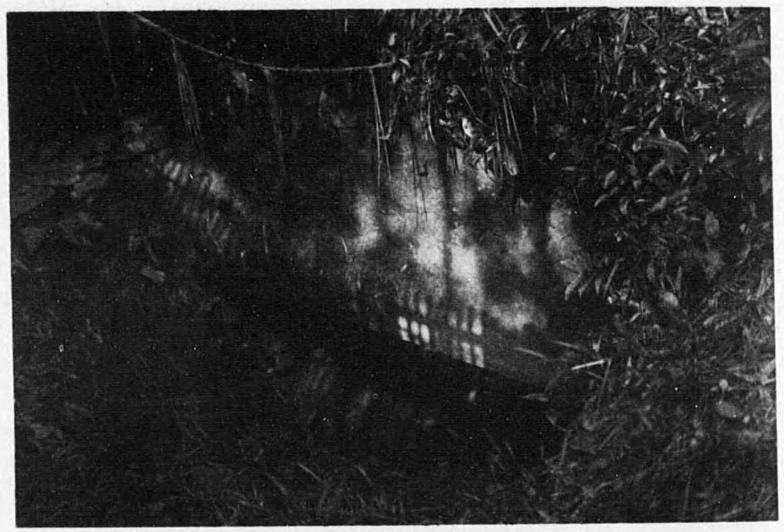
大正十四年

巣山古墳

大正十四年十月 上田實測

圖版第七

巢山古墳西面



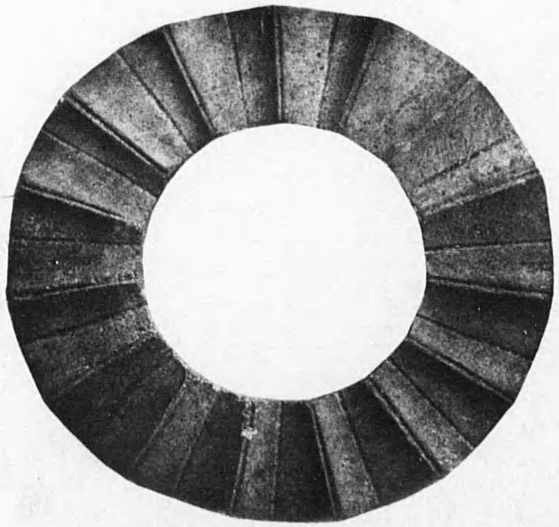
集山古墳後圓頂上の石室（甲）

同　上（乙）

圖版第九

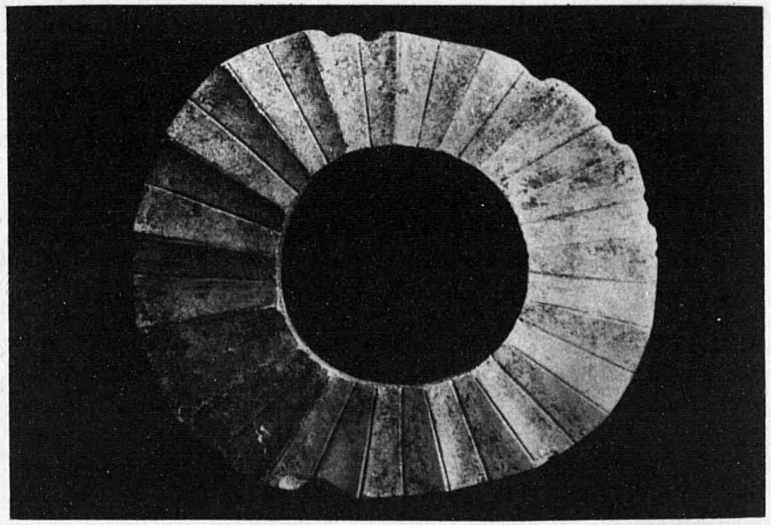
狩山遺物

勾玉（實大）

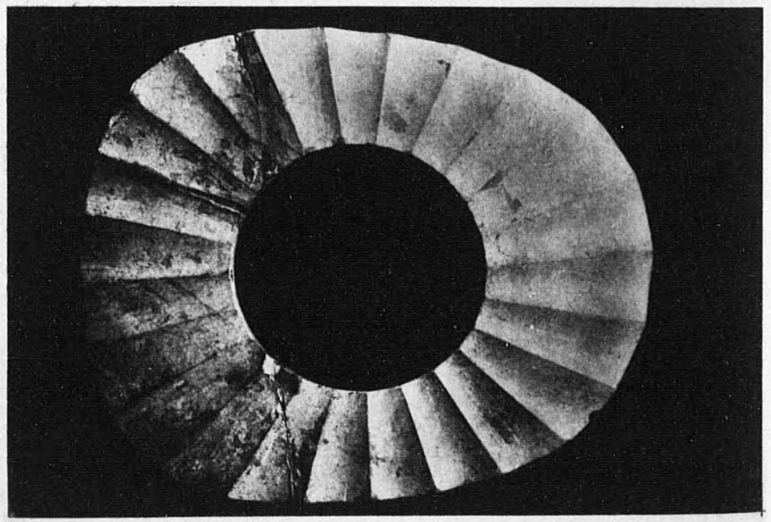


車輪石（高三寸六分、孔徑一寸八分）

図版第一〇　鳥山古墳遺物



車輪石（長径四寸二分五厘、孔径一寸九分、厚サ四分五厘）



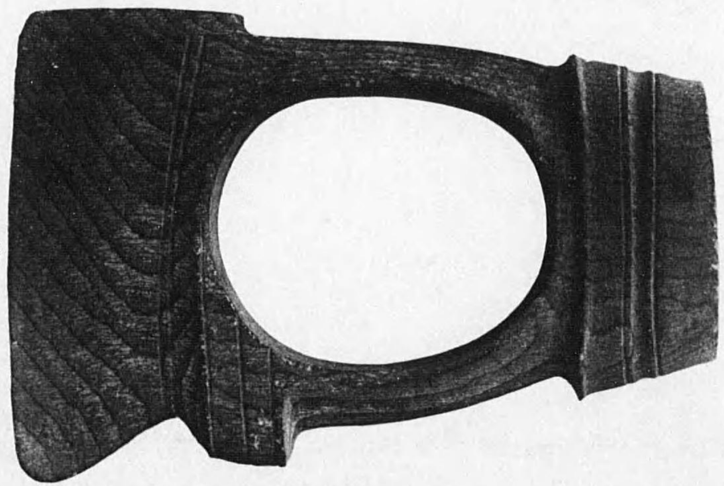
車輪石（長径四寸七分、孔径二寸、厚サ三分）

圖版第一　瓶山古墳遺物

（表）

孔徑二寸五分五厘、孔厚二寸一分

（側面）

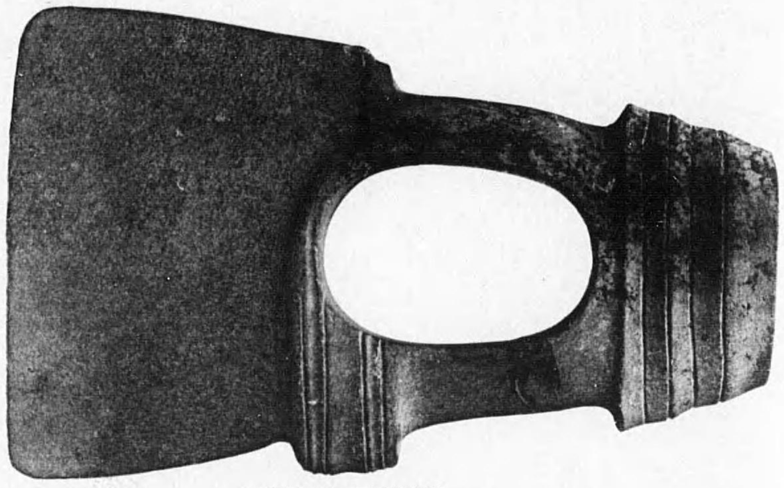


（裏）

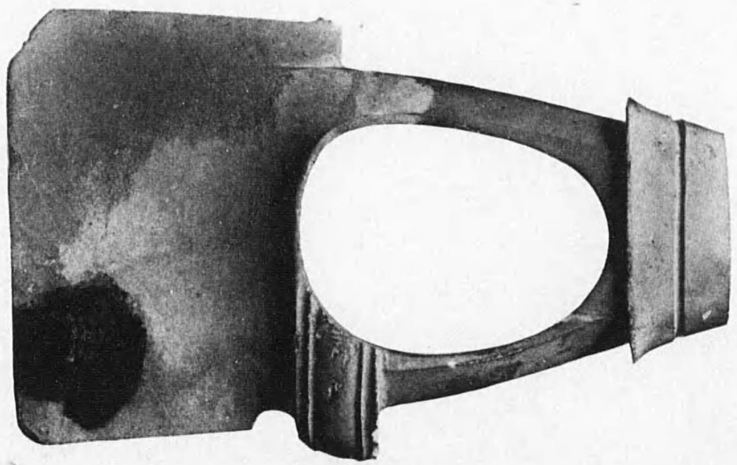
鍬形石（高五寸三分、廻圍二寸、横幅三寸分五厘）

圖版第一　二

黒山古墳物



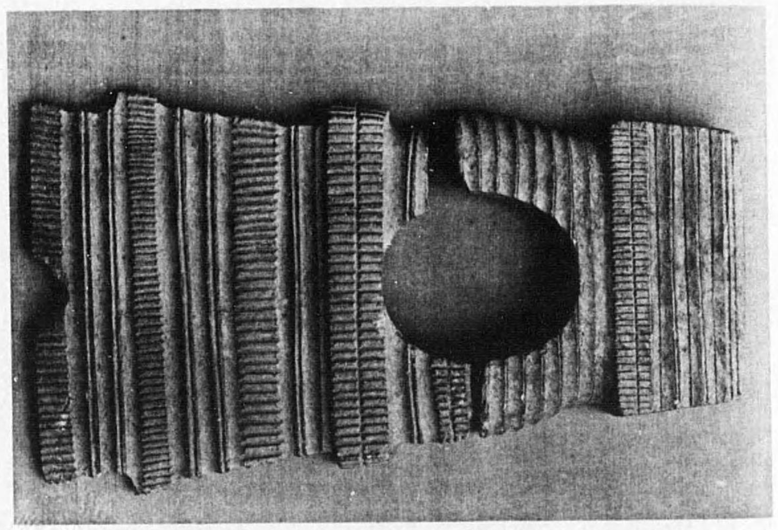
右同（高七寸、横四寸五分、厚八分、孔徑二寸六分、孔短徑一寸六分）



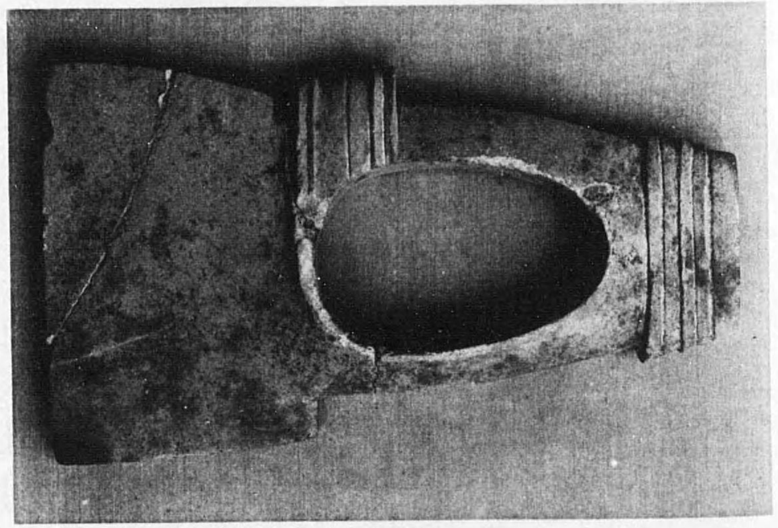
鍬形石（高六寸九分、横四寸三分、孔徑二寸九分、孔短徑一寸）

圖版第一三

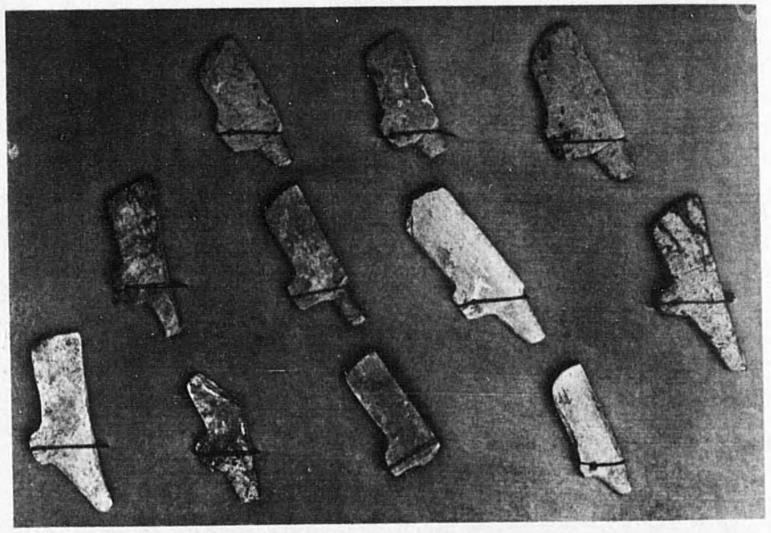
荒川古墳遺物



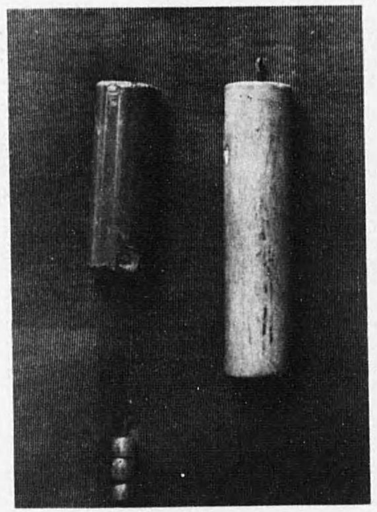
同鐵斧（上高三分、廣幅二寸。下高四寸七分、横幅四寸分）



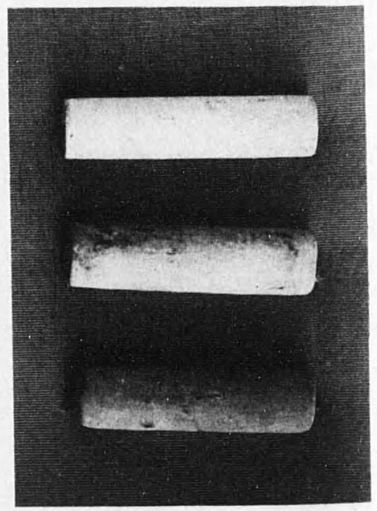
鏃形石（高六寸七分五厘、横幅四寸、厚さ七分。孔徑一寸七分、孔深二寸七分）



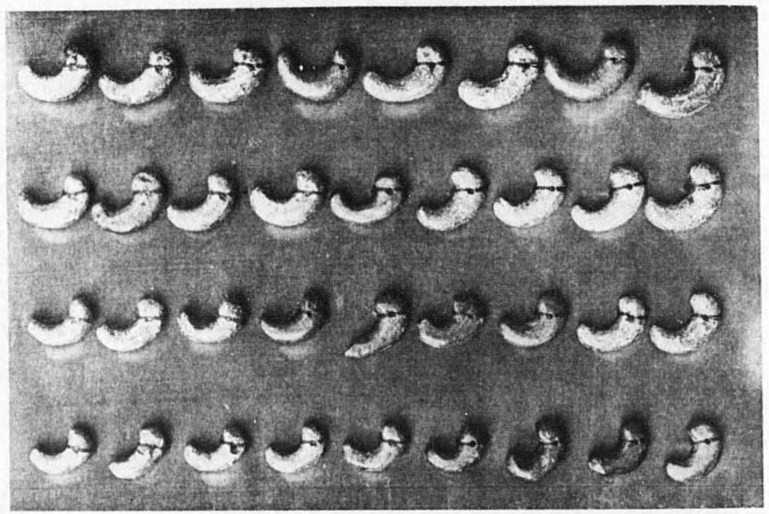
石製刀子



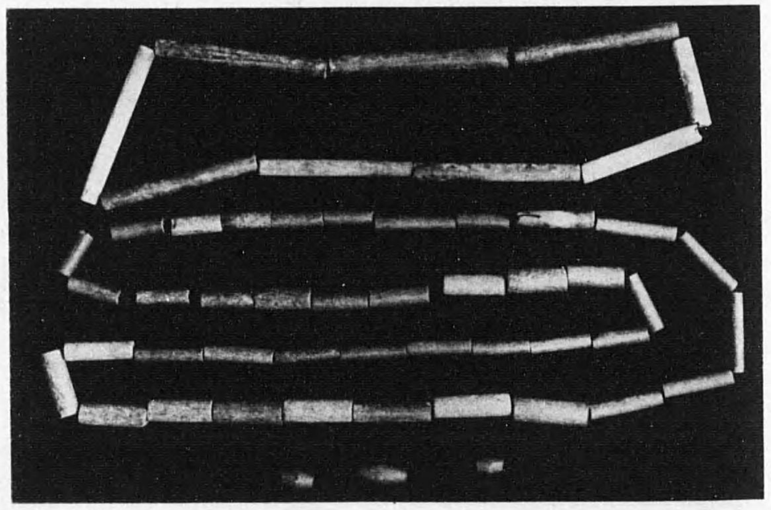
玉臼及玉管



玉管



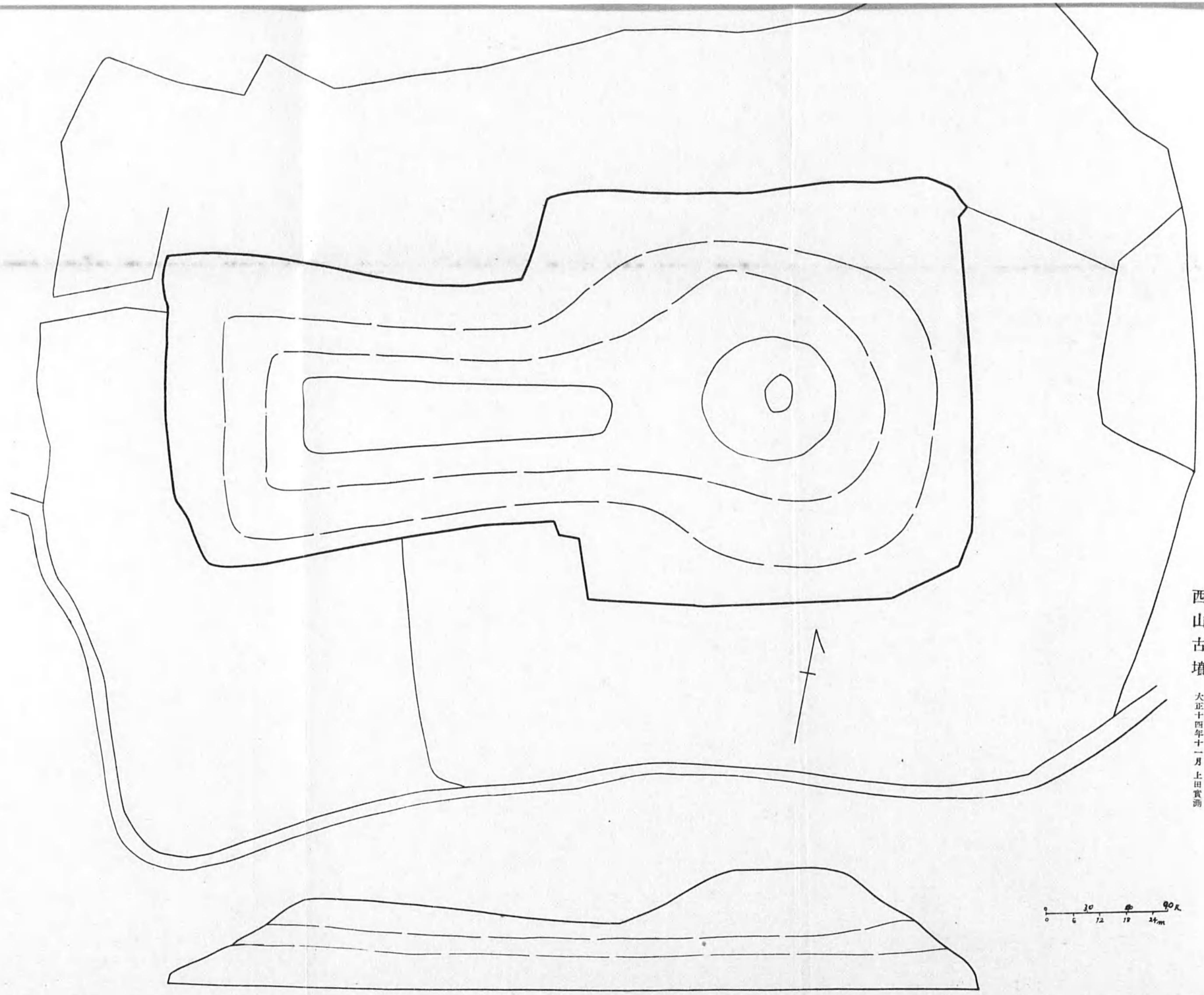
玉　勾



玉　棗　及　玉　管

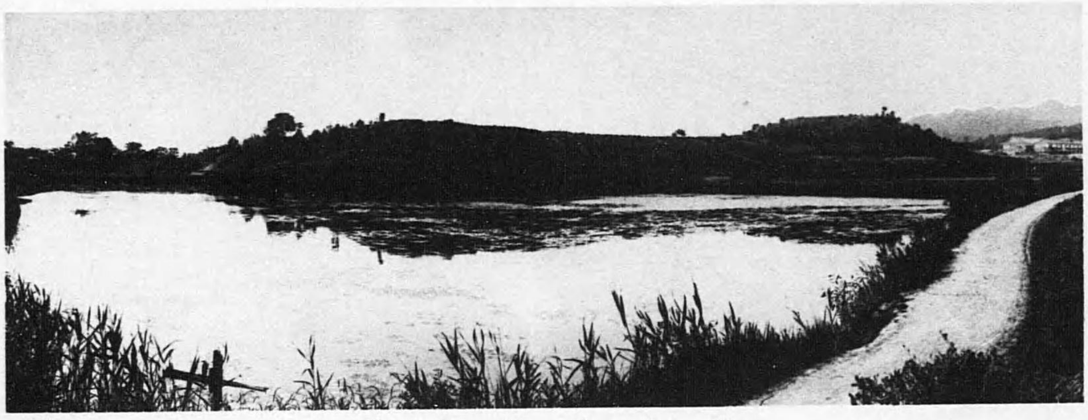
西山古墳

大正十四年十一月　上田實測

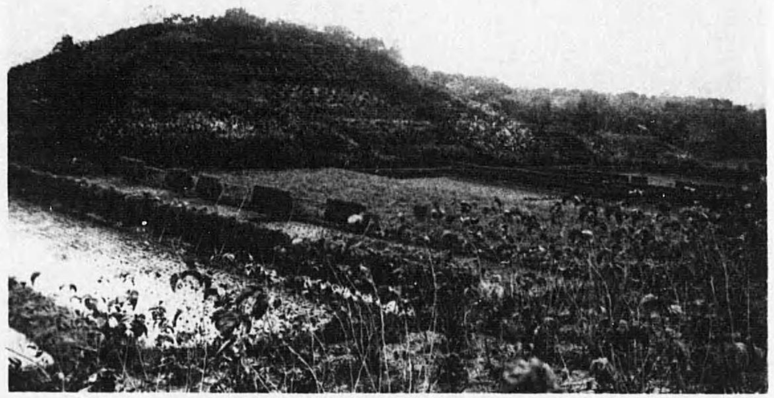


西山古墳

大正十四年十一月 上田實測



西山古墳南面



西山古墳東北面

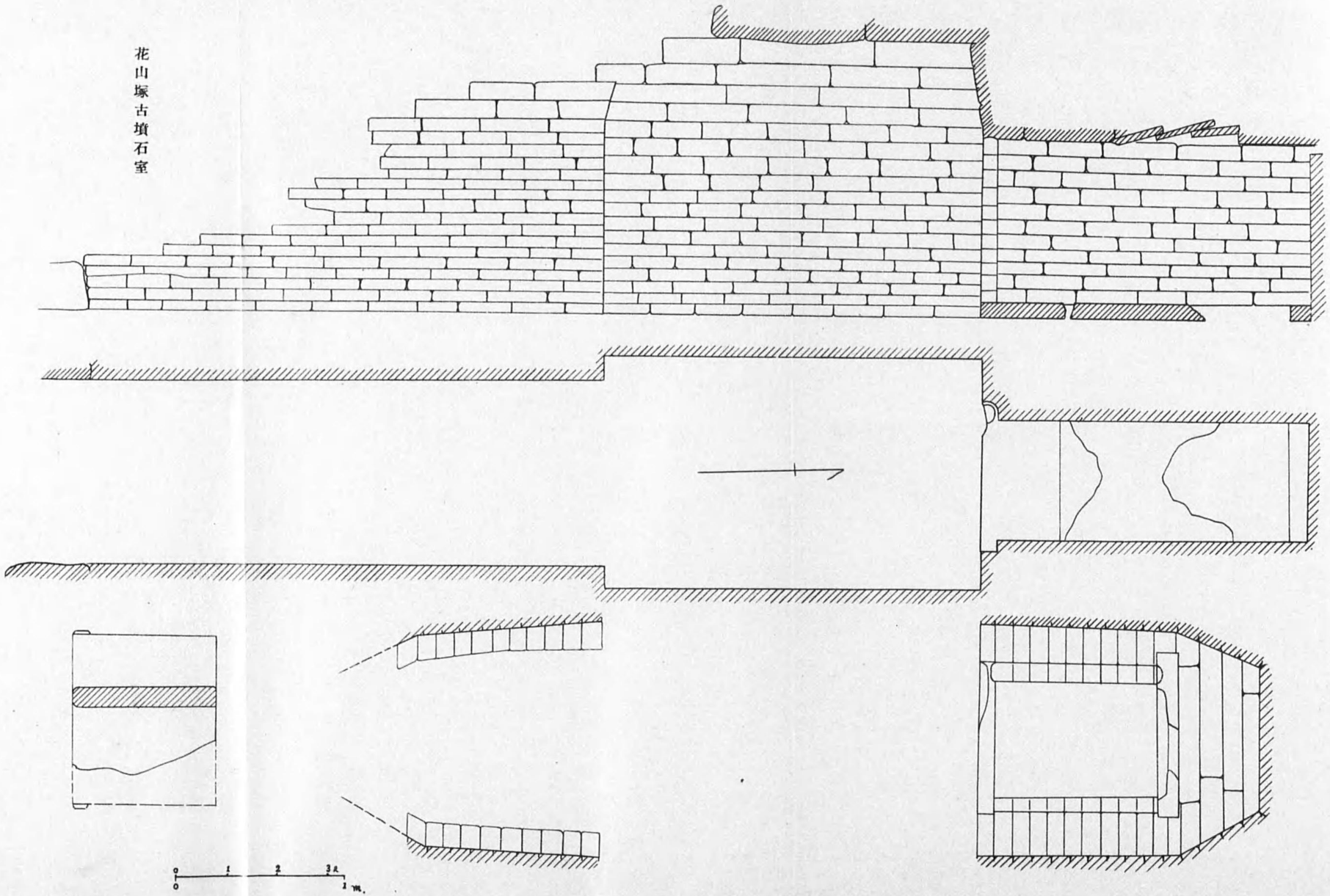
西山古墳附近の古墳

圖版第一九

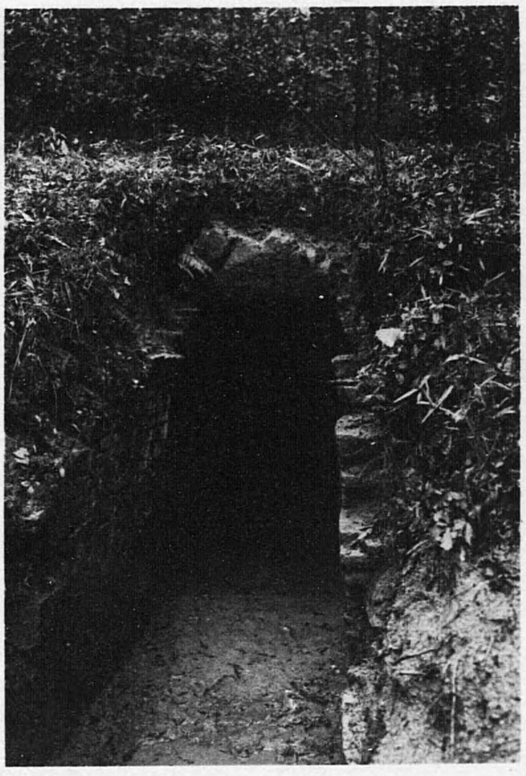
花山塚古墳石室

圖版第一九

花山塚古墳石室

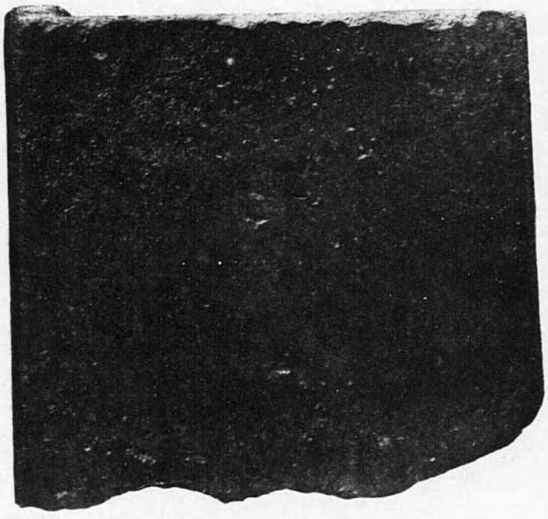


花山塚古墳奥室正面

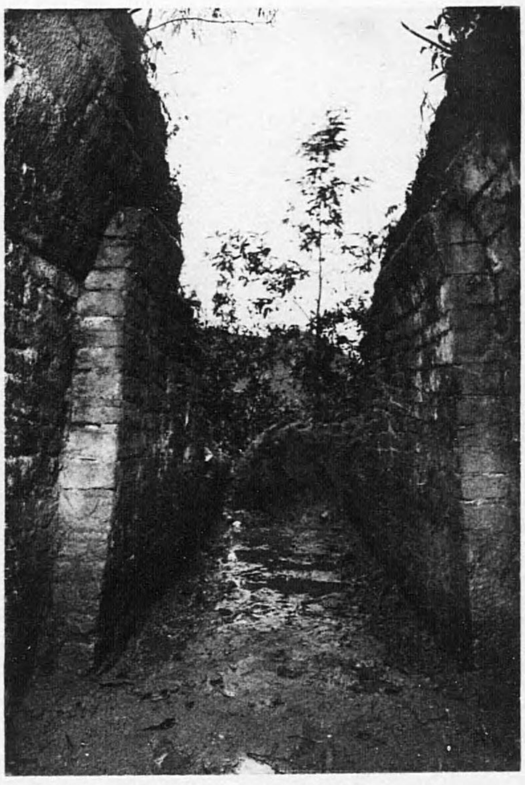


花山塚古墳正面

圖版第二一

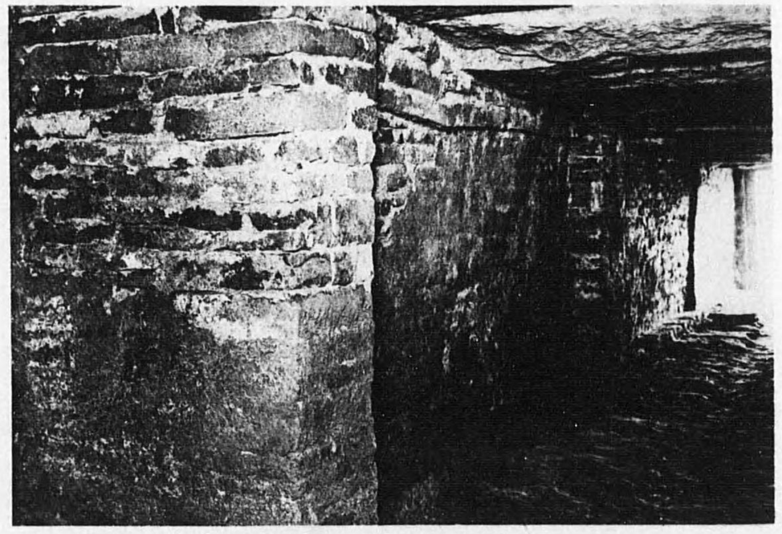


花山塚古墳石扉



花山塚玄室ニ羨道の堺

花山東塚石室



黃金塚石室

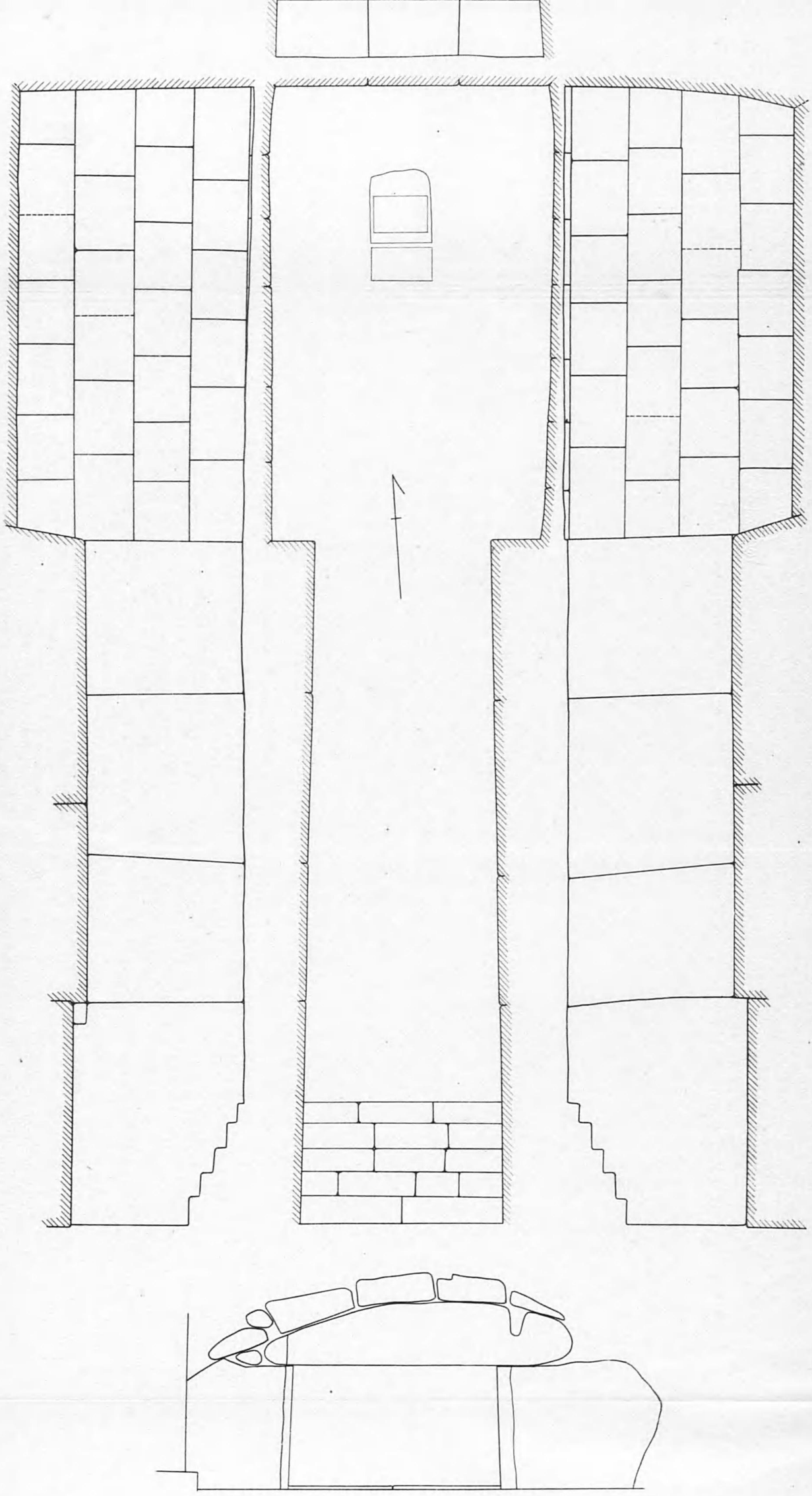
圖版第二三

文殊院西古墳 上田實測

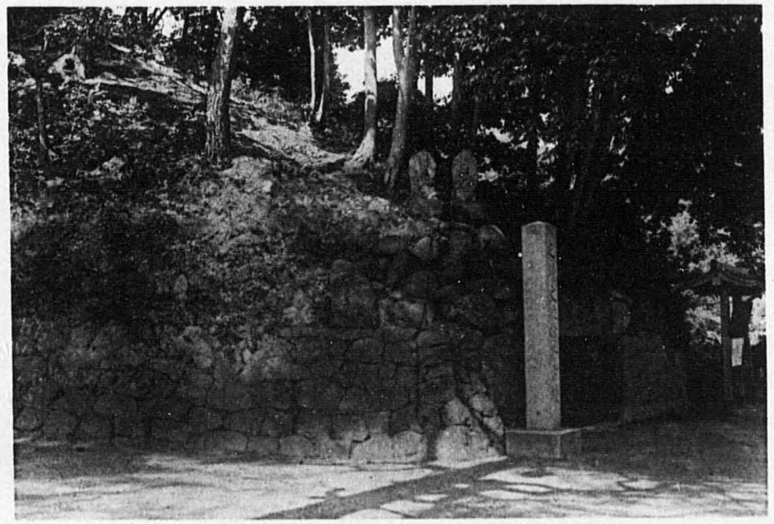
圖版第十五

文殊院西古墳石室

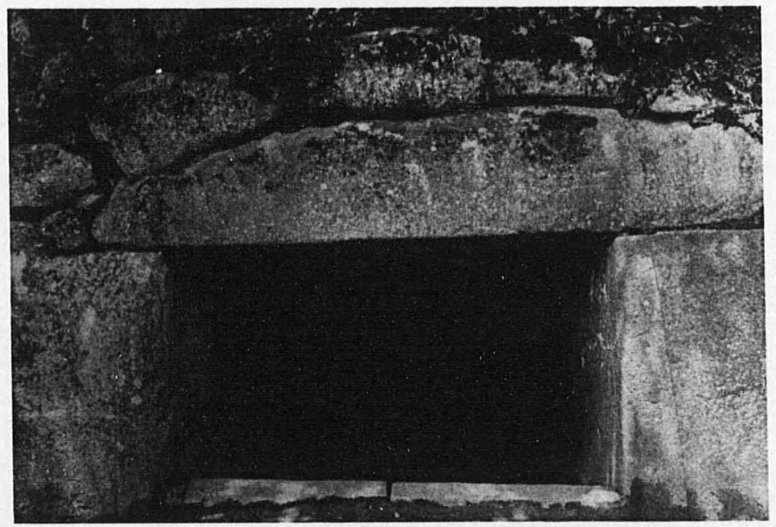
大正十五年八月廿日　上田實測



圖版第二四

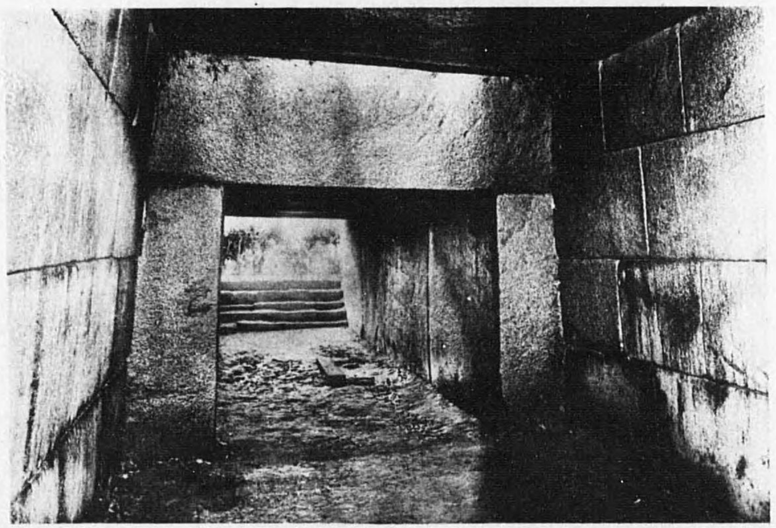


文殊院西古墳西南面



同　羨道入口

文殊院西古墳玄室奥壁部



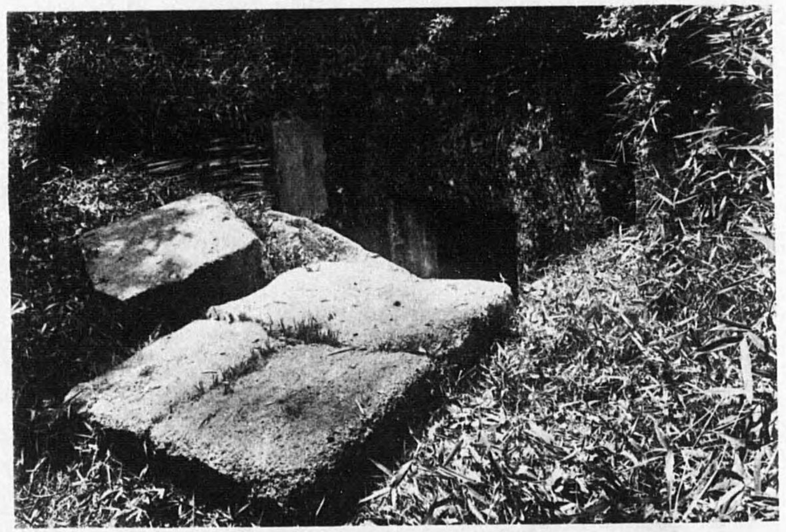
同　　對義道部

牽牛子塚古墳　大正十五年八月三日　上田實測

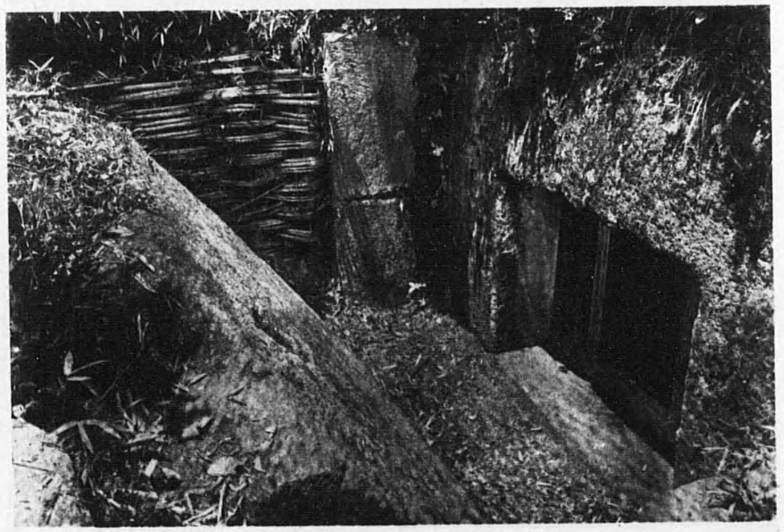
牽牛子塚古墳石室

圖版第二九

墓　全　塚子　牛　華

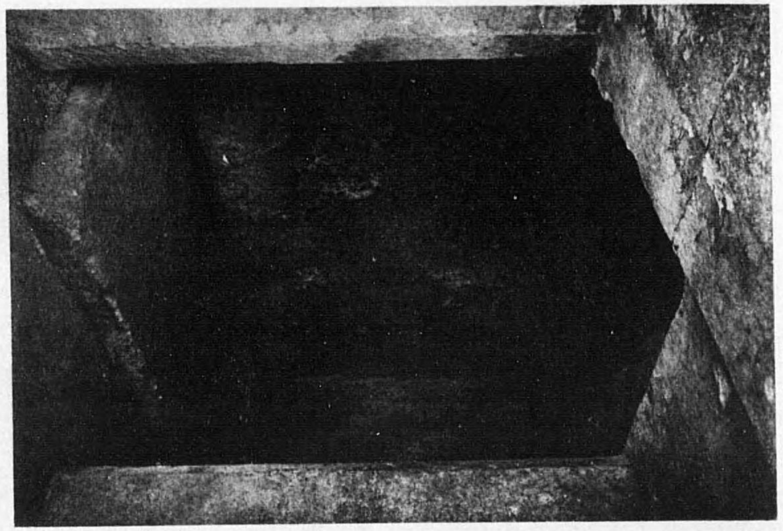


牽牛子塚前面及內蓋



牽牛子塚前面及外蓋

図版第三一



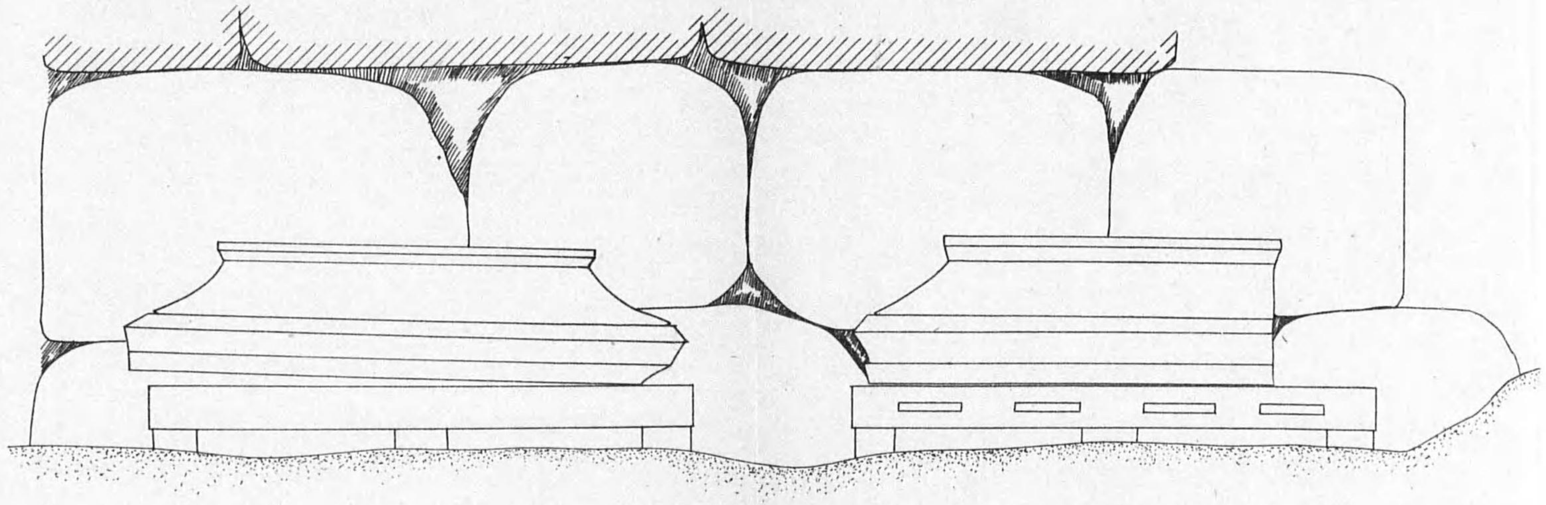
赤牛子塚玄室西室

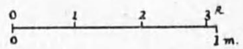
赤牛子塚玄室東室

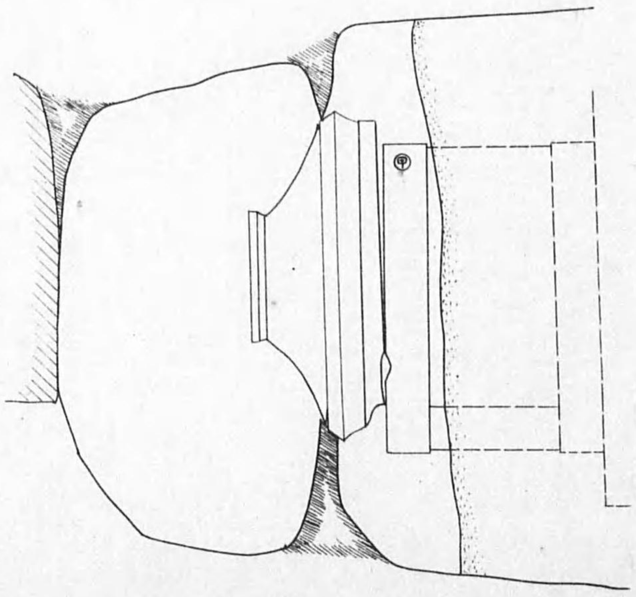
圖版第三二

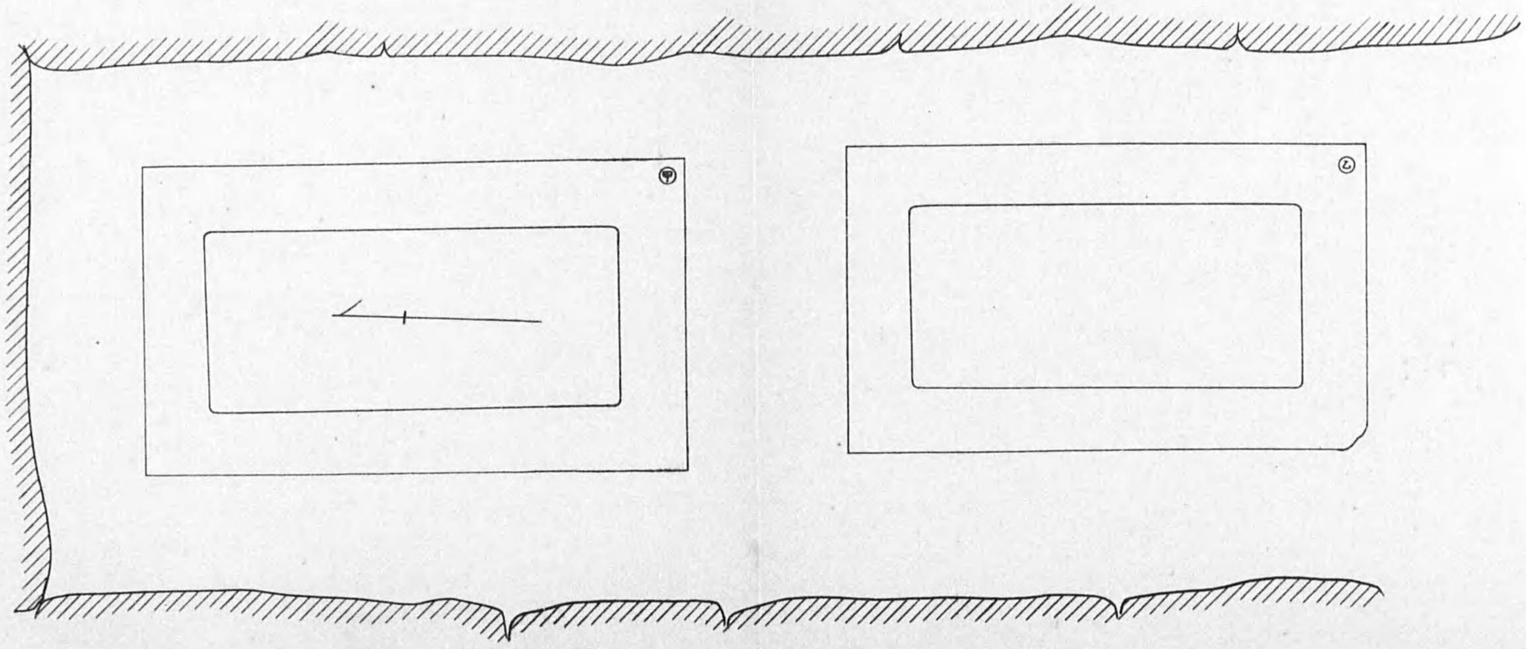
菖蒲池古墳石室及石棺

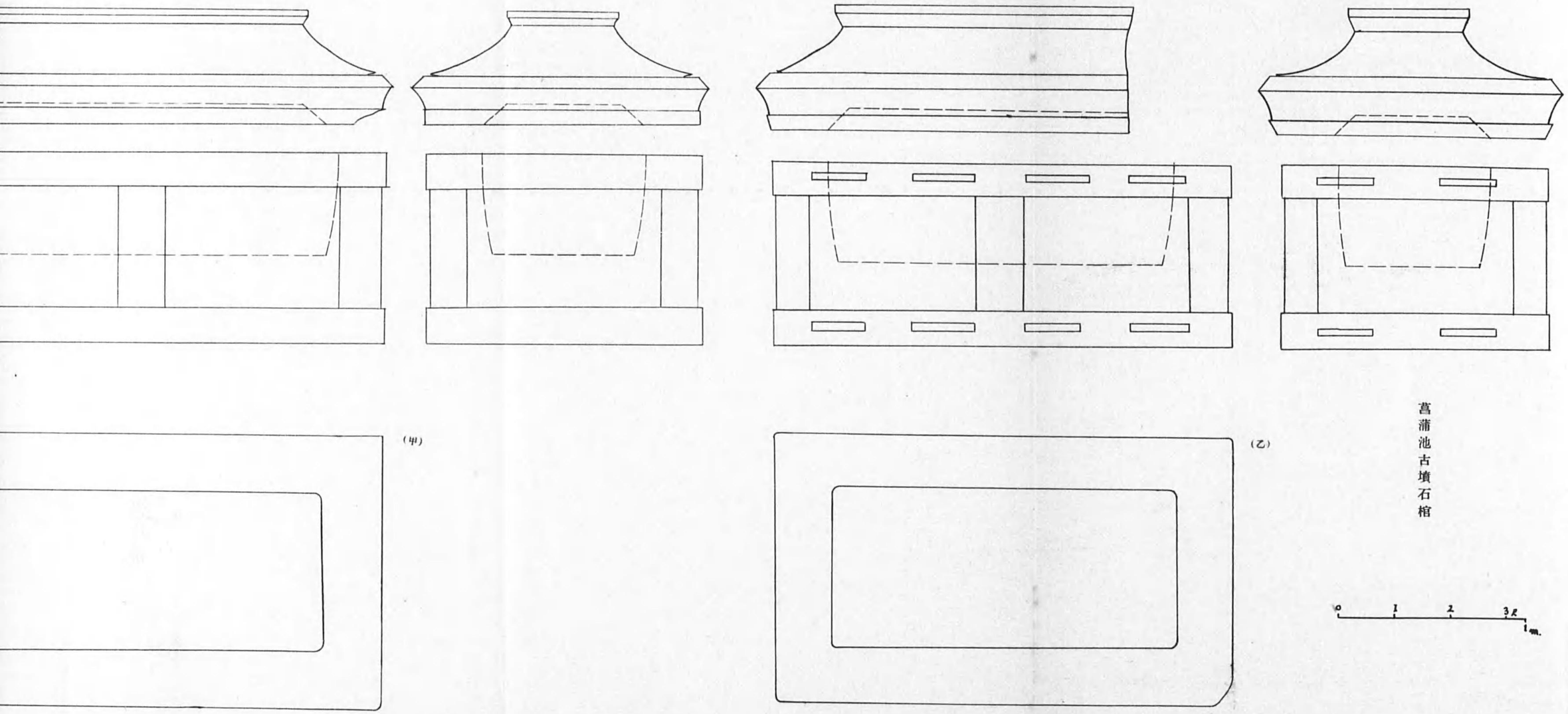
菖蒲池古墳石室及石棺



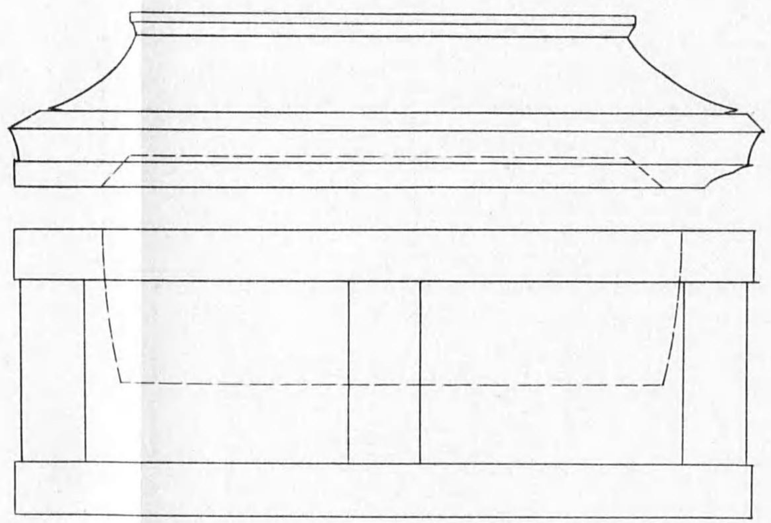


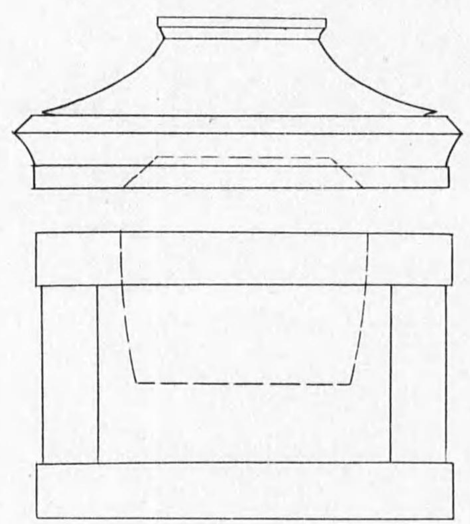


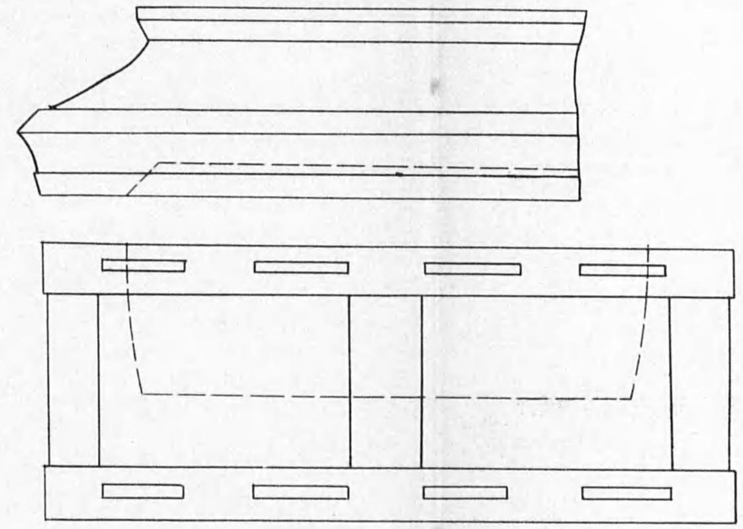


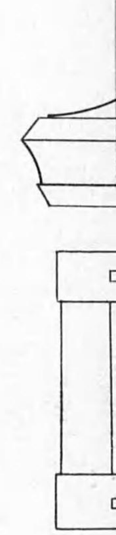


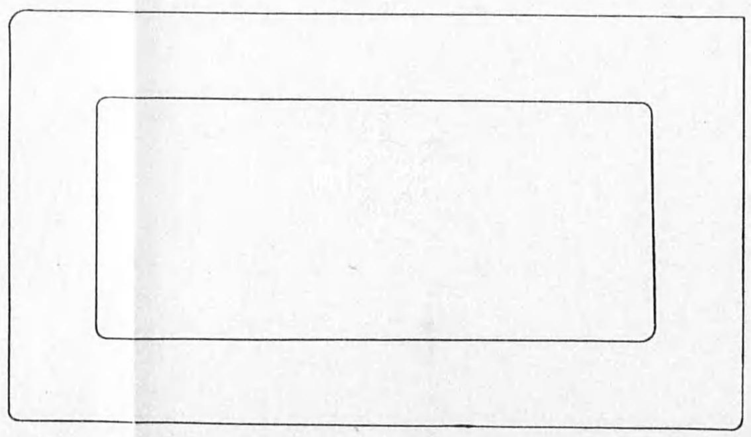
菖蒲池古墳石棺



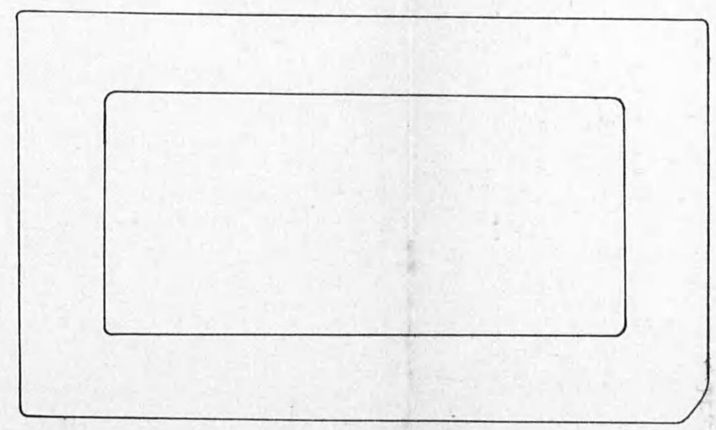








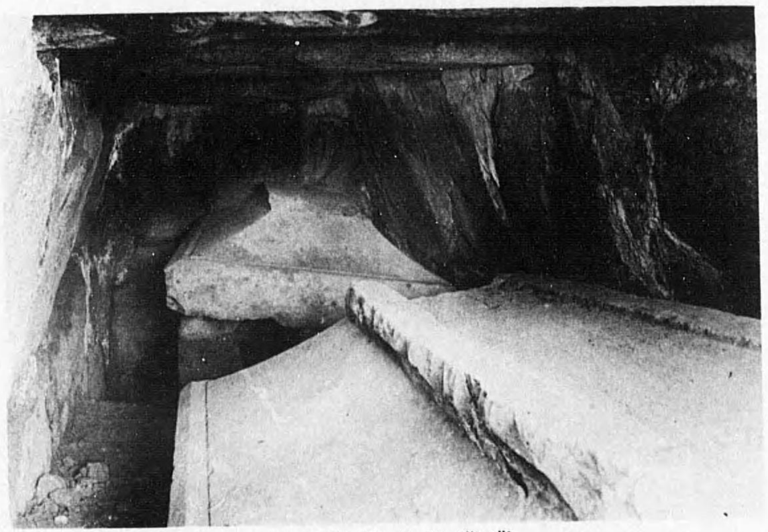
(甲)



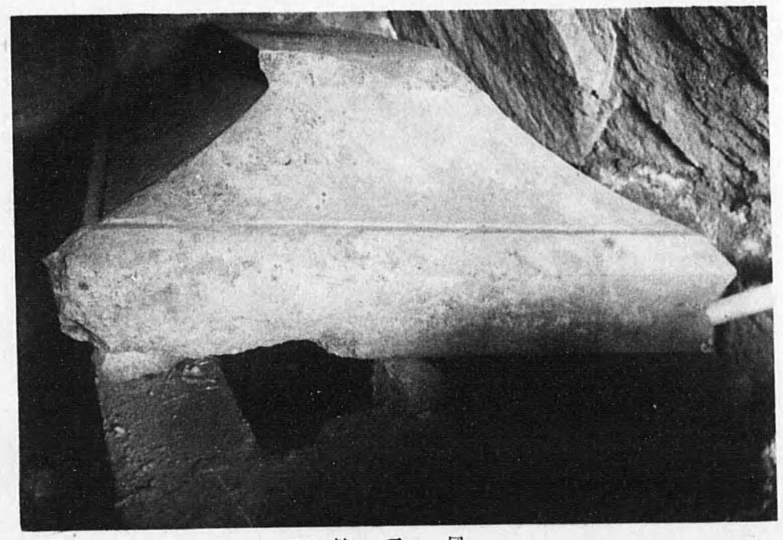
(乙)

菖蒲池古墳全景

菖蒲池古墳石室前面



菖蒲池古墳内石棺



同　石　棺（甲）